

俠客春雨傘

ト言附れば丑松助右衛門の雪駄を直す。忠右衛門、庄三郎立て、上り口まで見送り會釋して、原の如く復座する(但し與兵衛は、松永金平と引合中ゆゑ送りに立たず)金平は與兵衛に向つて

金平 番頭。度々の事で迷惑でもあらうが、實は手前勝手もと甚だ不如意で、老母は長の煩ひ、家内は産あげくと云ふので、至極の差支へ、附ては此玉落で引去て宜しいから、唯今壹兩貳分、用立て貰い度い
與兵(帳面をくりひろげて)折角の御談示で御座いまするが、御年賦の口と、お玉落濟のお證文とで三拾八兩壹分。此冬のお玉と申した所が拾五俵のお取分、とても振廻しが附ませんに由て、此所は御免を蒙りまする。

金平 そりやア手前も存じて居るが、そこを繰合せて用立てくれるのが、札差の働きと申すもの。現在家内が長の煩ひで、老母が産あげく、イヤくさうでは無かつた、家内が産あげくであつた。それを一ト通りの談示の様に断るとは情ない。エ、番頭どうか工夫を致してくれい。

ト口説立つれば。與兵衛は迷惑さうに算盤をバチくと弾いて居る。

此時大口屋の抱の薫頭金兵衛(皮羽織飛の頭の拵にて、下手より)出來り店先(二重下)の土間に

來りて

金太 ヘイ番頭さん、今日は、

與兵 ヤア金頭が、

ト一寸挨拶する。金兵衛は松永金平の談示を横目に見て、土間の米俵の上に腰を掛け店先の張番を任て居る。與兵衛は、一寸庄五郎に相談して

與兵 それじやア出來ません所を、私共が兩人で無理に工夫を致しまして、此お玉落をあてに、金三分ほど、御用立てませうが……

金平 たツた三分か？

與兵 たツた三分かと仰しやいまして、お借財が此通り、三十俵のお高で百貳拾五兩、其内てお玉落で頂ければ成ません分が、三拾八兩貳分と云ふ御大借、……

金平 分ツてるよ、手前の借財は、手前よく存じて居るよ。そこで、どうあつても金三分の御用立か。エ、よるしい然らば三分借用いたして參らう。

俠客春雨傘

俠客春雨傘

ト印形を出せば。與兵衛は、前の手續にて小切手を帳面に挟み、丑松へ渡す。丑松奥へ入る。與兵衛は證書に金高を書入れ、松平金平の印を押しながら。

與兵 松永様。この三分は、きつとお玉落の節に戴きますから、其時に成て、御異存は可ませんよ。

金平 宜よ、決して異存は云はないよ。三拾俵の小普請でも松永金平だ、安心して居るが宜いよ。

此時丑松は、前の如く金參分を持って来る。與兵衛は改めて金平に渡し。

與兵 金三分、儘に御用立まする。

金平 (金を懐中に入れて) イヤ大きにお世話であつた。

與兵 御機嫌よろしう。丑松どんお履物を……

皆々 御免を蒙ります。

三人とも一禮したる切にて、見送りに立たず。丑松は不せうぐに金平の駒下駄を直す。金平は元來し方(上手)に入る。

金兵 (跡を見送て) エ、與兵衛さん。貧乏御家人のくせに、乙ウ見識ばつて居るぢやアこせエませんか。

與兵 そうさ。あゝ云ふのが、藏宿の虫と云ふんだな。

庄五 それでも、此大口屋のお店は札旦那がみんな身分の宜いお方ばかりで、層が少ないから樂だが、外のお店を見れば、此節ぢやア、毎日々々小普請の虫が、ぞろ／＼と詰掛て、無理口説を仕て居るが、堪つたものぢやア無いよ。

金兵 そうでエすかネ。何商賣にも煩エがこせエますが、小普請の貧乏御家人は、藏宿の煩エて、今の松永とか云つた奴なんかア、お店の厄病神とても云ふのでこせエませうよ。

忠右 どうして／＼、松永さんなんざア上の口だ。此大口屋の札旦那で、逸見一角さんと云ふのが、高が百俵で、親御の代からの小普請、劍術は随分甘いと云ふ評判だが、酒ツくらいで博奕が好で、町奴交際を仕て、それは／＼困つた人よ。

金兵 ヘエそうでエすか。そんな旦那は、斷る理にあア参りませんか?

忠右 所が代々の札旦那で、どつさり貸込であるから、今更斷る理にやアいかないよ。

丑松 (向ふを見て) オヤ、噂をすりやア影がさす。番頭さん、見附の方から、逸見の厄病神が、ヤツつて來

俠客春雨傘

俠客春雨傘

ましたぞ。

忠右 ム、成ほど、ありやア逸見さんだ。此忙がしい中で、困らせるぜ。オイ庄五郎さん、今日はおまへ引受て下さつせエ。

庄五 どうして〜。私にやア手ごつちにおへませんから、與兵衛さんが宜しう御座いませう。

與平 わたしやア、たつた今松永さんで困つたばかりだ、おまへさん今度ア引受けるが宜いよ。

忠右 そうとも〜。マア庄五郎さん、先陣に向つて見なせエ、それでいかなけりやア私が二陣に出るからね。

此時向ふ(揚幕)より逸見一角(黒羽織、長大小、着流の御家人)出來り直に店(二重)に上れば

忠右 へい逸見さま、

皆々 入ツしやいまし、

一角 どうだ番頭。十月の小三月で、好天氣だのウ。時に番頭、逸見一角、はたと暮し向に差支たに由て、此お切米を引當に、當金貳拾兩用立てくれい。

忠右 へい、左様で御座いますか。オイ庄五郎さん、逸見様の御談示を、よく伺つておくんせエ。

庄五 承知しました。

濫々と帳面を繰返し、算盤を弾いて居る。一角は是を見て

一角 オイ若番頭、何をぐづく仕て居るのだ、算盤を弾いて見ずと、分りきつて居るじや無いか。僅か貳拾兩の談示だ、さつ〜と用立ツやうに、致すが宜いマ。

庄五 恐ながら、お高が百俵の所に、御蓄借御當座とて、めて貳百八拾七兩に相成て、一杯の上を、餘ッほど越て御座いますから、...

一角 用立ッ事は出來ぬと申すか?

庄五 お氣の毒で御座いますが、何分にも出來ませんで御座いまする。

一角 なぜ出來ないのだ。百俵の持高で、三百や四百の借財は當然だ、それとも百兩とか五拾兩とか申したら、斷るのも少しは聞えて居るけれど、高が貳拾や三拾のはした金、院號な事を申さずと、奇麗に用立てくれい。

俠客春雨傘

庄五 何分行届ゆきまませんに依て、御免を蒙りまする。

一角 (わざと立腹の體を見せて) エ、理わけの分られエ小僧じやア無いか。假初かりそめにも御直參ごぢきんの逸見一角が、自分て當家へ罷越まこりこし、折入て申入るゝのに、澄つした面を仕て、行届きませんとは、何の事だ？ オイ大番頭アノ青二才じやア相手にならぬ、貴様引受て貳拾兩、唯今用立つやうに取計らへ。

ト大聲にて云へば。忠右衛門は、落付顔にて、帳面を庄五郎より取て、一覽して。

忠右 逸見様、甚だ恐入まするが、此お借財高では、唯今庄五郎より申上ましたる通り、何分御用立かねまするに由て、此所は御免を蒙りまする。

一角 ナニ手前までが御免を蒙ると云ふのだなア。キツと貳拾兩、用立つ事は出来ぬと申すか？

忠右 ハイ何分にも行届きませんに由て、御免を蒙りまする。

一角 行届かぬと云ふのは、金があつても貸す事は出来ぬと云ふのだなア。よいッ。其方共では相手に成らぬ。當家の主人、大口屋治兵衛に面會いたして直談示ぢきんじを致す、治兵衛に是へ參れと申せ。

忠右 主人治兵衛は、御面會をお断り申上げまする。

一角 何だと？ 主人治兵衛は、御面會をお断り申上げますると、然しかと左様申したな。コレよく聞け、此逸

見一角は親代々の札旦那で、大口屋治兵衛は、此方より札差米を貰ひ、用達を相勤むる出入町人、おれが家來を差向けても、治兵衛は直に面會いたし、何の御用で御座りまするか、聞かねば成らぬ身分のもの、夫それに何ぞや、面會を断るなどは不屑至極、金のあるのを笠に着て、公儀のお旗本御家人を、ないがしろに致す不埒もの、其趣を此足で直に會所へ断つて、御目付衆へ申立つる、其時に相成て、ぢたばた致して後悔ごうかいするな。

ト大聲に罵ののしり、烟草盆を蹴散けちして、立に掛る。土間に扣たまつへて黙だまて見て居たる金兵衛は、忠右衛門はじめ一同が迷惑を察して

金太 ア、申し旦那さま。當家の主人は、唯今佛參ぶつさんにめエりまして、留守でござえますから、番頭衆がお断を申したので、何も家に居て、お目に掛られエと云ふのにやアござエません。それを彼是かれこれと仰しやるなア、お前エさんも、少し分られエじやアござエませんか。

ト喧嘩を買はうと云ふ息込にて云へば。一角も少し考へて

俠客春雨傘

一角 ム、そうか、治兵衛は留守だと云ふのか。それならそうと早く申せば宜いに。併し遠路の所を、出直して参るのも面倒だ。治兵衛が歸宅を待受けて、面談致すと仕やう(どつかと坐して大胡坐をかき煙草を吸て居る)

忠右 お待なさると仰しやつても、いつ歸りますやら時刻も知れず、

與兵 治兵衛が歸つて御面談をいたしても、とてもあなたの御談事は、

庄五 行届かぬ儀で御座いますれば、先づ今日は此儘で、

與兵 お引取を、

皆々 願ひまする。(ト返さうとする)

一角 エ、喧ましいわい。其方共に用事は無い(蹴散したる畑草盆を取て)どりや治兵衛が歸りを、一棧入して待受けやうか。やつと取ちやアうんとこなト枕にして、店先に大の字形に成て寝る。是を見て、

金兵衛が立掛るを、忠右衛門手附にて止る。庄五郎は奥に入る。一角は振向て

治兵衛はまだ歸つて來をらぬか。餘り遅いとあるならば、案内いたせ、治兵衛が居間に罷越し、巨燧

に入て休息いたすぞ。

ト枕にしたる畑草盆を忠右衛門に擲付て、立上る。此時格子障子の中に聲あつて

治兵 アイやお越には及びません、大口屋治兵衛、それへ参つて御面會を致しませう。

忠右 アノお聲は、

皆々 旦那様、

是にて一角原の座に復る、大口屋治兵衛(縞の羽織着流、藏前の町人風)障子を明て出來り、下手に着座して兩手を支へ

治兵 私が大口屋治兵衛に御座ります。あなた様が、逸見一角様であらうしやいますか、無調法もの、何とぞ御見知置を願ひまする。

ト懇懇に挨拶をすれば

一角 ム、貴様が治兵衛か、初めて逢ひ申した。先程より手代どもへ申談じた金談一條、貴様宜く取計つて、貳拾兩の金子唯今用立つやうに致してくれい

俠客春雨傘

ト横柄に云へば。治兵衛考へて

治兵 あなた様の御勘定あひ、いかゞ相成て御座りますか、一應取調べまして（忠右衛門が差出たる帳面を見て）逸見様、御覧の通りの御勘定で御座りますれば、此上の御用立金は、ひたすら御免を蒙りまする。

一角（刀を引よせて居合腰になりて）ナンダ貴様までが御免を蒙ると。コレ治兵衛、よッく聞け。其方は數代此方の札差を勤めながら、現在此方の難儀をも差構はず、札旦那の御家人をば、見す／＼路頭に迷はせて、相済むものと心得居るか？

ト詰掛れど。治兵衛は落付て

治兵 是は仕たり逸見様、失禮ながら、お詞とも存じませぬ。多分番頭等より申上たて御座りませうが、御借借と御新借の口々を、悉皆勘定いたしますれば、此節の様に相場の低い砌では、當冬のお玉落を、残らず頂戴いたしても、此通り、お利息にも引足りませぬ（と傍の算盤を取て、自分で彈て見せて）左様致しまする時には、恐乍ら日々の御飯米の的面に御差支と存じまするゆゑ、お借財の元金は、此

通り残らず置する、御飯米に差出しましたる餘分をば、聊かづゝ御利息の方へ戴いて、御勘辨を仕つて居りまするは、憚ながらあなた様へ對して、此治兵衛が格別の御奉公、是が即ちあなた様を路頭に迷はせ申しませぬ慥な證據。なんと、左様では御座りませぬか？

一角 ム、

治兵 それを只今御談示に任せ、此上の御用立金を致しまして、御飯米まで差引ましては、第一、御藏前札差仲間の議定に外れ、随つて藏宿渡世も相立ちませぬ、それでも違つてと仰せられては、聊か御無駄の様に相聞えまする。

一角 ナニ無駄だと、何が無駄だ？おのれ、喙青い小二才の分際で、理屈らしく申立て、おれに耻辱を與へおつたな。

ト云ひながら、前なる算盤を取て立上り、治兵衛の眉間を撃つ。眉間より血流る。治兵衛は其算盤を引たくツて、持て立上る。一角も刀の柄に手を掛る。土間の金兵衛、天秤棒をもち。寅藏、卯吉棒を持て立掛るを、忠右衛門、與兵衛制する。此時障子の内より、大口屋治左衛門（羽織着流）

俠客春雨傘

庄五郎を随へて急ぎ出來り、兩人の間に割つて入り

治左 逸見様、私は大口屋治左衛門で御座りまする、伴の無調法、何とぞ御勘辨を願ひまする。御用立金は、恐ながら私が仕りまする。

ト懐中より金子の包を出せば。一角は請取て

一角 ム、了見の致し悪い奴なれど、そなたに面じて勘辨いたす。コレ治兵衛、以後をきつと謹みなれ。

ト嘲弄して立上り、土間(平舞臺)に下る。治兵衛は猶も怒りに堪兼て立掛るを、治左衛門止め。金兵衛等を與兵衛、庄五郎制する。忠右衛門は一角を見送る。

治兵 餘りと云へば、

一角 ナント申す。

治兵 衛氣を入替へて居はり、手を突て

治兵 逸見様、御機嫌よろしく(と云ふを木掛にて)入らしやいました(と無念を忍びたり。(此道具廻ル)

(二) 同 家督讓の場 同日の事

俠客春雨傘

此は大口屋隱居奥座敷(本舞臺一面の平舞臺)にて、正面上手寄り九尺の床の間には三幅對の懸物を掛け、花入には紅葉と寒菊を挿け、床續き地板の連棚には、料紙硯箱など置き、其次二間の所は、四枚建の襖(出入)鼠地に金にて雀形の唐紙、上下とも例の所に同じ唐紙二枚建(出入)其他は都て鴨居の上下共、根岸の塗壁、一枚半の腰張り。尤も上手よき所に下地窓。下手よき所に中窓を附け置く舞臺には紺縁の薄縁を敷き。上手には座蒲團、手あぶり、烟草盆、火鉢、茶道具菓子器等を置き、主人着座の用意。但し此外に客設の火鉢烟草盆二ツばかり置きたり。

此に隱居治左衛門の女房(即ち治兵衛の繼母)お民(ふけたる女房の拵)治左衛門の次男清三郎(治兵衛の異母弟(綺羽織着流息子の拵)にて火鉢の傍に居り。小間使おのぶ(烏田の女中)其側にて烟草盆の火をいけて居る(道具留る)

お民 おのぶや。もう大旦那が、お奥へ入ッしやる時分だから、お前、お烟草盆の火をいけたら、此土瓶をあけて置きたよ。それから御酒の支度は出來てるか、臺所へ往て聞て來なよ。

おのぶ ハイ畏りました。(ト火入を煙草盆に入れ、茶盆を持って下手には入る)

お民（耳を飲^まて）ネー清三郎。お店の方が先ツきから騒がしい様だが、何か間違でも出来たのじゃアあるまいかネエ？

清三 そうで御座いますネ。此節は玉時分^{たまじぶん}で御座いますから、随分札旦那には無理な掛合を持込んで、店のものを困らせるお方が御座いますよ。何なら私が一寸お店へ往て、見て参りませうか（と立掛る）

お民 お止^とよ。今におのぶを仲の間まで見せにやるから。何に親子兄弟の中でも、今じやア兄さんの治兵衛さんが御當主で、お父ッ様は御隠居のお身分、仲の間へ出て入らつしやるのは、兄さんのお手傳^{てだて}をなさるだけ、それにお前が、用も無いのに顔出しをしちア、兄さんへ對して私までが宜^まないよ。

清三 大きにそうで御座います。夫だから、私しもお店の事に限ッちやア、お兄様^{おにいさま}のお指圖^{さしず}の無い中は、けして手出しを仕ない事に致して居りますよ。

お民 それが宜^まい。兄さんが私をばおッ母さま〜と、あの通り大事に仕てくれて、お前を一ッ腹から出た兄弟の様に可愛がつて下さるから、お前も亦その義理で、遠慮がちに仕て居ないじやア、可^いませんよ。清三 ありがたう御座います。私もつねからその氣で居りますが、お父ッさんの御留守のときに成ると、

お兄様がお金藏^{かねくら}の鍵も、奥服場の鍵も私に渡して、お金の出入を任せておさせなさるにやア、困りますよ。

お民 サア、夫だから猶更扣へ目に仕ないと、世間で彼是^{かれこれ}と言はれますよ。

清三 そりやア仰ッしやる迄も無く、次男は奉公人同様の積りて、言語^{ことば}も其通りに仕て居まするのに、一昨日もお店の忠右衛門が私しに、清さま、あなたかう〜と申して居たのを、お兄様がお聞なすツて、大勢の中で顔色を變へて『番頭初め店の者が、なぜ清三郎の事を若旦那と云はないのだ。たとひお爺さまの言附でも、當主のおれが常々言渡して置たのに、それを用ひぬとは、怪^けしからぬ事だ、以來とも清三郎の名を云ふと承知しないぞ、おれは皆が知ツての通り、女嫌^{おんなきら}ひて女房は無し、子供は無し、此家督も終には清三郎の者だ、清三郎も其の積りて、おれ同様に、番頭手代はじめ呼捨に仕て、若旦那らしく仕なけりやア可^いなからうぜ』と酷^{ひど}い見脈^{けんみやく}のお小言で、私も困り切りました。

ト治兵衛の口氣^{くわいき}を眞^ま以て話せば

お民 そうかい。そうして見ると兄さんが『私は女嫌ひだから、女房を持ちまするのは何と仰しやつても、

御免を蒙りまする』と、あの孝行な人が、縁談の話に成ると、お父さんの云ふ事を聞かつしやらぬは、私への義理立て、お前を家督にする下心であるかも知れぬが、それじゃア、私とお前が濟まないねエ。

清三 私だつて、義理にもそうは出来ませんよ。

ト母子が談して居る所に。大口屋治左衛門（下手より）出来りて、黙然として着座する。

お民、清三郎は會釋して

清三 お父ツさま、今日は大層お引けがお遅う御座いましたネ。

お民 それに、お店の方が、今しがた、大層騒がしう御座いましたが……

清三 何か間違でも出来たのでは無いかと、おツ母さまも氣を揉んでお居てなさいました。

此前に小間使のおのぶは、茶道具を持つて（下手より）出て來りて、程よき所に居る。

治左 ナーニ、別に間違も無かつたが……。オイのぶや、お茶をくれい……。アア治兵衛はわづか一年の内

に、大層勘辨強く成たよ。あれじゃア、おれが居なくつても、大口屋の身代は大丈夫だ。

お民 そりやア、どういふ譯で御座いますねエ？

治左 今にわかるよ。コリヤ清三郎貴様も兄貴を見習つて、勘忍が第一だぞ。他家へ養子にいつても、兄貴

のお陸で分家をさせて貰つても、勘辨強くならなけりやア、宜い町人にやアなれないぜ。

清三 有がたう存じまする、是からしては猶以て、お兄さまの御勘辨強いのを、見習ひまするで御座りませう。

此時治兵衛（前場の拵）眉間に血汐のじみたる痕を見せて（下手より）出来れば

お民 治兵衛さん、お出なさいまし。

清三 お兄さま、お出なさいまし。

ト挨拶すれば。治兵衛は會釋して座に着き、治左衛門に對ひて

治兵 お父ツさま、唯今は御心配を掛けまして、相濟みませぬ、御陸を持ちまして穩かに事濟み、有がたう存じまする。

治左 お前もあの亂暴に逢て、さぞ腹も立たらうが、よく辛抱した、よく勘辨した、我子ながら實に感心した。今も其噂を仕て、清三郎に教訓をして居た所だつたよ。

治兵 どう致しまして、夫と申しまするも、全くはお父さまが、おいでなすつて下すつたからで御座います。

ト禮を述べる。お民と清三郎は、治兵衛が眉間の疵、および羽織の袖に血痕のにじみたるを見て、打驚きて

清三 オヤお兄さま。あなたのお額はどうなすつたので御座いますか？

お民 そう云へば、眉間の疵、羽織の血痕？

治左 それが今いつた勘辨強い治兵衛の辛抱、併しお前、額が痛むだらうが、早く藥を附けたが宜げ。

治兵 ナーニ僅かの打傷、藥を附ける程でも御座りませぬ。

お民 一體どうしたので御座いますねえ？

治左 サア其譯と云ふのは、今店へ來た逸見さまが……

ト話し掛るを冠せて

治兵 そのお話は、ゆるりと跡で私から致しませうが。時にお父さま様。改めて一ツのお願、何んと、御聞入

なすつては下さいませぬか？

治左 ハテ改めて願ひと云ふのは？

治兵 別儀でも御座りませぬが、私は今日限り隠居いたして、此大口屋の家督をば、此に居ます弟の清三郎へ譲り度御座ります。

治左 エ、何じゃ？清三郎に家督を譲つて、隠居し度と云はつしやるか？そりや成らぬ、成りませぬ。

治兵 ては御座りませうが、どうあつても御承知を願ひまする、(と思ひ切たる體にて云へば)

治左 (思入あつて) ム、扱は、余が此間だ、お民と二人で、清三郎に別家させ度と、相談して居たのを聞いて、余への面當に、そんな難題を云ふのだな？

ト立腹するを。お民は側にて取なして

お民 ア、申し、そんな事を、あなた仰ツしやつて……治兵衛さんに限つては、何てあなたに、面當がましい事を云はれませう。是には外に仔細のある事。これ申し治兵衛さん、お前へさんは、此清三郎に義理立して、家督讓を仕度と仰しやつても、第一お父さま様が御承知にも成らず、又私が目の黒い中は、

どんな事があつても、清三郎に其様な不義理な事はさせぬに由て、どうぞそんな事を言はないで下さりませ（と眞實を見せて云へば）

治兵（涙を流して）お父ッ様、おッ母様、親身の親子兄弟中で、何の面當だの義理立だのと云ふ事が御座りませう。一昨年三月、此大口屋の身代を譲られて、當主に成て足掛ケ三年、札差家業がつくく否に成て、ヨウ連も堪へ切れ無いからで御座います。

治左 何と云はッしやる？

治兵 お父ッ様、よくお聞下さいまし。總別大家や金持になり度と、我人共に望むのは何の爲、人にも立られ、世間に肩身を廣く仕度と思ふからで御座りませう、夫が出来ぬ曉には、大口屋治兵衛が、三十萬兩の身代は思か、三百萬兩が三千萬兩の大分限でも、一文無し貧乏人と、少しも變り御座りませぬ。今も今とて、おッ母様がお尋なされた眉間の疵、悪小普譚の逸見一角、無理強談の押付掛合、店の者の迷惑を見兼まして面會いたし、用立金を斷わつたれば、亂暴無頼の一角が、算盤おつ取り打つたる手疵、先は御家人札旦那、こちらは町人札差と云ふ悲しさに、手向ひならざる其上に、疵を受ての誤

り閉口、内濟金を此方から出して、やつと濟ませた意くらなき、今日と云ふ今日、我身て我身に、愛想が盡きて御座りまする。

お民 その疵は、そうした譯でありましたか。

治左 併し、そこを我慢いたしたが、天晴れ辛抱、この身代を大切じゃと思ふから。

治兵 サア其身代大切に、お父ッ様に、御苦勞を掛けまいと思つた故。持たが病の聞かぬ氣は、水道の水を飲んだが因果、百萬石の加賀様でも、天秤棒を肩にしたばていふりでも、五分と五分で往來を感ばつてあるくが江戸の花その眞ん中で育つた治兵衛、いつ何時間違つて、堪忍袋の緒が切れて、暖簾に疵が附からぬ知れぬ。お藏手代や輕御家人、逢ふ人毎に頭を下げ、其お陰で商賣するのは、清三郎見た様な、おとなしい人物に限りまする。シャに由て、家業に不向な私は、一日も早く隠居して、てツきり適當つた清三郎、それに譲るが家の爲、御先祖様へも孝行と申すものては御座りませんか？

清三 そう仰ッしヤツても私には、此大口屋の御家督は……

治兵 相續が出来ぬと云ふのか？ム、それじゃア、明日にも此兄が死んだ後でも、家督を續がず、他人を養

子にする積りか？

清三 サアそれは？

治兵 それ見い、そんな不幸な奴が、どこにあるものか。マア黙ッて居て、余がする通りに任かせて置きなせエ。そこでお父ッ様、私が此通り、札差家業に愛想が盡きて、隠居が仕度と云ひます上は、思ひ止まる私でも御座りませぬ。又私が當主では、此大口屋の繁昌は、覺束なう御座りますれば、清三郎へ家督譲り、どうぞ御承知を願ひまする。

と精神おもてに顯はれて望みければ。治左衛門は、腕を又き、暫し默然として考へたりけるが、稍あつて膝を打ち

治左 ム、宜しい、承知だ。何にもお前の望み通り、此大口屋はお前の身代、弟へなり誰へなり、譲ッて隠居を致すとも、心の儘にするがよからう。

治兵 それじゃア、私のお願ひ、御承知なすつて下さりまするとな。エ、有がたう御座りまする。

お民 エ、それじゃアあなたは、治兵衛様の若隠居か？

治左 オ、望み通り、させてやる。

清三 そりやア又どうした理て？

治左 別に理とて無いけれど、悴の治兵衛は、子供の時から、負るが嫌ひの江戸ッ子氣性、幼少からして武藝すき、堀内源太左衛門殿の弟子になり、皆傳免許の劍衆遣ひ、狂ッた事なら一寸でも、其儘通さぬ彼れが氣性、今日の様な事があつては、成程札差家業は、ふッつり嫌に成つたであらう。處で治兵衛お前が望み通り隠居して後は、どうする所存じやな？

治兵 弟の清三郎、當年正しく廿一歳、讀書、算盤、人應對、立派に出來ます男ゆゑ、清三郎へ譲りますれば、お父ッ様には、御苦勞ながら是まで通り、御後見を願ひまする。

治左 ム、そりやア承知したが、肝腎のお前の所帯は？

治兵 へエ私の所帯で御座いますか？私はどこか一軒小いさな家を、清三郎に貰ひまして、樂隠居を致しませる分の事。

お民 じやと云ッて、あなたの御身代を、

治左 別に割て相應の分家をせれば、
兩人 成まいがなア?

治兵 アイヤ、そりやア私と清三郎との相對話、必らずお構ひ下さりまするな。…時に清三郎、今日改めて此家督、余からしてお前に譲るが、札差家業の藏宿商賣、勘忍が專一だぜ、勘忍が強くなけりやア、大口屋の身代は持ッ事が出来ないと、不斷それを心に思ひ、辛抱我慢をせれば成りませぬぞ、其外の事は、お父ッ様が附て居らッしやれば、余が云ふにも及ばぬ事。

清三 有がたう存じまする。

治兵 そこで清三郎、一昨余年が此大口屋の家督を請取ッた時には、身代合せて貳拾七萬八千兩、その中で廿萬兩を資本に立て、殘金はお父ッ様からお預り分に仕て置たが、今では凡そ三拾萬兩以上の身代。お前の分が貳拾萬兩、御兩親様の分が五萬兩、余の分が五萬兩と三口に立て、三口ともお前が預つて御兩親様へは御隠居料を差上げ、余には其五萬兩だけの利息をば、毎年渡して下さらぬか?
お民 エ、御前さんの別家高が、アノたッた五萬兩で?

治兵 何の、隠居をしての一人暮し、五萬兩の利息が年一割で五千兩、私にやア多過て、困る位で御座いますよ。エ、清三郎、それで御前承知したか?

清三 承知どころか、お兄イ様の御思召し、有がたいやら、恭いやら、恐入つて御座いまする。

治兵 シテお父ッ様、おッ母様には、御不足は御座りませぬか?

治左 何の不足があらう、我子ながら其方が潔白、無欲のはからひ感心して居るぞいのウ。

治兵 それじゃア話しはそれて極ッた。善は急げだ、清三郎、今日からしては、お前が直に大口屋治兵衛、余は隠居で、俳名を其儘に、大口屋曉雨。へいお父ッ様、おッ母様、治兵衛さん、おめてたら御座いまする。

ト祝辭を述べれば。治左衛門はじめ宜しく挨拶して後に

治左 さて治兵…

治兵 モウ治兵衛じゃ御座いません、曉雨で御座います。

治左 それじゃア曉雨。其方は是から隠居して、何が楽しみ?

治兵 サア、一本立の曉雨となれば、弱きを扶けて強きを挫き、此藏前を初とし、江戸中の町人衆、裏店小
店に至るまで、難儀を救ふが此身の樂み。

拵民 エ、それでは、あの俠客の町奴に？

治兵 イ、ヤ男は立てゝも町奴には成りませぬ、男は吝な野郎でも、大口屋曉雨、豈か町奴に立ち交り、ゆ
すり威かし喧嘩買、博奕渡世のかすりとり、そんな真似は金輪際、致す事じゃア御座りませぬ。決し
て御案じ下さりますな。

治左 それやア此爺が請合ツた、皆も安心いたして居るがよい(と考へて、ツツト立ち奥に入り、長脇差を袋
に入れたるを持出して)サア曉雨、この脇差は、御先祖から傳はツたる大兼光の一尺七寸、今改めて
此治左衛門が其方に譲るぞ。

治兵 エ、其大兼光を？(と取て戴きて)有がたう御座います、此曉雨が男を立つる一生の守り、必らず大
事に致しまする。

お民(氣遣ひて)もしやその脇差で、治兵衛さんの身の上に……

治左 ハテめつたに抜かぬ封印は、

治兵 心に附けて御座りまする。イヤ重ねくの御高恩、人は一代名は末代、これから男に(と立上るを木
の頭)なれまする。

治左衛門は立派な男よと見とれ。お民清三郎は治兵衛の恩に感じ、猶その行末を案ずる。

(拍子幕)

第二幕

(一) 向島喧嘩の場 享保十六年辛亥正月廿六日午後

此は向島三圍の邊にて、正面より上手少し奥深に廻つて、向島の堤(高足二重)其の前(平舞臺)は
地方にて、奥は隅田川の心なり。堤の邊りの青草は既に其の芽を發すれども、兩傍の櫻は未だ苔を綻
ばさず。下手には堤の上り段ありて、其先に葎簀張の水茶屋あり。正面、川を隔て、向ふは、山谷今戸
邊(遠見の書割)を見渡したり。

俠客春雨傘

此に堤の上には伊兵衛(町人) 呂中(隠者) 半七(町家の息子) 床几に腰を掛け。茶店の娘おいな(島田) 茶を汲て出し、雑話の最中なり(幕明く)

伊兵 去年は、閏があつたせいか、正月でも大そう暖かて御座いますねエ。

呂中 左様さ、大そう暖氣なので、龜井戸を始として、此向島あたりも、まう梅が満開で御座りますよ。

半七 それじゃア、御隠居様は、梅見にいらッしやつたで、御座いますねエ。

呂中 何にも、風流の樂みは、梅見に限るよ、櫻になると俗物が出掛けて、雑沓するのに困り切るね。

伊兵 そうでございますかネ。私なんぞは、寒い時分にわざと梅を見に参るよりは、三月に成て櫻の盛を見るが樂み。

半七 そりやア夜櫻から朝櫻、夕櫻となるのが、一番面白うございますね。

呂中 殊に北廓の夜櫻、ものいふ花が面白からうが、あの花も見過ると身の毒になるものじやて、

伊兵 大きにさうて御座いますね。イヤモリ彼是七ツ近くに成るだらう。エ、姉さんさうだらうねエ?

おいな ハイ、先きに長命寺様の八を打ましたから、モウ七ツに間は御座いますまいよ。

半七 そうかね。夫じゃア伊兵衛さん、そろく〜と出掛ませうか? 御隠居さま、ごゆるりと(と立掛れば)

呂中 イヤわたしもそこらまで御一所に参ると仕やう(三人が宜しく茶代を拂つて立つ、

おいな 有がたうございます、お静かにいらつしやいませ。

三人は下手に入る。おいなは、そこらを片付けて居る。

此時(向ふより) 逸見鐵心齋(序幕の逸見一角なり。五分月代、羽織着流、大小) 門人、入谷丹五郎、根岸松兵衛、田畑彌九郎、並に子分、山猿の赤藏、猪熊の荒七、狂犬の武者平、貉の無垢助(門人は大小。子分は一刀尺八の町奴) 或は梅の枝を荷ぎ、或は笹折を提げ、或は瓢箪を携へて梅見歸りの酩酊にて出で來り(花道に) 止りて

鐵心 ナントかう打揃つて、ぶら〜と野掛を致すは、よい心持だのサ。

丹五 何にも先生の仰せの通り、天氣は暖で、風は無し、

松兵 堤の景色も春めいて、陽氣になつた彼岸まへ、

彌九 家にござるも退屈と、俄に出掛けた此梅見、

俠客春雨傘

俠客春雨傘

赤藏 龜井戸邊から柳島、こしらあたりに来て見れば、

荒七 今を盛りの梅の花、われ劣らじと咲匂ひ、

武者 低い鼻まで高くなる、旦那のお供の梅見酒、

無垢 一杯機嫌で此通り、人中押であるくのは、

丹五 宜い心持で、

皆々 御座いますなア。

鐵心 それで自分も悦ばしい（と茶店を見て）幸ひあれなる頃の茶店、一服いたして休息しやうか。

丹五 それが宜しうござりませう。

鐵心 サア参ると致さう。

丹五 まづおいて、

皆々 なさりませう（鐵心齋先に立ち、打ちつれて茶店に来る）

おいな入ッしやいまし。まアお掛けなさいまし。唯今お茶を差上げまするで御座いませう。

鐵心 茶はゆツくりて宜から、早く煙草の火くれい。

おいなハイ、く畏りました。

ト煙草盆に火を入れて出す。門人等床儿せうじを持出せば鐵心齋は腰を掛けて

鐵心 こりや赤藏、その瓢箪ひょうたんにまだ酒が残つてあるか？

赤藏（瓢箪を振て）まだ此通り澤山残つてございまする。

鐵心 然らば此景色を肴まかなにいたし、今一献いっけん運らさうか

ト門人に酌しやくをさせて酒を飲み居たり

此時上手の奥より天野靱負あまのゆゑ（大若衆、振袖の伊達羽織、袴、大小）奴黒内やつこくろない（伊達奴）を召具めいぐして出

て來り（よき所に止つて）

靱負 なんと黒内。いつ見ても向島はよい景色だのウ。

黒内 左様でござえますホ。若旦那様、御覽なせよまし。あの向ふの森が待乳山まちちちやまで、こちらが觀音様の五重

の塔でござえますぞ。

俠客春雨傘

靱負 そうか。それではあれが、真崎の稻荷じやのウ。

ト地方の風景を立ながら眺望して居る。是を見て、鐵心齋は丹五郎に呷けば、丹五郎心得て、靱負の側に來り、一禮して

丹五、ム、天ばれ美しいお若衆さま。我々共は、音に聞ゆる鶴鶴組の者で御座るが、今日は梅見遊山の浮れあるき。幸ひ我等が持參の酒、一口其方様に進ごたい。侍冥利若衆冥加、あれなる茶店で夕酒もり、御案内を致す程に、サア御入來が願ひたい。

ト靱負の手を取れば。靱負は振拂つて

靱負 その御芳志、忝うは御座れども、唯今は急ぎの歸り路、殊に宅も遠方なれば、お招き御辭退いたしまする。

ト下手の方へ往きかゝれば、松兵衛彌九郎出來つて

松兵衛 イヤ左様に御遠慮召さるゝな。袖ふり合ふも多少の縁。

彌九 侍同志が出會て、頼みある中の酒宴。さうすげなく斷るは

兩人 武士の本意で御座るまい。

丹五 殊にかしこに居らるゝは、鶴鶴組のお頭株、一手の差圖も召さるゝ方が、お若衆に杯ささうと言掛て、斷れては男が立たぬ。是非とも御承知、

三人 召されませう。

ト三人にて靱負の両手を執りて、引張れば。靱負は振ほどきて身構をなして

靱負 ヤア狼藉なり、それなる方々。何組かは存せぬが、見ず知らずの方々に、杯もらう手前で御座らぬ。妨いたさず往來を、きつとお通しなされぬか？

ト聲を勵まして云へば。三人は立塞つて

丹五 ヲハ、ハ、何と斷り申すとも、此方も侍男だてだ。

松兵衛 所望を聞て貫はにやア、此方の顔が立ち申さぬ。

彌九 それとも達て通り度ば、

丹五 通る様にして、

三人 通らッセエ。ソハ、ハハ。

ト嘲り笑ふ。此前より奴の黒内は頻に腕をさすツて、進み出やうと仕たるを、靱負制して居たりけるが、今は堪らず黒内ずツと前へ出て、靱負を後に圍つて

黒内 エ、聞分の無エ瘦侍エ。若旦那の忍びのお供、喧嘩はなねエ法度だと、堅エ掟をぶん守り、辛抱して勘辨すりやア、附上ツた其こたく。此堤の往來を通さねエとぬかすなら、此奴がかうして通るソ

ト拳を固めて、丹五郎を打てば

丹五 おのれ素奴め何を仕やがる。

ト丹五郎松兵衛彌九郎の三人の中に、黒内を取籠て打て掛る。黒内は此を先途と争ひたれども、力敵せずして取押へらる。三人は黒内を隅田川の水中（舞臺正面の奥）に投込みて

三人 さまア見やがれ（と笑ふ）

此前より堤下（平舞臺）にては赤蔵荒七武者平無垢助の四人、鐵心齋の差圖にて、靱負に取て掛る。

四人は各々尺八、靱負は扇子にて防ぎ居たるが。堤の上にては丹五郎等、今しも黒内を水中に投入れて

丹五 サア邪魔な奴は片付たい。其若衆は手前共が、

三人 受取たぞ。

ト丹五郎等三人、刀に反を打て、三方より靱負を取圍む。靱負も今は是迄なりと思ひ、扇を捨て、刀の柄に手を掛けて、双方睨み合ふたる折から。彼方よりして

玄之（揚幕の内より）待たくお若衆。其刀必らず抜かれな。

ト聲を掛けて今西玄之進（老躰、編笠、大小、着流篋々しき病後の浪人）小き包を携て出來り直に其場に（舞臺）に馳せ入り、編笠を脱捨て、雙方の間に割て入り。

御雙方ともお待ち下され、某は通り掛りの道行もの、此喧嘩、事の起は存ぞぬが、意趣遺恨あつての事ともお見受申さぬ、言はゞ當座の行掛り、何と某へお預けは下さるまいか。御雙方、何で御座りますな？

靱負 お扱ひ下さるとあるならば、相手は知らず、某は異議なく貴殿へお任せ申す。

玄之 忝う御座る。シテ方々にはいかけて御座るな？

丹五郎等は、玄之進が病あげくの老躰にて、衣服大小の粗末なるを見て、心にあなどりて

丹五 瘦浪人の案山子どの、用でも無い扱ひして、腰骨を挫かうより、

松兵 早く堤下に道込んで、少さく成て、

三人 すッこんで居るが宜ワ。

玄之 いかにも某、瘦浪人では御座れども、通り掛ッて此扱ひ、何とぞ枉て某へ、お預けなされて下さるや

う、お頼み申す。

丹五 エ、喧しい扱ひ沙汰、聞く耳持たぬワ。

玄之 デモ御座らうが……

丹五 まだ申すか、其處退ずば、かうするぞ。

ト玄之進の胸倉を取れば。玄之進引外して筋斗を打たせる。松兵衛、彌九郎が引續いて組付を、其

手を執て左右へねぢ上て

玄之 ヤア無禮なり方々。最前よりして、是なるお若衆主従を、相手となして無躰の狼藉、いま又我に手向

ツて、尾籠の振舞、この上は某がお若衆の助太刀、其銚刀のなまくらもの、扱たくば扱て見るゑエ。

ト左右に投付け、あたりの松の杭木を手早く取て、身を固むれば

靱負 お待なされ御老人。某ゆゑに貴殿をば……

玄之 お案じあるな。年こそ寄たれ、高の知れたる相手の侍。それに挫へて見物召されい。

丹五 うぬ、よくも手向ひ、

三人 仕やがつたなア

ト三人は刀を抜つれ研て掛る。玄之進は松の杭木を得物となし、三人を相手にして防ぎ戦ひ、身近くも寄せ付けず。赤蔵荒七武者平無垢藏の四人は、鐵心齋の差圖にて、脇差を抜鬪し、玄之進の後の方に廻る。是を見て靱負は、櫻の力木に立てたる竹を取て槍になし、赤蔵等を相手にして戦ひければ、丹五郎等は刀を打落されて、或は倒れ、或は逃去つたり。是を見て鐵心齋は刀を抜て

俠客雨傘

鐵心 老人覺悟

ト斫て掛り烈しく戦ふ。玄之進は隙を見て、鐵心齋の刀を打落し、持たる杭木にてしたゝかに打つ。打たれて動と仆る。同時に赤藏も靱負に胸を突かれて氣絶する。

玄之進は是を見て、あたりを見廻して

玄之 ヤレ危ない事で御座つた。お若衆、お怪我は御座らぬか？

靱負 幸ひ怪我は致しませぬが、御老人には？

玄之 無事で御座る。サア後詰の者の参らぬ中に……

ト編笠取て冠り、靱負と俱に、急ぎ向ふに入る。鐵心齋は氣が附て起上り、あたりを見廻し、刀を鞘に納め、丹五郎其外の者共に活を入れて呼起し

鐵心 いづれも正氣に相成つたか？

丹五 先生、いま出會つた瘦浪人、

鐵心 ム、見掛に似合ぬ彼奴が腕まへ、

松兵 天狗の様なはたらきは、

皆々 何もので御座りまするな。

鐵心齋は、玄之進が落したる包を開き、書付を見て

鐵心 ム、そんなら彼奴は……

ト無念の體にて向ふを睨むれば。丹五郎その書付を覗きに掛る。鐵心齋、氣が附て、其書付を後に廻して（木ッ掛）

ト膝を打つと俱に、打傷の疼むを堪らへて怒りの體をなす

（拍子幕。すぐに引返す）

(二) 松葉屋二階惠金の場

享保十六年辛亥正月廿五日夜

但見る（本舞臺一面の平舞臺）正面一間の床の間には、料紙硯箱等を飾り、花瓶に櫻の花を生け、其次一間の地板には、琴三味線棋盤將棊盤等を飾りたり。塗壁にそびては、衣桁に花やかなる打掛等を

俠客春雨傘

俠客春雨傘

掛け。夜具棚、塗篋等あり。下手は塗骨障子にて見切り、其外は廊下なり。此仕切中は薄縁を敷詰
め。座蒲團火鉢煙草盆燭臺等を配置したり。是れ新吉原角町松葉屋の二階なる、傾城丁山の部屋なり
此に丁山の新造若梅、吳竹の兩人。禿千鳥、并に判問善孝、俳階師蛙吟（坊主） 鳶頭金太郎等居並び
て（下手にて）酒宴最中なり（幕明く）

若梅 千鳥どん、大妓はどうさつしやつたか、？ 見申して来なよ。

千鳥 アイ／＼（下手の奥に入る）

金太 オイ吳竹さん。旦那はお湯だが、誰かお附き申して居るのかねエ？

吳竹 アイしのぶどんがお附き申て居るから、今にわちきがお迎ひにいくんさますよ。

善孝 それじゃア、吳竹さん、御苦勞さまながらお願ひ申します。

吳竹 承知さます（下手に入る）

若梅 宗匠さんへ、をかした事を聞く様だが、あの曉雨さんは、あんな好い男のくせに、なんて女嫌ひさま
すだらうねエ。丁山さんの大妓も、しみ／＼氣を揉て居なますよ、ほんに憎らしい曉雨さんですれエ、

蛙吟 どうかして少しや女ずきにならツしやる様なまじなひはありまへんかねエ？

蛙吟 どうもさう云ふまじなひは、僕も心得申さぬが。善孝子、貴公などは此道の博學多才だから、知て御

座るだらうてな？

善孝 ハ、ア私だつて其まじなひは知りませんねエ、それを知つて居る位なら、疾に自分でまじなひを仕
ますけれど、

金太 そりやア無駄な詮議だ。こつちの大將は、藏前きつて評判の女嫌ひ、夫人さんも邪魔だつて、まだ持
たれエ程の變り物なもの、まじねエなんかど利ものかい。

若梅 それが、なんて三日にあげず、此吉原へ來さつしやつて、大妓の所へ來なますだらうねエ？

金太 その理は、おいらがよく知てるが、マア斯だ、旦那が常々仰しやるには、余が家に出入をする學者文
人宗匠畫伯、その人数はあまたあれど、追縦輕薄お世詞だら／＼、太鼓持も同じ事だ、齒が浮く様な
諂エを、聞て居るのが癢に障る。所が吉原のおいらんは、遊女でこそあれ、氣位がピンとして、大名
だらうが金持ちだらうが、氣に喰なけりやア口も利かず、つんと澄した鷹楊枝、その代りに氣に入り

俠客春雨傘

ヤア、良友だちを目ツけた氣で、すき自儘の勝手ばなし、微塵少しも諂エの無工所が心證だ、それが面白くツて、おいらア時々吉原へいつて其此の大妓を買なじんで居るんだと且那のおはなし、それだから此の丁山のおいらんが、いくら氣を揉んで、尋常エのお客の様に枕を代させやうと思つても、そりやア逆もむだの事ツだ。

善孝 成ほど、こりやア頭のおつしやる通りでござませう。私も去年から此通り御最負になりますがい、つしか一度もをかした事を拜見いたしませんよ。ねエ宗匠、お前さんもそうでござませう。

蛙吟 成ほどそうだねエ。併し引手あまたのもの言ふ花、それを手折らぬと云ふのは、アツ天下のむだいなア、のウ金太先生。

金太 またきまり言て居らア。時に若梅さん、丁山さんの大妓とこへ、釣鐘庄兵衛と云ふ男が、此節客に成て来るじゃア無エか？

若梅 ア、知て居さつしやりやア言ひますが、實はそうさますよ。それに附て、もし差合ても無けりやアよいがと、大妓も氣に仕て居ますよ。

善孝 ナニ、曉雨且那と釣鐘の親方とは、お突合は無い中だから、差支じやアありませんが、若梅さん、御同前さまに氣を附て居にやア成りませんぜ。

丁山 トはなして居る所に、傾城丁山（部屋着）下手の奥より上草履にて出來り、直に上座に着座して曉雨さんは、まだ來さつしやらないかねエ？

若梅 アイ、まだお湯に入てさます、吳竹さんにしのぶどんが附て居ますから、今にあがつて來さつしやりませうよ。

丁山 そうかい（と若梅に呷げば）

若梅（承知して）ア、それじやアわちきは、釣鐘さんのお座敷へ……

丁山 ア、これ（制すれば）

若梅 大妓へ、釣鐘さんの事は、みんなが知つて居なますよ。

丁山 オヤそうか、面目なうさますねエ。

ト立上る（木の頭に此道具半廻に成る）

俠客春雨傘

此は前の部屋外、廊下の體にて、前の下手の障子今は上手に成りて、所々に釣行燈を掛けたり（道具止る）

上手より、前場の禿千鳥先に立ち、稻妻組の頭と立てられたる町奴の釣鐘庄兵衛、その子分撞木の權藏、龍頭の龍太、突座の丸五郎、この三人附添ひて出來り、立止つて

權藏 エ、親方。今夜アどうなせエますな？

庄兵衛 どうすると云つて、別に面白エ趣向も無エから、見番の藝者ても呼上て、思ふさま騒ぐと仕やうか。

龍太 エ、それがようござエませう。夫に附けても親方が買なじみの丁山が座敷に居るあの客は、……

丸五 當時世間に名の高エ、藏前の曉雨と云ふやつ、買掛りの張合から、それに引けを取つた日にやア、

三人 親方顔が立ちますめエせ。

庄兵衛 知て居るよ。おれがする様に、任せて置けよ。

權藏 じゃと云つてあの曉雨が……

庄兵衛 エ、煩せエ、黙つて見て居るエ

ト叱り附けて立止り、少し思案してぞ居たりける。

此時廊下づたひに（向ふ揚幕より）禿しのぶ先にたち、藏前の俠客大口屋曉雨（どとら浴衣袷ね）

新造吳竹付添ひ出來り、歩みながら（花道にて）

曉雨 ア、好い湯であつた。思はず長ッ風呂を仕て居たので、さぞ待ちくたびれたらうね。

しのぶ イエ、待ちくたびれば致しません。

吳竹 だが、おいらんが、きつう待て居なますから、早うお出でなました。

曉雨 ム、部屋へいつて一服のまうか。

ト此方（舞臺）に歩み來るを見て。庄兵衛は子分に目附て知らせ、曉雨の前に立塞がる。曉雨左に

よければ、左により、右によければ、右に寄る。曉雨も立止れば、庄兵衛睨め付て

庄兵衛 エ、何を仕やがる。育じやアあるめエし、此の廣い廊下の中で、何て人の邪魔を仕やがるんだい

ト喧嘩を賣りに掛れば

曉雨 こりやアお邪魔を致して相済みません。眞ッ平御免なせエまし。

俠客春雨傘

庄兵 氣を付けやがれ(子分に向ひて)エ、間拔の野郎じやアねエか。ワハ、ハ、ハ

ト子分と俱によりしく嘲り笑ひながら(下手)入る。曉雨は平氣にて上手の障子に入る(道具戻る)

金太郎はやつきと成て、廊下の外に出掛んとするを。曉雨は止めて

曉雨 金太どこへ往のだ?

金太 かの釣鐘めが且那の事を、

曉雨 なんと云はふが損ふものか。

金太 デモ盲だの間拔だのと、ぬかしやがつて…

曉雨 エ、何とでも言はせて置けエ。二階廊下のはした喧嘩、それを買ふ様な曉雨じやア無エワ。是非とも

又買はにア成らねエ喧嘩なら、手前にやア頼まれエよ。

金太 だつて、見すくお前さんに誤まらせて…

曉雨 ハテ人に突當つて詫言いふのはあたりまへ、それに何も不思議はありやア仕れエよ。

ト金太を制して座に就く。此時丁山も(下手より)出て來りて

丁山 曉雨さん、長いお湯ございましたねエ。

曉雨 思はぬ長湯で、皆も待遠であつたらう。宗匠も善孝も、遠慮なしに飲んで居なすツたか?

蛙吟 御遠慮なしに頂戴いたして、

善孝 この通り大酩酊で御座いまする。

此時下手より撞木の権藏(羽織)若いもの喜助に酒肴を持たせて出て來り、曉雨の前に差出し、殷勤に兩手を支へて

権藏 御免下せエまし。わつちやア釣鐘庄兵衛の子分、撞木の権藏と申すものでござエます。親分庄兵衛申し

ますには、唯今はあれなる廊下で曉雨さまとも存じませず、失禮な事を申上げ、甚以て相済みませぬ、

そのお詫かたなく名代としてわつちを差出し、疎末な酒肴、御受納を願エます。附ましてはお近付に

成たらうござエますが、此お座敷へ上りましても、お差支はござエせんか、御返詞をお願エ申上ます
る。

金太 そんなら釣鐘庄兵衛が、詫言いつて此座敷へ…

曉雨 エ、喧ましい。……イヤナニ權藏殿とやら、お使がら御苦勞で御座います。庄兵衛殿へ御返詞には、唯今は廊下にて此曉雨が思はぬ失禮、それに却て其方から御挨拶では痛み入ります、御持參の酒肴、頂戴いたす譯はなけれど、折角のお心入、わざと受納いたしますれば、お禮は此方より改めて申入ませう、但し此座敷へ御入來の段は、當方にて迷惑いたせば、お断り申します、遊女屋の二階、遊興の場所、互に知て知らぬ顔、近付せぬが遊びの花、其中折があつたなら、お近付にも成ませうと、宜しく云て下つせエな。

權兵 御返詞は慥に承知いたしました。それじゃア、こな様はどうあつても、

丁山 釣鐘さんに、今此でお近附には

兩人 なりませんか？

曉雨 いかにも近附に成るのは、まア止に仕やうよ。

權藏 お前エさんが、否とお言なさりやア、話しはそれまで、何も釣鐘親方が、達てお近附になりてエと、無理から望んだ理でも無エが、併し曉雨さん、それじゃア達衆の顔を潰す様なものじゃアござえませ

んか？

曉雨 これは仕たり權藏殿とやら。釣鐘の庄兵衛殿は、音に聞えた達衆であらうが、此曉雨は堅氣の商人、町人の隠居、男も賣られば立入れもせぬうぶの素人、遊興の席ゆゑに、お近附は御免なせエと断るのに、何の仔細もありやア仕まい。庄兵衛殿の氣に障らぬやう、こなさんからよく云つて貰ひませう。イヤ態々のお使、御苦勞さまでござえませました。

ト一寸挨拶して話しを切れば、權藏も心得て、よく分りました。それじゃア御口上の通り、親分へ、申期けるでござえませう。イヤ大きにお邪魔を致しました、どれお暇を致ませう。

曉雨 御免なせエ

ト挨拶すれば、權藏も皆々へ會釋して去る（下手の奥に這入る）丁山は曉雨の所爲に落意せねば
丁山 曉雨さん。主やアなんだッて庄兵衛さんが逢はうと云ふのを、断りなした？廊の立入れ貰ひ引、ひけを取らぬが男の意地、其男が頭をさげ、わざわざよこした使の挨拶、それを断り、近附を否じやと

俠客春雨傘

云ツた其時は、モシ曉雨さん、主の顔は是ツきり、五丁町ではすたりんしたよ。

曉雨 それで顔がすたつたら、それまでの事よ。

金太 旦那。お顔がすたると聞いた日にやア、お否であらうが、かの庄兵衛と…

曉雨 エ、又口出しをするのかへ、煩せエじゃア無いか、おれが事はおれに任せて、打ッ遣ッて置てくれい。

丁山 アモ曉雨さん、此噂が聞えりやア、主は庄兵衛さんを怖がつて、尻込さんしたと、みんなのものに笑はれますぞへ。

善孝 モシ大妓、お詞の中で御座いますが、此噂が聞えたとして、旦那の事を五丁町で、笑ふ者は御座いませんよ。

丁山 サア笑はぬに仕た所が、不斷からして男を賣り、負るが嫌ひの庄兵衛さんどうした事やら今夜に限り、粹を通したあの使、それを否と言はんしちやア、主が却てきやぼんにおなりなんすが、口惜うござりますワ。

曉雨 好やね、野暮だらうが臆病だらうが、おめエの知つた事じゃア無エよ。

丁山 じゃア、主やア庄兵衛さんが怖いのがますネ?

曉雨 ム、怖いともく、釣鐘庄兵衛は、おいらア怖くてならねエよ。

ト聴くも言ふも煩さければ、鼻の先であしらつて居る。丁山は、曉雨があまり意氣地が無いのと、平氣で居るのに、愛想が盡きたるか、少々腹立の體に成つて

丁山 それじゃアどうなりとも、主の氣任せにお仕なまし。わちきやア、あツちの座敷にいきますぞへ。

トつんと立ち、吳竹千鳥を引連て、奥(下手)に入る。皆々は氣を揉む。曉雨は思ひ出したと云ふ體にて

曉雨 オ、金太、貴様はな、大義でも是から家へ歸ッて(と金太に呷げば)

金太 承知しました。それじゃア明日の朝、小揚の頭を使に立て…

曉雨 コレ靜にせい。だが、つかひ物は達筆に持たせてやるのだぜ。

金太 その代りに、庄兵衛なんかとお突合は、眞平だと断るのでござえますね?

曉雨 ム、そうだ。

俠客春雨傘

金太 分りやした。

曉雨 分つたら早くいけ。

金太 承知てござえます（と立掛れば）

蛙吟 シテ僕等は進退いかゞ仕りませうなり

曉雨 宗匠は善孝と一所に、大島屋へ引下り、一杯のんで待つて居なせエ。わしも程なく、出掛けやうから、

善孝 それじゃア、御虫負の夕丈を呼びにやつて、置ませうかり

曉雨 また引過の静かな所で、編笠でもうなる氣だな。ハ、ハ、ハ、

蛙吟 それじゃア善孝子、

善孝 御一所に出掛けませうか。且那御免を蒙りまして、一足お先に、

兩人 参ります。

ト、挨拶して金太郎と俱に去る（向かふに入る）あとは曉雨一人に成りて

曉雨 やツと静かに成た、ヤレ〜そら〜しい事であつた。そりやア宜が、明日は芭蕉庵の例会、頼まれ

て居た端書を、持たせてやらねば成るまいが

ト棚の硯箱を取出して序文の草稿を認る。（此時下座の獨吟に成る）

ハウタ『待乳しづんで。梢乗こむ山谷ぶね。土手の合傘。かた身ばかりの夕時雨。君を思へば逢はぬむ

かしがましぞかし。どうして今夜はござんした。そういふお聲を聞きにきた。』

ア、好い聲だ。節廻しが、めつぼうに甘いが、ハ、ア延しんだな。

ト草稿を書きながら聞て居る。

此時引込新造お鶴は（振袖）病人の體にて（下手より）出て來り、障子の外より小さな聲にて

お鶴 吳竹さん〜。吳竹さんは居なますか。

曉雨 吳竹さんは此に居ないが、誰だへ？

お鶴 オヤ曉雨さんさますか（と障子を明くれば）

曉雨 マ、お鶴さんか。まアおは入んなせエ

ト優しく首で、招き入るれば、お鶴は着座して

俠客春雨傘

お鶴 曉雨さん、お久しうございます。相替らず御盛んで……

曉雨 オ、お鶴さん。久しく逢はなかつたが。ひどいやつれやう。お前が病氣だとは、聞て居たが。是程のこととは思はなかつた。シテどこに寝て居なさるね。

お鶴 外に寝る所はありませんから、爛部屋かんべやに伏つて居ますワ。

曉雨 そうかへ。それで誰が看病をして、呉れるのだへ？ 夫おれからしてお醫者は何と仰しやつたね？

お鶴 お醫者様は、家に來さつしやる岡野おかのさんで、寒さむを引込ひきこんだのだから、シツカリ養生を仕なければ、直ただらぬとおいひなした。夫おれで精出してお薬を戴て居りますけれど、看病だつて、誰も身にしみて仕てくれる人はありやア仕ませんよ、それだから時々二階に上つて來て、呉竹さんに、何やかや、内証の事を頼むのございます。

曉雨 それで丁山はお前の世話を信切に仕てくれるかい？

お鶴 アイ、大妓おいらんだつて、いつも客人まやじんでもそがしうございますから、わちまたちの事までは……

ト口にもりて、あらには言はず。曉雨はそれと悟りて、

曉雨 そうだらうよ。あの女は俳諧はいかいも一寸出來て浮世話うきよはなしも面白い様ではあるが、思ひの外に不人情たぢな質ちだから、碌々ろくろく世話も仕てやるまい。それじゃア朝晩あさばんの事にも、困るだらうねえ？

お鶴 ナーニ、そりやア大妓おいらんが附て居なますから、困る理わけはありませんが……

曉雨 所が、そういかないから、矢ッぱり困るだらうよ（トお鶴の容體やうたいを見て）こりやアひどい瘦やせやうだかういふ病氣にやア、お薬も怠おぼツちやア可いないが、何でも身體の養やしに成て、精分せいぶんの附く物を、せい出してたべにやア、お薬が利きかないよ。それで、どんな物をたべて居なさるね？

お鶴 サアお醫者様も、其やうにおいひでござんすが。わちまたちじゃア、そうは出來ないのでありますワ
曉雨 アツ、成ほど、まだお客にも出ぬ振袖では、さうであらうよ。

ト不便ふびんの思ひをなし、紙入の金子を殘らず取出し、紙に包みて

お鶴さん、生憎と今持合せた金子が、たつた三兩、餘まり少ないが、こりや余わたしがお前への病氣見舞。これ何なりと買て養生を仕なせエな

ト手に渡せば、お鶴は其包そのつみを押戻して

お鶴 曉雨さん、おまはんの御親切は身に餘るほど嬉しいけれど、わちきやア、此の大妓丁山さんのお世話になる引込新造ウツミ、その新造が大妓の客人から、お金を貰つては、大妓に對して濟まぬ程に、戴く事は出来ませんワ。

曉雨 そりやアそうでもあらうが、折角出した病氣見舞、はれ附るのはそツけ無いぜ。マア納めてお置きなせへな。

お鶴 有がたうは御座りまするが、どうぞ是だけは堪忍しておくんなまし。

曉雨 じゃア、此曉雨が氣に入らぬから、突返すのだなア？

お鶴 さうじゃア有ませんが、縁もゆかりも無いお方から、お貰ひ申すが否さますから。

曉雨 ハ、ア縁もゆかりも有じゃア無いか。余が丁山の客で、お前が丁山の座敷で、世話に成て居なさりやア、まんざら見ず知らずの中ではあるまいがなア。

お鶴 さう云はれると困りますねエ。…それじやア曉雨さん、其のお金をお鶴の病氣見舞にやつてくれいと、大妓に渡しておくんなまし。大妓の手から下さるなら、私も有がたう戴きますてござんしょう。

曉雨 成ほど、お前は、武家育ちだと聞いて居たが、堅過るにも程があるぜ。是が拾兩とか貳拾兩とか纏まつた金子なら、表むき丁山に渡して病氣見舞と云つても宜が、高の知れた貳兩か參兩のはした金、なまじい人に知れた日には、お前ばかりか第一は此曉雨がしみつたれて耻かしい。人間と云ふものは、堅いばかりが能じゃ無い、人の情の奥底を、汲て知るのが誠の附合。お前がいま突戻した此金子、まさか余が引込まする理にも往かなからう。じゃに由てお鶴さん、色氣をはなれて僅の見舞、まア納めてお置きなせエ。

お鶴 ト既得して、金子の包をお鶴が手に、無理に渡せば
それ程までに仰しやるのを、戻しましては、御親切にそむく道理。曉雨さん、有がたう戴いて置きます。しかし此事を大妓だけには、話して置いてもようさんすか？

曉雨 イヤ丁山に知らせるのは、止に仕なせエ。不斷からして疑ひ深いあの丁山、乙ウ勘ぐツて、をかしく思ふと却て迷惑。それに僅な金子の病氣見舞。丁山はじめみんなの者に沙汰なしに仕ておくんなせエ。お鶴 それじやア黙つて居りませう。曉雨さんありがたう存じまする。

此時廊下にて人の足音聞ゆれば

曉雨 お鶴さん誰か来た様だぜ、兩人が差向ひて居て、變に思はれちゃア詰られエ。サア早く下へ往なせエ。
お鶴 さうございますねエ。それじゃア曉雨さん、御ゆツくりと、おしげりなんし。

曉雨 わたし一人でか、ソハ、ハ、ハ

お鶴 オホ、ハ、ホ

ト笑ひてお鶴は此座を去る(下手に道入る)

此時丁山先に立ち、釣鐘庄兵衛、權藏、龍太、丸五郎、若梅、吳竹、千鳥、しのお打揃ひて、ドヤ
くと(下手より)出て來りて

丁山 サア釣鐘さん。わちきの座敷、遠慮はない程に、お入りなまし。

庄兵衛 それじゃア、おいらん、御免なせエ。

ト皆々入る。丁山は曉雨を見て、わざと驚いたる振にて

丁山 オヤ曉雨さん。おまはんまだ居なましたか。わちきやアまた、先きに皆をつれて、大島屋へ往なんし

たと思つたゆゑ、外の客衆をお連申して……マアどう仕ませうねエ

トわざと當惑の體をすれば

曉雨 ナーニ、少しも構つた事は無い。わしも今丁度仲の町へ往かうと思つて、煙草入を仕舞た所よ。

ト煙草入を仕まひ立掛れば

庄兵衛 アイヤ曉雨どん、少し待て貰ひませう。先きこの權藏を使に立て、わざわざとお近附になりてエと申
入たに、をかした返詞、この釣鐘と一座して、酒くみ代すが否じやときツと言はッしやるのか?

曉雨 これは仕たり釣鐘どんとやら、庄兵衛どんとやら、先きも返詞を仕た通り、人目づみの編笠に、通
ひくるわの樂みは、シッぽり濡るゝ夜の雨、互に憚かる屏風の背戸、それを破ッて逢はうとは、粹な
男のせぬ事ゆゑ、機があつたら其時にお近附にもなりませうが、此で逢ふのは御免なせエと、斷つた
が分らねエのか?

庄兵衛 サア其斷が氣に食はねエ。男が一旦近附にならうと云つたを斷はられちゃア、此釣鐘の顔が立ぬワ。

曉雨 ハテどうしたもので御座エますな、否と云ふのを無理無體、往生づくめの得心は、色男にも似合はね

エゼ、互に思はれて、積るなじみに打解て、語るが誠の深い中、わしが代りに丁山と、ゆっくり話してお居なせエ。

ト戯談にまぎらして、庄兵衛を丁山の側につきやりて、歸り掛るを見て。権藏はじめ立上ツて
権藏 此奴ア、口に關所が無エと思つて、ハラ／＼と饒舌ちらし、親方を馬鹿に仕やがるナ、改めて近附の盃しねエ其内は、一寸でも此座敷、立たせる事は、
皆々 成らねエぞ。

ト取巻く。曉雨は平然として
曉雨 エ、何て大聲を出すのだい。貴様たちの相手に成るやうな曉雨じゃア無エぞ。達て止だて仕やがると冥土の廓へ鞍替させるぞ。

キツトと睨めば、此勢に恐れて皆々脇へ寄る。庄兵衛は黙つて居る。丁山は曉雨の側に來りて
丁山 そんなら曉雨さん。どうあつてもいになますか？
曉雨 「いなうとも止うとも、何でもわごりよの御ばからひと、言ては小腰にとりついて」ワハ、ハ、ハ

ト狂言小唄をうたひ、小舞のふりを一寸見せて笑ふ（是を木の頭にて）庄兵衛無念のこなし、其他皆々意外の思をなす。

(拍木幕)

第三幕

(一) 阿部川町浪宅の場 享保十六年正月三十日の夜

阿部川町今西玄之進が浪宅（四間の所常足の二重）後は西教寺境内の卵塔場の三味にて。一方（上手）には損じたる竹垣に出入の木戸を設け。一方（下手）には疎なる杉の生牆にて境をなす。正面（上手）寄）一間の所に中塗の壁ありて、其前の刀掛には大小を懸け、其側の古机には筆硯を置き、一間貳枚の破襖（出入口）を建て汚れたる薄縁を敷き、破れ行燈に灯火を點け。下手（横）には雨戸を建て、上手（横）には破れ障子を建てたり。正面には濡椽を附け。根子の杳抜あり。（幕明く）
此に旗本天野民部（親負の父）が家來片山又四郎齋藤孫市三浦大次郎三木喜右衛門の四人。天野の紋

俠客春雨傘

付たる提灯を提へ(天野の紋は丸の内に三蓋松)上下を見廻りて出て來りて

又四 ヤア御苦勞て御座つた。表の方は何も別條は御座らぬかな?

孫市 左様。表の方は何の仔細も御座らぬが、シテ裏手の方は如何て御座るな?

大次 裏手の方は、西教寺の卵塔場は云ふに及ばず、庫裏の邊まで見廻つたれど、

喜右 怪しき體は更に御座らぬ。

又四 左様で御座るか。御同様に御主人天野民部様の仰を受け、既に去る廿六日より、今日まで五日の間、

此通り、

孫市 毎夜是なる今西玄之進殿方へ相詰て、嚴しく警固を致して居れど、

大次 かの鶴鶴組の悪黨ばら、折寄せ參る景色も見えねば、

喜右 玄之進殿の言はる通り、向島の意趣ばらしに、參る事は御座るまい。

又四 拙者とても其通りには存ずれども、相手は名におふ鶴鶴組、武家町人の差別なく、喧嘩をするのが彼等のつね、

俠客春雨傘

孫市 もしも當家の老人に過ちあつては相成らぬ、用心せよと殿の嚴命、

大次 それ故にこそ若殿にも、わざ／＼お出張り相成て、お詰めなさるゝ今度の仕儀、

喜右 參るものなら早く參つてくれれば宜に、僕などは日頃の腕前、

又四 御同様に武藝の手練、目にももの見せて、

四人 やり度う御座るなア。

ト四人は互に力身ばなしをぞ仕て居る此時襖の中に聲あつて

玄之 若殿、これへお越し下さりませい。

ト案内して今西玄之進(着流、無刀)先に立ち、天野靱負(羽織袴、提刀)その跡より、玄之進

の妻お節(老たる女房)附添ひ出來り、靱負を上座に居らすれば。又四郎等は、一同に敬禮して

又四 ハツ、若殿様へ申上ります。當家の内外、唯今も篤と見廻り致せし所、

孫市 更に別條

四人 御座りませぬ。

靱負 大儀であつた。猶念入て警固をいたせ。
四人 長ッて御座りまする。

玄之 餘寒の折から、毎夜の御警固、御苦勞に存じまする。コリヤお節、各方へ溢茶なりとも差上げぬか。
お節 そうで御座ります、此寒いのに、皆様もお大抵では御座りますまい。マアお手などおあぶりなさいまし、唯今お茶を差上りまする。

ト火鉢を持出し、土瓶に茶を入るし。

又四 アイヤ御内室、かならずお構ひ下さるな、咽が乾けば御勝手へ罷越し、自由に頂戴いたすて御座る。
玄之 時に若殿、唯今もあれなる一間で申せし如く、御父上民部様の思し召、有がたうは御座れども、毎夜々々の御警固は、玄之進身に取て、心苦しう御座りますれば、達て御辭退申上げます。

靱負 アイヤ、其儀は斟酌かならず御無用。一相手は多勢の鶴鶴組、世を憚からぬあはれもの、もしも貴殿の身の上に、過ちある其時は、我等親子が相濟まねば、警固いたすは當然にお心置なく、御寝なされて宜しう御座らう。

玄之 まだく左様に仰あるか。向島にて喧嘩の折から、計らずも行合せ、御加勢したは手前が物好、其爲に此如く、御苦勞掛くるは甚だ不本意。其上にまた鶴鶴組のあはれもの、既に今日まで五日の間、押寄せて参らねば、最早懸念は御座りませぬ、よし又押寄せ参つた所が、高の知れたる小普請御家人、町奴のならずもの、病ほうけても玄之進、暗々打たれも致しませぬ。どうか今夜は若殿にも御一同を御つれあつて、お引上を願ひまする。

靱負 先程よりして其御趣意承はつては御座れども、引上たる其跡で、若もの事のある時は、天野民部の武士がすたる。夫じやに依ッて用心あしき當所を立のき、拙者屋敷へ御入あれと、達て申すを御聞入これなくて、其まゝ是に御座あるゆゑ、五日はおるか十日一月、此ほとぼりのさむるまで、御警固いたし申されば、親子の二分相立ちませぬ。

玄之 是は仕たり、靱負様、拙者を御警固下さらねば、天野様の武士がすたると御意あるならば、其御警固を受けましては、此玄之進も武士がすたる。御父上は、其昔劍道出合の好を以て、拙者が今の浪々を、氣の毒なりと思召し、御合力下されうとの御信切、それを御辭退いたしまするは、敢て堅意地ては御

座りませぬ。故主水野隼人正殿の御不行跡を憂ひし餘り、御家督讓の内評議、もれて受たる此身の不興、その後、主家は御没落、孤忠を守る玄之進、今日に相成て、天野様より、御合力を受ましては、心の操が貫きませぬ。其上に今度の一條、かく御警固を蒙つては、鶴鶴組に恐をなし、天野様を頼んだと、相手の奴等に笑はれては、故主の名までも穢すの恐れ。此通の次第ゆゑ、達てお引上を願ひまする。

靱負 御尤の御心底。然らば其旨一應父上へ申上げ、御承知あつた其上で……

玄之 アイヤ其儀は昨日民部様、お忍にてお入のをり、篤と申上げ置きまして御座りまする。

又四 では御座らうが。主人よりして引上の差圖なき其内は……

玄之 お引上は下さらぬか？

四人 いかにも左様。

玄之 然らば是非が御座らぬ。玄之進、明日とも云はず、唯々今、當所を立のき宿替いたす。

お節 ハテさて、又しても性急な言掛り。御信切な天野さまのお詞に従ふて、今夜だけは御警固をお願いし

たが、宜しからうと思ひまする。

玄之 ヤア其方までが左様な事を申し居るか。御警固に預かつては、此玄之進が武士がすたり、故主隼人正様の御耻辱にまで相成る次第。それが其方に分らぬか？

お節 成ほど、そう云はしつやれば其様なもの……イヤ申し若殿さま、お聞の通りの次第がら、それに又常からして、心を極て言出したら、一かな引かぬ玄之進の氣質。御迷惑では御座りませうが、どうぞお引取を願ひまする。

靱負 イヤ迷惑は少しも御座らぬが、不用心なる此お住居……

玄之 ハテ生死は人の運次第。運強ければ敵勢に取巻かれても、命は助かる。運盡る其時は、金城鐵壁ありとても、其身は必らず亡ぶる道理。此あばら屋の不用心が、運をためすに最屈竟。サア直さまお引上げ下さりませい。

靱負 じゃと申して唯今直には……

玄之 お引上なさらずば、玄之進、直に此屋を立退きませうか？

お節(不審顔して)お前さまの心底が、どうも私に分りませぬ。天野様御親子の御信切、御自分ゆゑとは云

ひながら、大抵の心づかひ、それをあの様に断らしやツたは、一體どうした理で御座りますなア?

玄之 ム、其不審は尤至極。先日向島にて助けた若衆。天野民部殿の子息頼負殿と、聞いてびツくり、此身の當惑。天野民部殿と申すは小川町に御座る四千石のお旗本、故主水野隼人正様とは遠縁のお間がら殊に劍道では度々お出會申した御方。

お節 それじゃア、お前さまも、御懇意のお方。何も當惑はありますまいに?

玄之 イ、ヤそうで無い。思ひ廻せば十餘年の其昔、先君水野隼人正様、營中にて御亂心、お小サ刀を抜かせられ、常々意趣のある方々を、あびせ掛けての御刃傷、寄附く人もなかりしに、ヤア不埒なり隼人殿と聲掛ながら、むんずと組み、押し伏せたるは即ち其日の御當番、天野民部殿、それさへ無くば先君は獨思ふさま斫散し、其場で立派に御切腹もありつらん、押へられたる御無念は、何ばかりでおはしたらん。其民部殿親子の衆に、聊たりとも恩受けては、故主へ對して本意で無い。夫故にこそあの様に、もぎどろに断つたが、天野殿には玄之進を堅意地の義理知らずと、下墨で御座るであらうが

武士の操て是非が無いヲ。

お節 成ほど、そう云ふ理で御座つたかいのウ。そんなら其様に初から、打明けて言はつしやればよかつたらうに。

玄之 侍同士の應對に、左様な事が云はれるものか。それは格別、娘のお鶴、去年の冬、おれが病氣の最中に、旗本屋敷へ腰元奉公に遣したが、まだ宿下りを致さぬかな?

お節 お前さま、宿下りは三月ときまつて居る。それにまた番町の小出様は、取分け堅きお屋敷ゆゑ、宿元からして迎ひにゆき、お願ひ致されば、一日たりとも町中へ、お出しにならぬが掟とやら、

玄之 屋敷の掟はさう無くては叶はぬもの。併し手紙の便が疎遠であるのは、どうしたものだな?

お節 サア今西玄之進が娘と云つて奉公させるは、此方の耻。家主殿を宿に頼み假親しての御奉公、それで手紙のやり取も、さう自由にはなりませんわいのウ。

玄之 何さまそりやアさうであらう。同じお旗本でも、小出様は八千石の御大身。支度とても無い事ゆゑ、さぞやお鶴も朋輩中で、肩身が狭い事であらう。

お節 サア、わたしもそれで色々考へて居りますが、お前様の御病氣が、すツかり直つた其上で、どツくりと相談を致しませうわいのウ。

玄之 ハ、ハ、ハ又御相談か、それもゆツくり聞くと致さう。イヤ思ひ出した、今日は薬を朝一度呑だ計り、寝る前にもう一服呑まねば成るまい。お節、大儀であらうが、煎じてくれぬか？

お節 そのお薬は、此通り、日の暮まへに煎じて置きました。ドレ暖めて上げませうか、

ト薬土瓶を火鉢に掛くる。玄之進は机の上の本を取出して行燈の前で讀て居る。此時木戸（上手）の外にて逸見鐵心齋の子分、山猿の赤藏猪熊の荒七狂犬の武者平貉の無垢助の四人は駈廻つて

赤藏 ヤア泥棒だ。早くつかまいてくれい、く、

荒七 それ向ふの方に走つていつたぞ、

武者 ヤア屋根傳に逃ていつたぞ、

無垢 卵塔場に逃込んだぞ、

四人 早くつかめておくんなせエ

と頻りに騒ぎ廻れば

玄之 ナニ泥棒が逃込だど？

ト刀掛の刀を取て、立上がれば、お節は行燈を持て一所に椽先に出る。此時下手の杉塔の中にて

赤藏 それそこの塔根の方に逃ていつたぞ。

荒七 そツちの方を追掛けてくれい。

ト叫び足音をさせて馳廻れば、玄之進は下手を見て

玄之 ハテ怪からぬ騒ぎ。お節、その光を此方の方へ向けてくれい。

ト刀を携て、庭先（舞臺）に下り、塔根（下手）の方へゆく。お節は行燈を出して

お節 お前さま、怪我を仕ては成りませぬぞ。

玄之 ナニ大丈夫だ。

ト塔根に寄添て卵塔場を覗く。此前より逸見鐵心齋は塔根の間に忍び居て、槍をしこき、横合より不意に玄之進の脇腹を突く。玄之進は突かれながら其槍を握つて

ヤア何奴なれば卑怯未練のだまし討……

鐵心 向島にて喧嘩の遺恨、覚えて居るか。

玄之 ム、扱こそおのれは鶴鶴組の……（槍を突のけ手負ながら刀をぬく）

お節（此躰をすかし見て）なんとなされましたなア？

ト氣遣ひ、庭先（舞臺）に下りやうとする。此時上手より磔を打ち、行燈を打消すと同時に、赤藏

等四人抜つれて入來り、お節をめつた切りに斫る。お節は叫びながら死ぬる。

此方には逸見鐵心齋と玄之進は激しく戦ふ（知らせ無しに此道具半廻に成る）

（二） 卵塔場欺討の場

此は西教寺本堂の後にて（本舞臺一面の平舞臺、前場にて下手に見たる杉の生塔、今は上手になる）

所々に石塔ありて、其間には松杉等の立樹あり。（正面の奥には西教寺本堂後を見する）

折柄（道具止れば）鐵心齋は槍、玄之進は刀にて（上手より）出來り必死に成て戦ふ。鐵心齋の門弟

入谷丹五郎根岸松兵衛田畑彌九郎各々刀を抜て構へ、鐵心齋が危く成るを見て、助太刀に出て、前後

左右より斫付る。玄之進痛手にてよろめきながら、四人を相手に烈しく戦ひ、終に斫倒さる。鐵心齋は留を刺して

鐵心 ヤッ思つたよりは骨が折れた。

丹五 是と申すも先生の、

松谷 御手練すぐれたお槍先、

彌九 今に初めぬ御武勇は、

三人 恐入て御座りまする。

鐵心 イヤ是で漸と腹がいえた（此前より赤藏等四人も此所に來て居たるが、鐵心齋は四人に向ひて）シテ

家内の奴ばらは

赤藏 家内とては女房一人、

荒七 見事に仕止て、

皆々 御座りまする。

俠客春雨傘

鐵心 ム、それで安心

此時上手の奥にて多勢の人聲にて

多勢 今西どの。玄之進どのく

ト呼ぶ。是を聞て、鐵心齋、それと差圖して、一同に本堂の傍に忍び入る（此道具知らせなしに原へ戻る）

○天野の家來片山又四郎齋藤孫市は提灯を持って先に立ち、天野民部（羽織袴大小）奴の黒内附添ひ出來りて

民部 玄之進殿は、いづくに御座る。天野民部、わざく出掛けて迎に參つた。

又四 今西どの、く、

孫市 御出會召されぬか？

ト呼びながら見廻し、お節の死骸を見て

又四 ヤア、こりや是今西殿の御家内なるが、

孫市 無慘に殺され仆れしは、

ト打驚けば。天野民部は立寄て

民部 ム、こりや多勢の刀にて、疊み掛けたる許多の疵所、……それに又こゝ等の血汐。玄之進の身の用心許ない、あれなる墓所を見分いたせ。

兩人 畏りました。

ト卵塔場の方へ（下手）急ぎゆく

民部 黒内。其方は當所の家主五人組の者共に、此由急ぎ告知せ、早々是へ同道いたせ。

黒内 畏りました。

ト木戸（上手）外にゆく。引違へて、又四郎孫市は、玄之進の死骸を兩人にて擔ぎ來りて

又四 殿様。玄之進殿には此通り、

孫市 あれなる墓所の中にて、

又四 無慙の最後を遂られて、

俠客春雨傘

俠客春雨傘

兩人、御座りまする。

民部 ナニ玄之進にも無^む慚^{ざん}な最期を致せしとな？（玄之進の死骸を見て）扱^{つか}こそ鶴鶴組の奴原が、欺討^{あざしり}には致せしよな。斯^かと案^あじて此民部、わざ／＼迎に参つたに、時刻後れて夫婦の横死^{わかし}、残念な事を致したなア。

ト打嘆^{うちなげ}き兩人に差圖して、玄之進お節の死骸を家の内に（二重）入させ、民部は椽に腰を掛けて居る。

此時、奴黒内先に立ち、阿部川町の家主作兵衛、五人組のもの辰藏巳之助馬吉樵次郎猿八、連立て（上手より）出来り、庭先（平舞臺）に座りて

作兵 へい當阿部川町家主、作兵衛に御座りまする。お召に付まして五人組同道いたし、

六人 罷出まして御座りまする。

民部 自分事は天野民部。今西玄之進へ所用あつて、唯今是へ参りし所、玄之進夫婦には、不慮^{ふりよ}の横死^{わかし}、委細は、家來共より承はり、早々奉行所へ申立て檢使^{けんし}の手續^{てつづ}いたしてよからう。尤も葬送^{そうじゆ}其外萬端^{ばんたん}は此方にて致す程に、家來等へ申談じ、不都合なき様取計らへ。

作兵 畏りまして御座りまする。

辰藏 エ、それじゃア玄之進さん夫婦の衆は、

巳之 人手に掛つて死なれましたか？

馬吉 道理こそ、今しがた、泥棒だ／＼と、

樵次 大騒をした聲が、此方^{こち}の方で聞えましたが、

猿八 それじゃア其時、泥棒が寄てたかつてお二人を、

五人 殺したので御座いましたか。

ト驚いて、作兵衛と俱^{とも}に兩人の死骸を見て、残念^{ざんげん}の思を成す。

民部 コリヤ／＼家主。シテ今西玄之進には、悴も娘も、子供は一人も無いのであつたか？

作兵 ハイ悴は玄太郎と申して、十歳で御座いましたが。昨年相果てまして御座りまする。

民部 ム、悴は死んだが、娘は無いか？

作兵 へい娘はお鶴と申して、當年十六歳で御座りまする。

俠客春雨傘

俠客春雨傘

民部 その娘は何れに居るな？

作兵 ヘイ奉公に参つて居ります。

民部 どれへ奉公に参つて居るか？

作兵 ヘイ其儀は少々申上兼まするて御座ります。

ト頭を搔て、もぢく仕て居るを見て、民部はぢれ込んで

民部 何れに居るか。早く申せ。

作兵 實はさる御殿へ参つて居ります。

民部 何れの御殿じや

作兵 サア其御殿が

ト猶も言兼れば、民部が頗るせき込めるを見て傍より

丹五 早く其御殿の名を言はつせエ。

孫市 言ひにくい事は御座るまいが。

作兵 其御殿と申まするは、

五人組 吉原御殿で御座います。

民部 ナニ吉原御殿と？スリヤ遊女奉公いたして居るとな？

皆々 左様に御座います。

民部 ム、はてさて氣の毒至極、こりや家主、玄之進夫婦の横死、その娘かたへ告知せい。

作兵 委細承知いたしました。

民部 しかと此旨申付けたぞ。

作兵 へい。

民部 それに付ても娘の身の上……コリヤ黒内、其方は明朝にも、我屋敷へ出入なす大口屋曉雨かたへ罷越し、委細を請して同道いたせ。

黒内 畏りました、曉雨へ話し召連れまするて御座いませう。

此時民部はつかくと杉垣の邊にゆきて垣根に落ちたる槍の鞘を取上げ、黒内が差出たる箱提灯を

俠客春雨傘

左の手に取つて是を見て

民部

こりや是、佐分利流の槍の鞘

ト不審する。此時逸見鐵心齋は、下手の杉の内より、顔を平あらはして

鐵心

エイ

ト手裏劍を打てば、民部は早く身を外し、箱提灯にて受止めて(木の頭)

民部

ハテ怪しからぬ。

ト手裏劍を抜取る

つなぎにて直に引返す

(柏子幕)

(二引返し) 松葉屋内證折檻の場

享保十六年辛亥二月朔日の午後

但見る(本舞臺一面の平舞臺)正面(向ふ)三間の所は、四枚建の唐紙、時雨の松の繪(出入)其他は根岸の塗壁、座敷の三方は板廊下(舞臺の前つら一間通り、下手は附際の邊までに折廻してぬめを

通し、ぬめの中は座敷の心にて薄縁を敷詰め、其外は廊下の心なれば下手は此ぬめに並びて横に唐紙を一枚たて置き、下手は板羽目の張物にて圍ふ)是ぞ新吉原の遊女屋松葉屋内證と知れたり。

此に松葉屋の傾城丁山は座敷に居り、遣手のお熊は、引込新造のお鶴を、しごきにて後手に縛り、長

炬管を手に持た、目前に金子の包を置き、板廊下(舞臺の前づら)にて折檻して居る。(幕明く)

お熊 サアお鶴さん、お金の出處をお云ひなせエ、是ほど貰ても云はなけりヤア、且那さんへ言立て、炭部

屋へつれてゆき、つるし上げてお言はせませすよ。

お鶴 こればツかりは、堪忍しておくんなんし、なんでわちきが枕さがしや盗を致しんせう、出處は正しい

このお金。

丁山 ム、出處が正しいお金なら、誰さんに借りたとか貰つたとか、お前なぞ其通り立派には言ひなませぬ。

サア其出處を此でちやんとおひなまし。

お鶴 サア其出處を言てよいなら、此苦みをせぬ中に、お熊どんに言ひますが、必らずいふな、言ふまいと、

誓ふた詞があるゆゑに、聞かずと許しておくんまし。

俠客春雨傘

丁山 そりや出来ない、お鶴さん、お前が客衆を取る身なら、貰ふたお金も有たらうが、まだ振袖の引込衆、
お客に貰ふたはずは無い。小遣が無いならば、ナゼおいらん斯々と、わちきに咄しは仕ないのさませ、
瘦ても枯れても松葉屋の丁山、仕掛をまけても見繼であげるわちきが心。それにお前が其お金、どう
して持つて居なますか。貰ふたなら誰さんにどうして貰ひ受けましたと立派に此でおいひなまし。

お鶴 そればツかりは言ふ事を、堪忍しておくんまし。

丁山 言はなけりやアお鶴さん。お前は客の枕捜しをなしましたねエ。

お鶴 なんてさもし枕捜しを致しませう。
丁山 仕なけりやアちやんとお言ひなんし。丁山の座敷で世話をして居るお鶴さん、泥棒したと云はれちやア
お前ばかりか、わちきまで喉に立つのが苦しうさます。サアさつぱりと、盗んだら盗んだとおいひな
まし。

お鶴 盗んだのではありませんが、貰ふた先を云ふだけは、どうぞ聞かずにおくんまし。
丁山 エ、是ほどなんども、わちきが聞くのに、白状せぬのは、ム、こりや矢ツぱり泥棒さしやん逃たのだ

れエ?

お鶴 イエ、何といつても、盗んだのではありませぬ。

丁山 (立腹して聲荒らげ) エ、いけ強情なお鶴さん。お熊どん、此上は思ふさま痛い目させて、責問してお
くんまし。

お熊 さうて御座いますよ、こんな強情者は、ひどい貫に掛けなけりや、本統の事は云はぬもの。サアお鶴さ
ん、有躰にお言ひなさい、言はなけりや、こうするよ

ト長烟管にて打つ。

お鶴 ヒ、痛いよ。お熊どん痛いから、堪忍しておくんまし。

お熊 痛けりやア、お金の川處をお云ひなせエ。

ト身体をつねり打ち擲けば、お鶴はヒ、と啼叫ぶ。此時松葉屋の亭主與兵衛は奥より出來り、
此躰を見て打驚き、お熊が持たる烟管を取上げて、ハタと睨みて

與兵衛 オイお熊。同じ遊女屋でも、余が家は松葉屋といふ大籠、大妓衆は云ふに及ばず、新造禿に至るまで、

俠客春雨傘

俠客春雨傘

打ちてう擲なをせぬが家風。夫れに此お鶴、何な悪イ事があつたか知らぬが、可愛想に病ほうけて居る者を、縛り上げてこの折檻せつかん。コレお熊、チョン／＼格子のはした女郎と、振袖とは譚わが違ふぜ、大躰たいにしてくれい。

お熊 ヲシ旦那さん。大妓がたを預つて居る其中は、遣手やちてだけの勘向かんまう、否いなでもせにア成りません。まだ客人に出た事も無いお鶴さん、一步は疎そか、小粒こつぶ一ツあらう筈が御座いませぬ。夫れが三兩と云ふお金かば、持て居るのが怪しい詮議せんぎ、丁山さんの大妓が呉さつしやつたと云ふてはなし、貰つたお金と云ひますから、そりや誰にと尋ねりやア、名前は云へぬと白状せず、てツきリニリやア枕捜し。松葉屋のお二階に泥棒をする引込さん、夫れこそ暖簾のれんの疵きずと云ふもの。是だから否いなな役だが、旦那さん、丁山さんに相談して、ぶち折檻を仕て居ますよ。

與兵 ム、。シテ丁山、お前にも其金の出處は知れて居ないと云ふのかね？

丁山 とんとわちきもあたりが附かず。外の事なら兎も角も、わちきが座敷で世話する振袖、枕捜しがあつた日にやア、二階の迷惑めいわくわちきの耻、それでお熊どんに相談して、尋ねて居るのでござんす。

與兵 そりやア又變つたはなし。併しお鶴に限ツちやア、盗み泥棒する様な女で無いと、此おれが慥たしかな證人ナンノ客衆を取らぬ引込だつて、貸手かしてもあれば呉手くんでもあるもの。エ、お鶴、丁山やお熊に言ひ悪わるけりやア、そつと余おれに云つたがよい、決して口外くちがいは仕ねエからよ。

トやさしく尋ねれば

お鶴 旦那さん、有がたら御座ります。何にも客衆きやくしゆに貰ふたお金、取つたでも盗んだでもありませんが、其客衆が此事を必らず人に言ふまいぞと、きつい口止め、それを云ふては其お方へ濟すまぬ程に、少しの間、云ふ事をお待ちなされて下さんせいなア。

與兵 ム、それじやア、其客衆に、云ふて宜よろやら悪わるいやら、聞て見た其上で、返詞を仕やうと云ふのだなア、どうだ丁山、それ承知を仕てやんなせエな？

丁山 旦那さんが、それてよいとお云ひなさりやア、わちきやア別に構かまふ事はありませんが、其代り今日ツきり、あの子の世話、わちきやアきつと断ことわりますぞへ。

與兵 そりやアお前の了見次第。エ、お熊、それでお鶴の折檻を、許して遣ちやア、どうだらうな？

俠客春雨傘

お熊 ハイ許すとも許さぬとも、そりやアあなたのお心まかせ。併し旦那さん、大妓がたの取締り、是から先ア附ける事が、出来ませんよ。

奥兵 さう云はれちやア余も困るが、お熊、どうすりやア好んだい？

お熊 旦那さんの御威光で、お金の出處を、此子に言はせておくんなさりや、それで好ので御座いますよ、ネ、大妓、さうじやア御座いませんか？

丁山 さうございますよ、お鶴さんが持つて居た此お金、誰に貰つたか、どうして取つたか、それがきつぱり知れた上で、わちきが顔が立ちさへすりや、好いのございます。

奥兵 ム、よく分つた。エ、お鶴、いま聞ての通りだが、お前が其出處を言はなかつた日にやア、此家の取締、一躰への見せしめ、否でも酷い貴に掛け、痛い目させて言はせにやならぬ、それをさせるが余も否だ、人にやア決して言はれエ程に、余に内證で言ッてくれい。

ト柔かに言へども、お鶴は只泣入つて

お鶴 旦那さん、濟みませんが。是ばッかりは堪忍しておくんなんし。

奥兵衛は種々に尋ねれども、お鶴は同じ事のみ言ひて更に出處を白状せざれば、奥兵衛も立腹の體にて、立上りて

奥兵（聲荒く）是ほど云ふのに白状せぬとは、見掛に似合はぬ太エあまアだ。コリヤお熊、此上は仕方が無エ、痛い目させて言はせて仕まへ

ト言捨て奥に入る。お鶴は見送ッて

お鶴 旦那さん、お腹の立つのは御尤、どうぞ許して下さりませ。

お熊（丁山に向ひて）エ、おいらん。旦那さんだつて、此お子のいけッぶてエのにやア、呆れ切ッてあの腹だち。かうなりやア今一息、ひどい目に逢はせて責めますが、可で御座いますか？

丁山 可ともく。思ふさま、痛い目に逢はせ、白状させておくんまし。ほんに呆れ返ッた餓鬼さまですね。エ。ドレ奥へいつて、旦那さんへ相談して來ませうか。

トお鶴を尻目に掛て、奥に入る。跡はお熊とお鶴の兩人に成つて、お熊は再び煙管を取上げて

お熊 サアお鶴さん。是からはお前とわたしと根くらべだ。旦那さんも承知の上は、わたしの腕のつゞくだ

俠客春雨傘

け、ぶつてぶつてぶちのめし、何でもお金の出處は言はせなけりやア、役目が立たれよ。覺悟を極てお居てなさいよ。

お鶴 たとひ打ちたゝかれても、是ばかりはお熊どん、堪忍しておくんなまし。

ト泣入を、お熊は煙管を振上げて再び烈しく折檻すれば、お鶴は痛みに堪かれてヒークと泣叫ぶ。

此時曉雨はお鶴が泣叫ぶ聲を聞附けて（向ふより）出て來り、（花道にて）此體を見るより

曉雨 お熊、まで。

ト聲を掛けて座敷に（舞臺）來れば、お熊は會釋して

お熊 オヤあなたは藏前の旦那。

お鶴 ヤア曉雨さん、どうして此へは？

曉雨 お熊、なんてお鶴を打ちたゝまするのだい。

トお熊が煙管を持ッたる手をねら上ぐれば

お熊 ハイお鶴さんが、枕搜しの泥棒で御座いますから、仕置をするので御座いますよ。

俠客春雨傘

曉雨 ナニお鶴が泥棒だと？ふざけた事をぬかしやがるな（とお熊の襟がみを取つて引きよせながら、奥へ

向ひて）オイ亭主は居ねエか。奥兵衛どんは居ねエのか？

與兵（襖の中にて）ハイ亭主の奥兵衛は此に居りますが、お呼びなすつたは、どなたで御座います？

（言ひながら、丁山附添ひ出て來りて）ヤアあなたは藏前の旦那さま。

丁山 オヤ曉雨さんで御座んしたか、どうして此へは來なましたねエ？

與兵 何か二階でいらん衆が、旦那さまへ無調法でも御座いましたか。女子供の事で御座いますれば、幾

重にも御勘辨を願ひ上げまする。

ト案じ顔して頭を下げて詫言すれば

曉雨 ハ、ハ奥兵衛どん、何もそう誤るにやア及ばれエ。誰も二階で無調法を仕たものなし、良また有

た所が、それを彼是言出して、内証へござる曉雨じやア無いから、安心して居るが可よ。余がいま

此へ來たのは、此お鶴の一件だが、今も今とて二階で聞きやア、客人の金を盗んだとか、枕搜しを仕

たとか云ふ噂。一體マアどうした譯だへ？余が方にも打明けて話してエ事もあるが、一通り聞かして

俠客春雨傘

おくんせエな。

與兵 ナニお鶴の一件と申しまするのは、實は斯様で御座います。御存知の通り振袖の引込新造、まだお客に出るては無し、萬事はすべて丁山の世話になる部屋掛り。それが三兩と云ふお金をば、持つて居たのが不審の起り。

丁山 わちきが遣たと云ふでは無し、外にくれた人は無し、お金を持つて居る筈が無い。それでお熊どんが、不思議に思つてわちきに尋ね、相談の上でお金の出處を聞て居る所さますよ。

お熊 且那マアお聞きなさいまし。此お鶴さんがね、昨日の朝、一步と云ふお金を出して、禿に渡し、買物にやる所を、ちらりと見たゆゑ氣に掛り、夫れから詮議を仕て見れば、店の吉どんを使にたのみ、貳兩のお金を阿部川町の親元へ、送つて遣た證據が上り、其お金の出處を、いくら尋ねて見ましても、ある客衆に貰ひましたと云つたばかり。

丁山 お前にお金をくれた客衆は、誰さます、お云ひなんしと尋ねても、其客衆のお名前は、どうあつても云ふ事が出来ませんときつい強情。

曉雨 ム、分つた。それで與兵衛どんは、お鶴が盗み泥棒を仕たのであらうと云ふのだなア?

與兵 サア餘人は知らず、此お鶴に限つては、そんな事を決してせぬ女だから、貰つたお金に相違はあるまい。夫れにお鶴が申すには、其くれた客人に、一應聞いて見た上で、お名前を云ひませう、夫れまで待て下されと、違ての頼み。

お熊 所がそりやアある手管、それに乗るやうなお熊じゃア御座いません。外の事なら兎も角も、三兩でもお金はお金、その出處が知れませんじやア濟みますまい。

曉雨 それで打折檻して責め尋ね、言はなけりやア、泥棒したと極るのだけエ?

お熊 マアそうて御座いますね。

曉雨 與兵衛どん。お鶴は扱々感心な妓で御座るのウ。一步金で三兩の金子、あの妓にやつた客と云ふのは、誰ても無い、此曉雨で御座るわい。

與兵 へー。それではお鶴にお金を下すつた客衆と云ふのは、

丁山 主さんてござんしたか?

俠客春雨傘

ト皆々驚きて

與兵 そりや又どう云ふわけで?

曉雨 その課はゆつくりと話さうが、マアお鶴の繩を解て下ッし。

與兵 承知いたしました(お鶴の繩を解く)

曉雨 お鶴さん。ナセ余に貰つたと、早く言ッて仕舞はなかつた、詰られエ事を隠して居て、酷い目に逢なすつたねエ。

お鶴 そうとは存じましたなれど、おいらん初めに此事を、誰にもいふなと、主さんがきつう口止しましたゆゑ、つい強情をばり通し、且那さんお許しなすつておくんまし。

與兵 なんの誤るにも及ばぬ事だ。そこで且那さま、其お金の仔細と云ふのは、

丁山 どうした事でござんすか?

曉雨 與兵衛どんも、おいらんも、聞て下ッし。あのお鶴の物言から立居振舞、天晴の育ち振。親御は誰か知れエが、是程の人がらうて、苦界に其身を沈むるとは、よくくの事であらうと、色氣なしの不便が

起り、折ふし聞た身の上ばなし、殊に病氣の不自由を、見兼て進ぜた見舞の三兩、それも中々受取らず、是非にと言ふなら丁山に聞た上での事に仕やうと、何處までも侍堅氣、僅か計のはした金麗々と言はれちやア此方の耻だ、黙ッて受けて置きなせエと、無理に渡した此金子。仔細と云ふのは此通りだ。是で疑は舞たらうね?

與兵 アッ厚い思召て下すつたお金。お鶴が何と聞かれても、言はなかつた次第も分り是で疑ひは舞ました。且那さま、有がたう御座います。おいらんお禮を云つておくんなせエな。

丁山 曉雨さん、お鶴さんへきつい信切、嬉しうございます。

ト口には云へど丁山は心中稍々嫉妬の想をなし、且は間の悪いので乙につんと仕て居る。お熊は居たたまらず

お熊 お鶴さんのあかりが立たら、私は御用濟、どりや二階へ参りませう。藏前の且那、御ゆるりとなさいまし。

曉雨 ハ、アお熊。乙ウ世詞を云ふぜ。併しおれに掴まれて痛かつたらうが。勘辨してくれい(懐中より

金子を出し紙に包みて投出し)こりやア誤り賃だ。

お熊 ありがたう御座います。こんな事なら幾度でも宜しう御座いますホ、ホ、ホ。

ト世詞笑をなし、金子を載き、奥(下手)に入る。曉雨は懐中より水引を掛けたる目錄包を取出して、
丁山に向ひて

曉雨 おいらん。お鶴が神妙な心掛け、余もひどく感心したゆゑ、お前にも篤と話し、親許へも見續がせ様
と、此通り、包んで来た拾五兩、改めて當人へ取次てやつておくんせエ。

ト出せば、丁山は益々不機嫌にて

丁山 有がたうさますが、わちきの座敷で世話する振袖。主さんからお金を貰ふわけがありません。

ト突戻すを止めて

與兵 イ、やおいらん、そうで無い。常不斷おいらん衆が伽羅の無心と事替り、親へ見續の思召し、こんな
尊いお金は無い。モシ旦那さま、此お金は與兵衛が健にお預りを致しまして、お鶴の親へ、きつと届
けて遣はします。お鶴、よくお禮をおいひなせエ。

お鶴 曉雨さん、段々の御信切、何とお禮を申さうやら。

兩人 有がたう御座ります。

曉雨 まづこれで事済だ、是から二階で一杯飲う。おいらんもお鶴さんもおいでなせエ(と皆々立に掛る)

葛城 (向ふ揚幕の内にて) 曉雨さん、少し待て下さんせいなア。

曉雨 あの聲は。

丁山 葛城さん。

ト原の座に就く。茲に(向ふより)松葉屋の傾城葛城(部屋着上草履)番頭新造豊花、新造葉山。
禿うねび。芳野附添ひ、銚子盃を持たせ出來り(花道に)立止れば

曉雨 余を呼止たば、おいらん御座エましたか?

葛城 アイわちきて御座んす、親方さんも御免なまし(と舞臺に來り、曉雨の前に座りて) 曉雨さん、様子は
はみんな聞きました。餘り心の優しさに、嬉いあまり葛城が、持せて來た此盃、一口のんでおくんせま
し(と杯を取上げて曉雨に指して) 曉雨さん、よう三兩のお金、お鶴さんに遣て下さんした。此里の習ひ

千兩の無心、二千兩の身受、その全盛の取沙汰は珍らしうも無いけれど、信實もつた情の見舞、聞て涙の翻るゝは、五丁町はじまつて、恐らく今までござんすまい。僅三兩と云ひなますが、情の重みは百萬兩。曉雨さんも、よく遣なました、お鶴さんもよくお貰ひなさんした、夫を嬉しいと思はねば、女郎冥加に盡ますぞへ。誰に貰ふたどうしたと、お熊どんに貰められても、命に掛て言はなかつた強さ、ゑらさ、夫でこそ本統のおいらん。モシ旦那さん、お目度存じます。サア曉雨さん、其お盃、祝ふてわちきの親方へ差して下さんせ。

ト曉雨は盃を與兵衛に指して、葛城に向ひ

曉雨 おいらん、よく祝つて下すつた。それで余の實意も知れ、お鶴の顔も立ち、こんな嬉しい事は無いぜ。

與兵 大きに左様で御座いまする。

ト返盃する。此時幫閑善孝は滿の金太郎および奴の黒内とを伴ひて急ぎ出來り、曉雨に向ひて

善孝 モシ旦那、急に頭がお宅から駈付けておいてなさいました。

曉雨 ム、そうか。金太、何か急用でも出來たのか。ヤア黒内さん、お出なせエまし。

金太 ヘイ唯今しがた、小川町の天野様から、黒内さんが急ぎのお使。

曉雨 黒内さん何の御用で御座いますね？

黒内 その御用は人中で……

曉雨 さうで御座いますか。それじゃアあちらで駕くりと承はりませうか。

ト金太郎黒内を引つれて奥に入る。跡に葛城は丁山に杯を差して

葛城 モシ丁山さん、常から立派な俠客、まだ其上に此やうな情深い曉雨さん、それを名染の客人に取て居さんすお前の手柄、お褒しふござんすぞへ。

丁山は是にて再び嫉妬の念を起して

丁山 成ほど、曉雨さんのなされ方、信切ではござんせうが、わちきに内證で見舞のお金、其内裏をさがしたら、どんな理があるかも知れぬ。今時の引込さん、中々油断は出來ませんよ。

葛城 是は仕たり丁山さん。女嫌ひの曉雨さん、そんな否らしい處置ぶりが、あらう理はありますまい。それを乙に疑ぐるのは、お前の邪推と云ふものさます。

丁山 オヤ葛城さん、お前は曉雨さんの肩を持ち、わちきを邪推とおいひなますは、ム、分ツた、扱はお前は、曉雨さんに遠から岡惚したゆゑに、氣があつての事さますねエ？

葛城 こりやをかしい丁山さん。人中で口きくなら、相手をよく見てきなまし。瘦せても枯ても松葉屋の葛城、達入の意地づくては、否な客にも比翼ごき、枕並ぶる事もあらうが、是まで唯の一度でも、人の客衆に指一ツ差した事はござんせぬ、それにお前は此大勢の真中で、わちきが遠から曉雨さんに、氣があつて、岡惚したといひなました。サア其いりわけを今此で立派に言つておくんまし。

ト氣色を變へて詰掛れば、丁山も膝立直して

丁山 アイ言ひやんした、お前が慥に其氣があるゆゑ、さうじやと言つたがどうさんす。たとひお鶴さんをば内々で、曉雨さんが、なぐさましましたに違ひは無いと言ふた所が、わちきのお客にわちきの新造、なにもお前が構ツた事はありますまい、夫に何ぞや、女嫌ひの曉雨さん、そんな否らしい處置振があらう理がない、お前の邪推と云ふものだと、人も頼まぬ取なし詞。こりやア葛城さん、的きり誰ぞに頼まれて、お鶴さんの肩持か、さうで無いなら、曉雨さんに氣があつての手管であらうと、云ふたは

わちきの誤ではあるまいと思ひますねエ。

葛城 ホ、ホ面白い丁山さんの喧嘩買。なんほお前が釣鐘さんのお仕込でも、筋の違ツた押賣は、餘所へいつてお仕なまし、お鶴さんの煩ひを不便に思つた曉雨さん、情深い心意氣、察して見れば涙が出るほど優しい信切。宜う遣てくんなました、宜う言はずに居なましたと、誓たはわちきが當然。全體ならお前が手をつき、お禮をいつてよい所、それに引かへ不足らしい焼餅詞、馬鹿々々しいじやアありせんか。

トやり附れば、丁山は急腹に成つて

丁山 そういひなんすりやもう了見が……

ト立掛るを、與兵衛止めて

與兵衛 これさ丁山、何をするのだへ。先きから聞て居たが、思はぬ二人の言ひ争ひ、少しお前の口が過ぎるナント善孝、貴公もそうは思はれエかのう？

善孝 そうで御座いますねエ。こりやア丁山さんのおいらんが、お宜しく無いやうで御座いますね。

丁山は猶も悔しけれど、わざと氣を入替て

丁山 成ほど、何にもわちきが悪うございました。お鶴さんを疑ぐつたも、葛城さんに狂ッて掛ッて言過たも、みんなわちきが浅果ゆゑ、今改めて誤ります。勘忍しておくんなまし。

葛城 さうおまはんの心が解りやア、わちきもそれで氣が濟めば、誤る事はありませんよ。

丁山 そこで葛城さん、わちきがお前に一ツのお頼み、どうか聞入れておくんなましな。

葛城 わちきに頼みと言ひなますは？

丁山 外でもありイせんが、お前が今も譽そやした曉雨さん、わちきの様な張も意氣地も無い者の客衆にするのは不釣合、それに又立派な育のお鶴さん、わちきじや世話も出来ぬに由て、今日限り手を引て、わちきの方から断ります。是から先は葛城さん、どうなりと宜やうに、お二人さんを扱つて、捌を附けておくんなまし。

善孝 おいらん、そりやア可ますまい。そうなつた日にや猶更以て物事に角が立ちます。

豊花 唯このまゝに此事は、原の通りに仕た方が、宜からうと

兩人 存じまする。

ト慰むる。與兵衛はお鶴と兩人にて此場の仕宜いかゞ成る事かと案じて居る。葛城は平氣にて

葛城 ホ、ホ丁山さんと仕た事が、改まつての切口上「曉雨さんやお鶴さんの扱ひは、おいらん、どうぞ機嫌を直し、原の通りにお仕なんし」と言つたら都合がよからうが、頼まれて見りやこの葛城、立派に承知しやんした、何にもわちきが引受ませう。併し今言た詞もあれば、釋迦一代曉雨さんを、わちきの客衆にや仕ませんが、今夜からして改めてお鶴さんの客人にわちきが頼んで仕ますぞへ。お鶴さんも又わちきが世話して、随分派手に三月から、仲の町へ突出して、大夫職にする程に、安心してお居てなまし。

ト立派に返答すれば、丁山は愈々心に怒を含みて

丁山 ハテ口廣い葛城さん。見事さうして見せなますか？

葛城 丁山さん、御念には及びませんよ。

與兵 ム、それて話ばさつぱり極つた。丁山も、もう言分はあるまいから、早う二階へ往つたがよからう

丁山 アイ往けと云ふなら往きますが、旦那さんも、大そう葛城さんの肩を持ち、わちきの顔を潰しなますねエ。

與兵 何も潰す事はありませんやア仕ねエよ。原はと云へばお前の心のひがみから……

丁山 何がひがみてござんすへ？

ト此度は與兵衛に狂て掛る。此時丁山の禿吳羽は向ふより出て來りて

吳羽 おいらんへ、あの釣鐘さんが來なましたぞへ。

與兵 ナニ釣鐘の親方がお出でなすつたと、サアおいらん、早く顔を出したがいせ。善孝お前そこまで、

おいらんを見て上げてくんせエ。

善孝 畏まりました。サアおいらん、お座敷の外までお供を致しませう。

ト勤むれば、丁山は是を汐に立上つて

丁山 どれ釣鐘さんに逢て來やう。

ト善孝、禿、附添て向ふに入る。入違ひて曉雨は、黒内金太郎を連れて奥より出て來りて

曉雨 それじやア余は是から直に黒内さんと御一所に天野様へ往くと仕やう。お寺の方から都ての事は……

金太 萬事わつちが老父と兩人で、お差圖通りに仕て置きますから、安心しておいてなせエまし。

曉雨 ム、萬端ぬかりの無い様に……

金太 承知しました。皆さん御免なせエ。

ト急ぎ向ふに入る。

與兵 旦那さま。どなたか御不幸で御座いますか？

曉雨 ナーニお屋敷の折口よ。

葛城 曉雨さん。委細の事は聞きなましたか？

曉雨 話を仕ながら聞て居たが、おいらんの違引、忝うござエますぞ。……時にお鶴、お前の家から急の使は來なかつたか？

お鶴 イ、エ使も何も來ませんが。なぜぞますねエ？

曉雨 ハテ使の來ない筈は無いが（不審する）

此時若もの喜助、急ぎ(下手より)來りて一寸一禮して、手紙をお鶴に渡して

喜助 へいお鶴さん、お宿から急のお使、お目に懸り度いと待て居ますぜ。

ト言捨て直に(下手に)引戻す。お鶴は手紙を披見し、悔りして

お鶴 エ、それでは昨夜、父さんも母さんも、人手に掛つて……

ト叱相を變へ狂氣の如くに成つて立上る、曉雨は引留て

曉雨 その變事は浮ツかり世間へ言はれぬ事。余も其事をたつた今お屋敷からのお知らせで、聞てびつくり仕た所だ。

葛城 エ、そんならお鶴さんの兩親が、

與兵 變死を仕たと云ふ知せか?

ト皆々驚き、お鶴は泣入る。

曉雨 お鶴さん、泣て居る所で無い。使に逢つて内々で、篤と様子を聞きなせエ。與兵衛どん、世話をし下つせエな。

與兵 承知しました。サアお鶴、余と一所で使に逢て、委細を聞くと仕やうぜ。

ト立上れば、お鶴は泣ながら無念の色をなして

お鶴 何奴なれば、やみくくとわが父母を殺せしか。女てこそあれ親の敵。

ト無念の思ひをなす

曉雨 (立上りて) それでは直にお屋敷へ參つて、御用を鏡はうか。

葛城 此上ともに曉雨さん、お鶴さんの力に成て……

曉雨 ヲ、町人なれど藏前の曉雨だ(葛城が持出たる脇差を取て差すを木の頭)安心しておいでなせエ。

ト黒内を連れて(附際へ)ゆき掛る。葛城は見送る。お鶴は泣入る。與兵藏は介抱する。

(拍子幕)

第四幕

(一) 新吉原揚屋密談之場 享保十六年辛亥三月廿日の夕方

此は新吉原の揚屋森田屋の奥座敷(本舞臺四間常足の二重)。三方は折廻て椽側。下手の椽は猶廻つて

俠客春雨傘

表(下手)に續く(出入)。座敷(二重)の正面上手の一間は塗壁にて下地窓を附け。其次の二間は四
枚建の襖(出入) 其次の一間は塗壁なり。庭(平舞臺)の上手は板塀に切戸を設け(出入)。下手は
袖塀にて見切り。沓拔飛石などありて、下手には鐵の大燈籠をすゑたり。
此に仲居お仙(年増) お豊(島田)煙草盆座蒲團を並べて居る(幕明く)

お仙 お豊どん。今日は鶴鶴組の逸見さんがお出に成るはず、それで松葉屋の薄雲さんが、仕舞になつてあ
るゆゑ、もう入らッしやる時刻だぞへ。

お豊 オヤさうですか。道理でさッき松葉屋の吉どんが、お客様はまだお越になりませんかと、聞きに來ま
したよ。

お仙 さうかへ。あたりまへのお客なら始末が宜が、人も否がる鶴鶴組、その上に少しの事が間違つても、
それをとッこに、ものいひ附け、喧嘩を仕掛る逸見さん、あの御連中には困り切るねエ。

お豊 ほんとうにさうですよ。其上に薄雲さんは突出し初日から、曉雨さんの初名染、
お仙 さうさ。お鶴さんと云つて引込の時分から、葛城さんが世話をして、曉雨さんの相方と約束きめた譯

ある中、それをあの此面の逸見さんが、いくら呼んで口説いても、斷く事はあるまいよ。

お豊 それを知らずに今日も亦、薄雲さん呼び出すとは、

お仙 馬鹿げきつた事だねエ。

兩人 ハ、ハ、ハ

ト笑ひながら噂を仕て居る。此時奥より仲居おきち(島田)出て來りて

お吉 お客様までございますよ。

お仙 お客様まはどなた?

お吉 鶴鶴組の逸見様。

お豊 オヤ噂をすれば影とやら、

お仙 うつかり噂は出來ないれエ。サアお吉どん、お客様をおつれ申しな。

お吉 アイ

ト奥に入る。お仙、お豊は上手に客座を設くる。此時正面より逸見鐵心齋(大小伊達衣裳)先に立

俠客春雨傘

俠客春雨傘

ち、入谷丹五郎、根岸松兵衛、附添ひ出て來りて、着座すれば

お仙 逸見さま、入ッしやいまし。

お豊 いつも御機嫌で、

兩人 お目出度ございまする。

鐵心 ヤアお仙にお豊か、相替らず美しいのウ。

丹五 そりやア先生、その筈で御座りまする、此節は春氣のせい二人とも、

松兵 地色が出来て、大うかれて御座りまする。

鐵心 ハ、ハ、二人とも地色が出来て、浮れて居るか、そりやアお楽しみだ、それで其色男は何者だ？

お仙 アラ嘘で御座いますよ、どうして〜私しども見た様なお龜に、地色なんぞが、

兩人 出來ますものでは御座いませんよ。

鐵心 イヤ〜さうで無い、二人とも揃ひに揃って器量よし、愛嬌はあるし、誰が見ても唯は置かぬワ。

お豊 そりや旦那、薄雲さんのおいらんの事で御座いませう。

お仙 そうとも〜、旦那のお目には、外の女は入らア仕ないよ。

丹五 何にもさうだ、薄雲には、先生のきつい惚やう、

松兵 刀に掛けても言ふ事を、聞かせにや置かぬ御決心。

鐵心 兩人の申す通り、殊に藏前の曉雨とやら、當時賣出しの俠客、其名染と聞くからは、猶更以て此方が
手活けの花に致さねば、白柄大小神祇組、その組々へ聞えても、鶴鶴組の名折れに成るワ。それは格
別、薄雲はまだ参らぬかのウ？

お仙 お迎を出して御座いますれば、薄雲さんのおいらんも、

お豊 もうお出で御座りませう。

此時仲居のお吉、下手椽側より出て來りて

お吉 お仙さん、おいらんが入ッしやいました。

ト知らせて直に引返す。

お仙 オヤ旦那、おいらんが入ッしやいまして御座いますよ。

俠客春雨傘

俠客春雨傘

ト其座を設くる。此時下手椽側通ひに松葉屋の傾城薄雲（伊達傾城の拵）番頭新造豊花、禿金彌附
添ひ出で来れば

お仙 おいらん、お早う御座います。

お豊 こちらへ入ッしやいまし。

ト丁寧ていねいに挨拶して着座させる。薄雲は氣に入らぬと云ふ體にて座に着き

薄雲 逸見さん、皆さん、よう来なましたねエ。

鐵心 ヤア薄雲、いつ見ても美しいが、今日は殊更あてやか〜、

丹五 誠に天女てんじよ天降り、花ふる里へ御來臨ごらいりん。

松兵 歌舞かぶの菩薩ぼさつの御影向ごやうまう。

丹五 先生御恐悦けうごつに、

兩人 御座りまする。

鐵心 忝かたじけない〜。こりや仲居等、薄雲へ盃さかづきを侷すくめてくれい。

お仙 お豊 畏りました。

ト奥に入り、直にお吉と三人にて、酒肴さかあひおよび吹物膳ふきものぜんを持出し、鐵心齋薄雲丹五郎松兵衛の前に据すま

鐵心 どれ我等毒味どくみを致さう（お仙の酌しやくにて一杯を傾けて）サア薄雲、めて度う盃さかづきささう。

ト出せば薄雲は一寸見て

薄雲 お盃は嬉しいが、わちきやア御酒ごしゆはきらいざます。

鐵心 酒が嫌ひとあるならば、我等が助すけけて遣はす程に、飲む眞似まねをして口を附つやれ。

薄雲 助けてもらふもきつう嫌ひ、マア堪忍しておくんまし。

鐵心 ハテ扱あつか夫はすけ無い挨拶。然らば盃だけでも受けてもらはう。

薄雲 サア其盃そのさかづきを受けるのが嫌ひゆえ、...

鐵心 ム、それじゃア其方そのかたは身共みどもが盃、受けるが否いなじやと申すのだなア？

薄雲 逸見さん、悪う思ッておくんましな。

俠客春雨傘

トつんと仕て煙草を吸て居る。鐵心齋はむツと仕て

鐵心 薄雲、けしからぬ其方が挨拶、この逸見鐵心齋がさした盃、受けぬと申すは？

ト立腹の體を見て

豊花 ア、申し逸見さん、お差しなされたお盃、受る受ぬは客と間夫、我儘いふも口舌のたね、裏と表の仲の町。

お仙 其お心を推もじして、一寸お合を致しませう。

丹五 ム、成ほど。こりやア其方たちが申す如く、口と心の裏表、此節はやる小唄にも『憎い〜は可愛の裏よ。』

松兵 否じや〜は又その裏よ。泣いておどすは裏の裏』

豊花 その裏ふかい心の底、さう性急に聞かんしても、言はぬが女郎の意地と張

と薄雲に目くばせして其意を悟らすれば、薄雲もそれと覺りて

薄雲 ナント逸見さん、さうしたものでじや御座んせぬか。

ト鐵心齋を秋波にて見れば、鐵心齋は少し機嫌を直して

鐵心 ム、何様、薄雲が嫌ひの酒を、飲めと云つたは身共が不粹。然らば盃は致すまいが、煙草を一服吸付けてもらはうか。

ト手を出せば、薄雲は手に持ちたる煙管を見て

薄雲 逸見さん、お安い御用でござんすが。わちきが持た此きせる、煙り浅間の薄雲なれど、心は深い舞鶴の、羽搔に包む思ひ草、人に許さぬ吸口は、誰があつらへの脂返し、……

鐵心 何と申す？

薄雲 ホ、ホ、お客に聞いた煙管のはなし、堪忍しておくんまし。

ト煙管をわきに置く。鐵心齋又々むツとして

鐵心 煙草までも否じやと申すか？

お豊 これは仕たり、逸見さんの腹立上戸、何ぞと云へば、二言目には慳食聲。マアよう思ふてもお見なまし、此薄雲のおいらんは、花開きの突出して、まだ一月も立たぬ勤め、言はゞ廓の蕾の花、この大勢

の人中で、盃事や吸附煙草、いくら心に思ふても、耻かしいのが初心のつれ、主が堅いお武家でも、ちツとは其等を推量したかようさますよ。

ト慰むれば、鐵心齋は諾いて

鐵心 いはれて見ればさうでもあらうが、併し瀟雲には、まだ突出しの其前から、晴雨とやら云ふ名染の客が……

お仙 ア、申し旦那、お客の名前はひどい禁句、知つても言はぬが粹の粹、

お豊 不^ふ断^{だん}の粹にも似合はぬ詮議、

お吉 お止になすつて、

三人 御座りませいなア。

鐵心 扱こそわいらア申合せ、粹こかして嗜ませ、瀟雲の肩を持ち居るな。イヤ其手は喰はねエ、ツペコヘ言はずと、すツこんで居れエ。

丹五 兎かう云ふより一同が、此に居るのが戀路の邪策、

松兵 此場を外し、表二階で一杯くまうか？

丹五 それがよからう。サア女ども我等と一所に、

兩人 かう参れ。

ト豊花金彌仲居三人を引れば

豊花 わたしや葛城さんの吩咐で、此おいらんの番頭新造、かた時そばを離れぬが、わたしの役でござんすぞへ。

金彌 わちきもおいらんに、お附申して居ますわいなア。

丹五 エ、喧しい。サア参らぬか？

松兵 参れいと申すに。

お仙 じやと申して、おいらんお一人、

お豊 このお座敷へ、

丹五 其方等が存せぬ事だ。

松兵 ぎり／＼一所に、

兩人 うせやがれ。

ト五人をせき立て、手を取て無理につれて奥に入る。薄雲も是を見て

薄雲 そんならわちきも、

ト立上るを、鐵心齋は裾を押えて

鐵心 こりや待て薄雲、

薄雲 何ぞ御用でござんすかへ。

鐵心 用があるから坐れと申すに（是にて薄雲再び着坐する。鐵心齋は物利かに）コレ薄雲、強情も大概に致したが宜からうせ、然も櫻の初紋日、其の突出の初日から、日毎に呼出す身共が眞實、いかに年端がゆかいても、知らぬとは云はせぬぞ。併し長う短う云ふのは嫌ひだ、サア否か應か、二ツに一ツの返詞をいたせ。

薄雲 サア主の眞實、よう知てをりますが、主が今も言はんした、曉雨さんと云ふ深い男のある身體、外の

お客に逢ふ事は、否てござんす。

鐵心 言ふな薄雲。その曉雨は名染の客でも、女に枕を交さぬと、誰も知つた變りもの、深い中とは言はせぬぞ、よし又深い中にもせよ、情を賣るが其方の勤め、優しく言へば附け上り、四の五の言ツたを是迄は勘辨して居たれど、モウ此上は容赦いたさぬ、否と言はふが、應と云はふが揚代拂ツた客の威光だ、從はせずに置くものか。

ト引寄せに掛れば、薄雲は其手を振拂つて

薄雲 こりや可笑い逸見さん、此薄雲と曉雨さんとの二人が中、枕交はすか、交さぬか、人目許さぬ閨の内誰が知つて居りますかへ、深いも深いも眞實神かけ深い中、並大體では御座んせぬぞへ、それをば主が横合から、從がへ躰けといはんしても、情は賣れど心まで、賣らぬが里の意氣地でござんす、見るから否な逸見さん、揚代拂ふたお客の威光、見せらるゝなら見せなまし。テモ氣障な人さんで御座んすぞいのう。

ト煙草を吹掛けて澄して居れば、鐵心齋は又々立腹して

鐵心 おのれ小女こめの分際ぶんざいで、おれに向つて其惡態あくたい、

ト立掛る。此前より庭先（上手）の切戸を開けて、釣鐘庄兵衛は（伊達衣裳、一刀、尺八）顔を出して伺ひ居たるが、此時聲を掛けて

庄兵 逸見さん、マアお待なせエまし。

ト飛石傳ひに出て來れば

鐵心 ヤアそこへ來たのは釣鐘の庄兵衛どんか。サア此方へ通りなせエ。

庄兵 御免なせエまし（庭先に入來り、椽に腰を掛けて、薄雲を見て）

ヤア薄雲さん、モウ歸かへんなさるのかれ？

薄雲 サア釣鐘さん、今も今とて逸見さんが、わちきを捕とらへて、從がへ靡なげと言ひなんすゆゑ……

庄兵（薄雲が詞ことばに冠かぶせて）それで氣合きあが悪いに由よして、歸かへり度と云ふのなら。のウ逸見さん、遠慮なしに歸かへえれと云つておやんなせエまし。

ト心ありげに云へば

鐵心 歸り度いなら歸しも仕やうが……

庄兵 薄雲さん此こゝは宜いから歸かへんなせエ。

是を沙さに薄雲は立つて

薄雲 逸見さん。それではわちきやア歸りますよ。釣鐘さん、ゆるりと話しておいでなまし。

ト（唄うたに成て）薄雲は椽傳せんづかひに下手に入る。鐵心齋は見送みおくつて、庄兵衛に向ひて

鐵心 釣鐘、なんで貴様は薄雲を歸したのだへ？

庄兵 逸見さん、おめエさんも、あんな子供をつかめエて、面白くもれエ無理口説くせ、失禮ながら、人に知れると男の器量きりやうが下がりますぞ、それで歸したのでござエます、そりやア格別きやくべつ、東屋とうままで御使ごして、達たつてわつちうちに逢あひ度ひごエとお前さんの口上くちがしは、どういふ御用ごようで御座ござエますわ？

鐵心 ム、折入せいりつて鐵心齋、貴様に相談し度と云ふは（あたりを見廻して）コウ釣鐘、兼かて貴様に明あした通り、此鐵心齋は敵持たかもち、ふとした喧嘩けんかの遺恨いこんから、阿部川町の浪宅なみぢで、討果うちがしたる一人の浪人なみのり、その浪人の娘むすめと云ふのは、慥たしかにそれとは知れねども、薄雲ではあるまい歟かと、推量すいりやうばかりか世間の噂うわさ。尤なほも

おれが親の敵とは、夢以つて知らぬ様子、知つた所が高が女郎、恐しい事は少しも無いが、由断のな
らぬはあの曉雨、去年から淺草で、人に知られた賣出し男、それが尻を押した日には、鐵心齋が身の
大事、それ故にこそ曉雨めの、名染と知つて薄雲に、強て逢はうと呼出すも、色に事よせ様子をさぐり、
二ツには曉雨めを遠ざけさせん深き計略。併し其計略が外れて見れば、釣鐘、この先の安心は、どう
したもので有らうかのう？

庄兵 初めて聞いた理由因縁。薄雲は女の事、恐しくも怖くも無いが、何かに邪魔はあの曉雨、わつちも彼
奴には遺恨のある中。よう御座エます、明日とも言はず今夜の中に、不意の喧嘩で彼奴が命を……

ト耳に口よせ呟けば、鐵心齋は打諾きて

鐵心 仲の町にて喧嘩を仕掛け、仕損じたる其時は、

庄兵 歸りを待伏せ大勢で……

鐵心 コレ

ト制して再び庄兵衛に呷く。此時奥に人聲あつて

お仙 マアお待ちなさいまし。お光を持って参りますから、

ト言で、お仙、お豊燗臺を持出し、

其後より丹五郎 松兵衛 大酔の體にて出て來り

丹五 イヤサ先生には先程よりして、薄雲とお差向ひ、

松兵 しつぱりのお長話し、餘り長い御身の毒、

お豊 お邪魔いたしに、

四人 参りました。

ト燗臺にてすかして見て

丹五 ヤア貴殿は釣鐘、

松兵 庄兵衛どの、

お仙 どうして此へは、

お豊 ごさんした？

庄兵 薄雲の名代新造よ、どれお暇と致しませうか。

俠客春雨傘

鐵心 そんなら釣鐘、

庄兵 逸見の先生、

鐵心 必らず手遣ひ無い様に…

庄兵 ヘエ承知でございます（庭に出て空を眺めて）マタばらく降つて來たぜ。

お仙 それじやア親方、傘を上げませうか？

庄兵 ナーニ傘にやア及ばねエ、ついそこだから、

お仙 そこでもあらうが、親方を濡させては、

鐵心 丁山に濟まぬであらう。ワハ、ハ、ハ

ト笑ふ。此前にお豊は奥に入りて、直に紺蛇の目の傘を持出して

お豊 ハイ親方お傘を、

ト差出せば

庄兵 こりやア忝けねエ。

俠客春雨傘

ト請取て、ポンと開き（木の頭）一寸逢つて來ませうか。

ト鐵心齋と顔を見合せて意中を示す。（此道具廻る）

（二） 同仲の町喧嘩の場 同日の夜

中央より上手に掛て仲の町引手茶屋和泉屋の店先（四間常足の二重）を斜に見る。店（二重）の正面上手の二間は四枚建の障子にて、下手の二間より折曲りて塗壁これに花鳥の彩色繪を帯腰に張る。家體の上手は板塀にて見切り、下手少し斜に青竹の園を廻し、櫻の植込、花盛りにて、下には山吹海棠等の下草ありて、所々に雪洞を附たり。家體と竹園の間は横町にて此所には手桶を飾つたる天水桶を置き其先は下手より奥に掛けて仲の町の景色（中遠見火入）茶屋の前（平舞臺）には床几二脚ほど並べたり。都て仲の町花盛り夜の體なり。

此に薄雲は床几（正面）に腰を掛け、番頭新造豊花、常の新造袖浦、禿金彌いろは左右に附添ひ、椽先には和泉屋の亭主新兵衛腰を掛け、下手には松葉屋の若い衆、薄雲の箱提灯と長柄の傘を持ち、新

兵衛の側には、見番蔭者お直、お愛立ち掛つて居る。(道具止る)

新兵衛は烟草盆を薄雲の前に出して

新兵 おいらん一服お上りなさいまし。

薄雲 ありがたうございます。

お直 おいらん、よい安排あんぱいに雨も止やまして御座いますが。道が悪いので、道中はお困りごんりで御座いませうねエ。

薄雲 ナニ森田屋から此こゝまでだから、近うございますよ。

お愛 森田屋のお客は、あのげぢくさんで御座いましたか？

豊花 お愛さん。あれだから、おいらんもきつう否いやがつて居なますよ。

新兵 げぢくさんとは、どなたの事だね？

袖浦 親方、知らツしやらないの。それ鶴鶴組の逸見さんの事さまアねエ。

薄雲 これさ、お客の噂うわさは外ほかでせぬもの、そりやアさうと、曉雨あきりさんは、もう來さつしやりそうなものさますれエ。

新兵 さやうで御座います。もうお出に成る時分、

お直 待つ身はほんに長いもの、

お愛 おいらんお察し、

皆々 申しまする

此時上手うまにて獨吟どくぎんの唄聞うたきければ、薄雲は耳を済まして

薄雲 オ、よい聲で、三味線もきつう巧うまいが、お直さん誰たれさますねエ？

お直 左様さまようさ。唄うたはたしかに河東節かとうしふしの夕丈せきぢやうさんで御座いますが。三味線は、ハテナお愛さん、誰たれだらう？

お愛 あの撥音はちやうとは、お綱おづなさんらしいワ。

お直 さうくお綱さんに違ちがひ無い。二人ともに、

兩人 むまいねエ。

豊花 夕丈さんにお綱さんじゃア、巧うまいも道理、ことにあの唄は、

袖浦 おいらん、聞きて居て、よい心持こころもちで、

俠客春雨傘

兩人 御座いませうれエ。

新兵 あの唄は、此節藝者衆が皆唄ふて、大そうはやるが、おいらんに理があるのかね？

お直 オヤ親方あの理を知らないの、そりやア驚いた。あの唄はね、大きいおいらの葛城さんが、曉雨さんの事をほめて、お作りなマツた春雨傘と云ふ小唄。

お愛 それを夕丈さんが、節附をして唄出したが始りて、今じゃア此の廓の藝人て、春雨傘を知らぬものは兩人 ありませんよ

○春雨傘

「春雨に、なかばつぼめし、蛇の目の傘の、ぬしは誰かや舞鶴の、紋は誰かや、問はても知れた曉の、雨に濡たる然か、啼音や聞かん、聞たぞへ。主の情の惠の雨は、人の命のつなぎ緒や、三すぢの糸は細くとも、音色はゆかし忍び駒。男の中の男とは、優しい中のやさごころ。』

此獨吟の中、よき頃合に、向ふ(揚幕)より大口屋曉雨(銀針金のなまじめ、黒羽二重、紅裏、舞鶴の紋、淺黄無垢の下着、一尺八、印籠、遊蛇目の傘、枉の下駄)出て來り花道にて宜敷ありて

此方(舞臺)に來れば

薄雲 曉雨さん、

女皆々 おいてなさんしたか。

曉雨 これは、お揃ひでエすな。

薄雲 サア此へ、

女皆々 おかけなさんせいなア。

曉雨 御免なせエ(椽臺に腰を掛け、薄雲が吸附けて出したる煙管を取て飲みながら)おいらん、どこの歸りて御座エますな?

薄雲 森田屋の歸りさんすが、曉雨さん、今日といふ今日、わちきもつくく困り切りましたワ。ねエ豊花さん。

豊花 そうございます。あんなに困らツしヤツた事は、

袖浦 ありませんよ。

俠客春雨傘

俠客春雨傘

曉雨 ハ、ハ、ハ、どうで廓は苦界くがいだもの、客に困るはめづらしうもなんと無い事。併し森田屋の客衆と云ふは、おいらんの身には大事のお客、ういもつらいも出世のため、

ト意こころあり氣に云へば、薄雲も思入れあつて

薄雲 心に願ふ本望を、達する爲の手掛りに…

曉雨 これく、薄雲と仕た事が、おれを相手に餘所ほかの、おのろけを受けさせるとは、そりア餘りひどからうぜ。ハ、ハ、ハ

豊花 あれさ曉雨さん、おいらんは、のろけどころか、きつい難儀、

袖浦 知つて居ながら、その様にかからうのは、

兩人 罪ざますよ。

曉雨 ハ、ハ、ハ、二人までが眞目まじめに成つて、言分いひわけをする中うちがなかしい。そんな事はどうでも宜から、一杯のんで騒ぐと仕やうか？

新兵 それが宜しう御座りませう。併しおいらんは？

曉雨 外に客衆も無いやうなら、わしと一所に夜櫻を、ゆるりと見物お仕なせエな。

薄雲 (豊花に相談して) それじゃア皆の衆、遊んで居てもよう御座んすか？

お直 よい所か、わたくし等はおいらんの御一ごいち座が、

お愛 何より嬉しう御座いまする。

ト皆々立掛からうとする。此時向ふより暫間善孝急ほろかんぜんかういせぎ足にて出て來り (花道に止り) 此方を見て

善孝 ヤア旦那も、おいらんも、此方に御出て御座いましたか？

ト(舞臺に)來れば

曉雨 善孝、何か用でも出來たのか？

善孝 ヘイ香具山かいはやまの旦那から、おいらんへ急のお手紙、

ト懷中より手紙を出して薄雲に渡せば

薄雲 ナニ香具山さまからわちきへお文(不審ふしんして文を披き一讀して) 曉雨さん、内證うちしょうて讀ておくんなまし、

ト出せば、曉雨は一讀して

俠客春雨傘

俠客春雨傘

曉雨 アツ天野様、イヤ香具山様の御信切、ありがたい思召し。それじゃア薄雲、お前は直に善孝と、山口田へ一所に往ッて、香具山様のお目に掛り、心の中の思ひのたけ、しつぽり話して来るが可也。

薄雲 そんなら往くと仕ますぞへ。

曉雨 善孝、御苦勞ながら案内してやつてくれい。

善孝 承知いたしました。サアおいらんお出でなさいまし。

新兵 おいらん、

藝者 おしづかに、

ト送る。薄雲は善孝を先に、豊花、袖浦、金彌、いろは等を引きつれて(向ふに)入る。

曉雨 薄雲が居なくなつては、此で飲むのも野暮な詮議。いつそ是れから金子へ往ッて、好きなものでも誂えてゆるりと飲むと仕やうで無いか?

お直 金子はけつかう、

お愛 直にお供を、

兩人 いたませう。

曉雨 新兵衛、家がひどく忙がしう無いやうなら、お前も一所に行かねエか?

新兵 ヘエ忙しくツても金子なら、なんでも、お供を致ませう。

ト立掛からうとする處に、向ふり鐘釣の子分、突座の丸五郎出で來り、暖簾の前に立て大聲にて

丸五 ヤイ此家の亭主新兵衛は内に居るか? 取次して貰はらうぜ。

新兵 ハイ新兵衛は私で御座いますが、何御用で御座いまするか?

丸五 用と云ふのは外でも無エ。吉原町は愚かな事、今戸の端の瓦やき、山下に出る豆藏まで、其名を知つた稻妻組、音に聞えた釣鐘親方、曉雨に逢つて、話しをせにア成らねエ用があるゆゑに、唯今これへお越しになると、曉雨にしつかり取次で貰はうぜ。

ト言捨て、直に引返す。新兵衛、お直、お愛の三人は驚いて

新兵 旦那、唯今の使の口上、稻妻組の釣鐘親方、

お直 丁山さんの事からして、もしや旦那に遺恨を含み、

俠客春雨傘

お愛 喧嘩を賣りに此家へ、押して来るのじゃ、
二人 御座りませんか？

ト案じる。曉雨は平氣にて

曉雨 なんの、釣鐘が此へ来て、喧嘩を賣らうと仕た所が、それを浮ツかり買うやうな、曉雨じゃアない程に、氣を揉まずに居たが宜いワ。併しわざ／＼先觸さきふれをよこしたを、聞捨てに仕て置て、金子へも往かれめエ、退屈だが少し待て居やうか。

ト椽臺に腰を掛直す。新兵衛はお直お愛をつれて暖簾の中より（二重に）上る。

此時向ふより釣鐘庄兵衛（伊達衣裳一刀尺八）先に立ち、子分撞木の權藏、龍頭の龍太附添ひ出て来る（花道にちよつと止まる。）

曉雨は庄兵衛等が来るを見て、大聲にて

曉雨 ア、臭エ／＼、オ、臭エ／＼、素的に臭エ、狗いぬの皮の匂がするわい。オイ新兵衛、早く伽羅ぎやらを持ツて来てくわい。

ト鼻をつかみ袖を打振る。是を聞いて庄兵衛はぎツくりする。新兵衛等は不審の顔をして

新兵 ハテ今ころ掃除が来るはずは御座りませんか？

お直 それに私等には何にも匂ひは致しませんよ。

お愛 旦那のお鼻が、どうかなすツたので、

二人 御座りませう。

ト香箱を出せば、曉雨は取つて香箱の底を叩き、一度に伽羅を煙草盆の火入の中に入れる。庄兵衛等は此方（舞臺の附際）に近づき来れば

曉雨 エ、猶々臭く成て来た。此生皮の匂と来ちやア、伽羅沈香がんかろうでも消せ無エわい。花の廓の仲の町、めつた矢たらに、犬猫の生皮をばぎ、大げふに歩行あほかせるとは、宜ねエ事だ。ア、臭エ、たまらねエ句だ。此鼻が今にちぎれて切れそうだわい。

ト袖を振つて鼻を掩おほふ。庄兵衛は、じつと立つて曉雨が所爲を見たりけるが、胸に徹こたへたと云ふ思おもひ入いれあつて、氣を入れ替て、ずつと曉雨の前を素通りして、上手に入る。是を見送つて

俠客春雨傘

お愛 喧嘩を賣りに此家へ、押して来るのじゃ、
二人 御座りませんか？

ト案じる。曉雨は平氣にて

曉雨 なんの、釣鐘が此へ来て、喧嘩を賣らうと仕た所が、それを浮ツかり買うやうな、曉雨じゃアない程に、氣を揉まずに居たが宜いワ。併しわざ／＼先觸さきふれをよこしたを、聞捨てに仕て置て、金子へも往かれめエ、退屈だが少し待て居やうか。

ト椽臺に腰を掛直す。新兵衛はお直お愛をつれて暖簾の中より（二重に）上る。

此時向ふより釣鐘庄兵衛（伊達衣裳一刀尺八）先に立ち、子分撞木の權藏、龍頭の龍太附添ひ出て来る（花道にちよつと止まる。）

曉雨は庄兵衛等が来るを見て、大聲にて

曉雨 ア、臭エ／＼、オ、臭エ／＼、素的に臭エ、狗いぬの皮の匂がするわい。オイ新兵衛、早く伽羅きんらを持って来てくれい。

ト鼻をつかみ袖を打振る。是を聞いて庄兵衛はぎツくりする。新兵衛等は不審の顔をして

新兵 ハテ今ごろ掃除が来るはずは御座りませんか？

お直 それに私等には何にも匂ひは致しませんよ。

お愛 旦那の鼻が、どうかなすツたので、

二人 御座りませう。

ト香箱を出せば、曉雨は取つて香箱の底を叩き、一度に伽羅を煙草盆の火入の中に入れる。庄兵衛等は此方（舞臺の附際）に近づき來れば

曉雨 エ、猶々臭く成て來た。此生皮の匂と來ちやア、伽羅沈香ぢんかうても消せ無エわい。花の廓の仲の町、めつた矢たらに、犬猫の生皮をばぎ、大げふに歩行あるかせるとは、宜ねエ事だ。ア、臭エ、たまらねエ匂だ。此鼻が今にちぎれて切れそうだわい。

ト袖を振つて鼻を掩ふ。庄兵衛は、じつと立つて曉雨が所爲を見たりけるが、胸に徹こたへたと云ふ思おもひ入いあつて、氣を入れ替て、ずつと曉雨の前を素通りして、上手うへに入る。是を見送つて

俠客春雨傘

新兵 私し共には、何の匂も仕ませぬに、且那はしきりに臭い〜と仰しやつたし、

お直 それに又、稻妻組の釣鐘さん、わざわざ使を出しながら、

お愛 何にも言はず、素通りしていかつしやつたは、どうした理で、

三人 御座りまするか？

曉雨 ナニお前たちが知つた事じや無エよ。(少し考へて) ム、めつたに此は動かれねエわい。

ト腕ぐみして居る。折から向ふより逸見鐵心齋(伊達衣裳、大小、騎下駄)出て來り、(花道に一寸止まり、直に舞臺に來りて) 曉雨の顔を見て、わざと驚きながら、床几に腰を掛けて

鐵心 曉雨と云ふのは、治兵衛汝であつたか。時に治兵衛、汝に逢たは丁度幸ひ、此一角も當節は隠居いたして逸見鐵心齋、鶴鶴組の兄貴様、その鐵心齋が汝を見かけ、頼み入れたい事がある。

曉雨 ム、逸見鐵心齋と、占者じみた名を附けて、押あるくのは汝であつたか。併し占ひても人相でも家業になればそれが重疊(鐵心齋の身なりを眺めて)羊かん色の破羽織、髪も見えない古袴、その姿に引替て、大そう立派の身の廻り。汝、占ひて餘ッほど鏝が取れると見えるな。そりやア格別、おれに頼

みがあると云ふなア、又一步借してくれいと云ふのだなア。

鐵心 イ、ヤもそつと高い品物だ。汝が名染の薄雲を、おれに譲るか、それが否なら、姉女郎の葛城を、おれが相方に取持つか、二ツに一ツの返詞を聞かうか？

曉雨 イヤ何事かと思つたら、女郎買の相談か、薄雲でも、葛城でも、正札附の寶物だ、買ひたいと思ふなら、汝勝手に買に往け、引手茶屋は、おりやア仕ねエよ。

鐵心 ナンノ原を糺せば、おれが家の飯焚が、手足を洗ふ糠までも、持つて参つた出入の札差。女郎買の使ぐらゐ、ヘイと云つて勤めるのは當然だ。

曉雨 フ、フ、二步や一步の強談無心、三年陳のボンボチ米、藏宿のお情で、ヤット露命を繋いだ一角、入山形に三ツ星のおいらん買は、汝にはナト食過る(手早く懷中より一步金一ツ取出し紙に包みて)それほど女郎が買度くば、サア昔の好みに是をやるから、局へいつて遊ん來でい。

ト鐵心齋の顔に投げ付ければ、鐵心齋は活と立腹して、煙草盆をおつ取りて

鐵心 無禮ものめが

俠客春雨傘

ト眉間を目掛けて打つて掛る。其手を押へて
 曉雨 何を仕やがる。

ト鐵心齋が手を捻廻し、煙草盆を奪つて眉間を打つ。鐵心齋は眉間より血汐流るゝを押へて、身構なし、

鐵心 おのれ、おれが額を撃つたよなア。

曉雨も煙草盆を捨て、身構なし

曉雨 オ、何にも撃つた。コリヤ一角。この曉雨が小びたひに、微かに残る傷痕は、去年汝に算盤で打たれた遺恨の名残と云ふ事よも忘れて居やア仕めエ。其仕返しを今こゝで、汝に仕たのが當座の腹いせ。それが何んと仕たのだイ。

鐵心 おのれ曉雨、武士に向つて仕返とは、無禮至極。

曉雨 無禮呼はり片腹痛エ。汝の様なまくら武士、それを恐るゝ曉雨じゃ無エぞ。一番堀から五番まで、建ちつらねたる淺草の、お藏前の札差仲間、五本の指に數へられ、大江戸八百八町の隅々まで隠れも

無エ大口屋、その身代を弟に譲り、男を磨くこの曉雨、弱エものをば助くる代り、強エが自慢で威張りちらせば、町奴でも侍でも、只は通さぬ江戸ッ子氣性、張て張て張通す、男の中の男一匹、ぶたれた額の仕返に、腹が立なら、切るとも突くとも勝手にしるエ、鶴鶴組と云ふからは、相手に取て面白エ、汝が腰の鈍刀、伊達で無いなら抜け〜。エ、誰だと思ふ、一本立の男だて、藏前の曉雨だわいエ、

ト睨めば、鐵心齋は刀に反を打つて

鐵心 返す〜も憎くき曉雨。此世の暇を取らせてくれう。

曉雨 ム、よい覺悟だ。

ト尺八を持替て構へる。此前より家體と圍の四ツ目垣との間に、傾城葛城、立つて見たりけるが此時駒下駄をぬぎ捨て、跣足に成て走り出て來り、兩人の中を隔て、

葛城 マア〜待つて御二人さん。此出入は妾が貰ふた、松葉屋の葛城が貰ひやんした。

曉雨 ヤア葛城か、そこ退け、あぶない、退いた〜。

俠客春雨傘

俠客春雨傘

鐵心 女だてらに大膽に二人が喧嘩の邪魔する葛城、きり／＼そこをどか無いか。

葛城 イ、ヤ、のかぬ、のきませぬ、色香をめぐる吉原で、其刀を抜かしやんすか？ 抜たら花が散らうぞへ。

鐵心 ム、

曉雨 花を散らすは本意で無いが、是には喧嘩の起因もあれば、

葛城 サア其起因も知れてある、わづか一人の傾城ゆゑ、お二人さんが互の意地づく、夫がかうじて此喧嘩。

何事ぞ花見る人の長刀（長刀）。この夜櫻の盛りをば、修羅の刃（刃）の太刀風に、散らして見しよとは お二人さん、粹に似合はぬ心じゃぞへ。

鐵心 とは云へ見す／＼今此で、曉雨に耻辱を取らされた鐵心齋の此顔が、……

葛城 そのお顔のたて様も、わちきが胸に疊んである。

兩人 それじやと申して……

葛城 ハテわちきに任せて此顔を、立てさせておくなまし。

ト兩人の間に、床几を出して隔となし、其上に腰を掛くる。鐵心齋は此喧嘩に内心慮したれば

鐵心 ム、萎らしい葛城があつかひ、了見仕悪い所なれど、いかにも卿（卿）が顔を立て、此場の出入を一旦は、

卿（卿）にあづけて引くと仕やうが、曉雨（曉雨）はどうかだ？

曉雨も此場の喧嘩は、都合わるしと思ひて

曉雨 オ、汝（汝）が其氣に成つたら、此方にや固より異存は無エツ。

鐵心 とは云へ此場は是で済まして、此遺恨は忘れぬぞ。曉雨、必らず留主（留主）をつかふなよ。

曉雨 ム、いつでも出入を持つて來い、川の景色も三好町（三好町）、見掛は吝（吝）な家（家）でも、淺草（淺草）キッて隠れの無え曉雨が住居、手前が押して來たからとツて、對談人（對談人）を頼みやア仕れエよ。

鐵心 何だと。

ト立ち向ひて身構へすれば、曉雨は腰を掛けたる儘にて身構する。葛城は立つて雙方を止めて

葛城 エ、何をします、わちきの顔をつぶしますか？

鐵心 何さまさうだ。そんなら曉雨。

曉雨 逸見一角。どれ分れると（ト立上るを木の頭）仕やうかなア。

俠客春雨傘

ト立上つて伸のびをする。鐵心齋は無念をこらへ、葛城は雙方を隔つる。

(拍木幕)

第五幕

(一) 淺草並木暗討の場 享保十六年三月廿二日深更

正面は、葉は茸ぶき柿かき茸ぶき等、入交りたる家いへ綴つき(書割)此家々の間は松並木、其後ろは大川の流るゝを見、都みやこて淺草並木町、享保頃の街道にてありし體にて、夜中の景色なり(電氣仕掛の月出るまでは朧おぼろ月夜なり)

此に釣鐘庄兵衛の子分撞木しゆもくの權藏、龍頭りゆうづつの龍太、突座つぎざの丸五郎を初め伊助、露右衛門ろふもん、仁平、波太なみだ、保次やまぢ、邊四郎へんしやう、登久兵衛とくべゑ、智之助、理七、奴留八ぬるはち、の十人、銘々身輕に出立ち、手々てんてに尺八を持ちて立掛り居る。(幕明く)

權藏 こりや、人数は残らず揃つて居るかい?

龍太 さうよ。此方どち三人の外に、伊助から奴留八まで十人ほどだ。

丸五 都合人数は十三人、此通り揃つて居るよ。

權藏 よしく。そこで一番手は龍太が頭で、伊助、露右衛門に仁平、波太、保次の六人。二番手は丸五郎が頭で、邊四郎、登久兵衛、智之助、理七、奴留八の六人と手分けをして、右左から掛からうぜ。

龍太 其手配はすっかり承知だ。何ても權藏兄貴の知らせを合圖に、おいらツちの一番手が掛かつたら、

丸五 此方どちの二番手が、直に掛つて曉雨めを、ぶつちめると仕やうから、安心して、

兩人 お出でなせエな。

權藏 ム、喧嘩に慣なれた手合だから、油断ゆだんはけッしてあるめエが。相手は名に負ふ藏前の曉雨だ。どちを組くみじやアいけねエぜ。

龍太 ナンノ、此人数で右左から、おつ取り巻いて、打ッて掛かりやア、

丸五 曉雨がどんな手利ても、のがしッこは、

兩人 ありやア仕ねエよ。

俠客春雨傘

權藏 おれもさうとは思つて居るが、此人數で、へまを仕ちやア、稻妻の耻に成るぞ。皆も其氣で、命掛けの勝負だから、しツかり腰をはめてくれエ。

皆々 兄貴、承知でござえますよ。

權藏 それで曉雨が、愈々今夜は、宅に歸エるに違エは無エか？

伊平 そりやア大丈夫だ。和泉屋の女房に、

露右 駕籠を云ひ付けて居つたのも、

龍太 わつちら三人が、

三人 聞いて居やした。

權藏 そこで曉雨が乗ツて來る其駕籠は、

仁三 其駕籠は土手の武藏屋で、

保次 看板の印と云ふなア、

邊四 丸に銀杏の紋所、

登久 墨で武の字が、

四人 書いてあらア。

權藏 よし。其提灯を見掛けたら、た敲き消すのを合圖にして、

智之 かごかま駕籠鼻どもをぶち倒し、

理七 それから後が此方の喧嘩、

奴留 相手は曉雨たツた一人、

仁平 ぬかる事じやア、

皆々 ござえますんよ。

權藏 そんなら皆が手分けして、右と左に、

皆々 忍ぶと仕やうか。

ト手筈を申し合せて、龍太、仁平、露右衛門、波太、仁三郎、保次は上手に、丸五郎、邊四郎、登久、兵衛、智之助、理七、奴留八は下手に忍び、權藏は中程に隠る。

俠客春雨傘

此時向ふ（揚幕）より大口屋曉雨、四手駕籠に乗り、垂を揚げさせ（駕籠昇虎吉熊藏）駕籠には赤にて、丸の内に銀杏の紋所、其上に墨にて武の字を書いたる提灯を附けさせ出來り（花道よき所にて）止まりて

曉雨 オイ駕籠屋。一寸俟ちねエ。

ト駕籠を止めさせて（舞臺の方を打見やり）小聲にて
 曉雨 はまもの履物を出してくれい。

ト駕籠を卸させ駒下駄をはき、虎吉に叫ばば、虎吉は直に是を熊藏に移し、兩方の垂をおろし、空駕籠を曉雨が乗つたる體にて昇いて、舞臺に掛る。曉雨は駕籠の後より歩行て、舞臺下手よき所に立つて止まる。舞臺にては熊藏、駕籠を見て

熊藏 それ。

ト飛出して、尺八にて提灯を叩落せば、是を合圖に、雙方より龍太、丸五郎等十餘人のもの、駕籠をおつ取り巻いて

皆々 曉雨、覺悟しろい。

ト打て掛かる。駕籠昇の虎吉、熊藏は是に驚いて、上手の方へ逃げ込む。熊藏、龍太、丸五郎は駕籠の垂をあげて透し見て

熊藏 ヤア、こりやこれ空駕籠。さては曉雨は風をくらって、
 三人 逃げやがったなア。

ト皆々あきれて居る。曉雨は是を透し見て

曉雨 イ、ヤ逃げねエ。曉雨は此に立って居るが、汝たちは何奴だへ？

熊藏 此世の暇、引導代りに名乗って開かせる。稻妻組の其中で、響も高エ釣鐘庄兵衛。その一子分て撞木の熊藏。

龍太 龍頭の龍太、

丸五 突座の丸五郎。

熊藏 廓の遺恨意趣ばらし、

俠客春雨傘

龍太

汝てめえの歸りを待受けて、

丸五

丁度處も松並木、

權藏

汝の命を、

皆々 貫ふのだい。

曉雨

さうか。欲くば遣らうと云ひ度が、少し此方に用ある命、汝等に遣るだけは、まア止やめに仕やうよ。

權藏

遣らぬと云ツても、

皆々 こつちて取るわい。

ト權藏はじめ十三人のものは、前後左右より打て掛るを、曉雨一人にて引受け、持ツたる尺八にて、當るを幸と打倒せば、或は氣絶し、或は逃去りて遂に目前に相手なし。曉雨は着物の塵打拂ひ、悠々として上手に往き掛る。

此時松並木の蔭より、釣鐘庄兵衛、脇差を抜いて走り掛かり

庄兵衛 曉雨覺悟。

ト研きり掛かる。曉雨は持ツたる尺八にてあしらひ、烈しく戦ひて、遂に曉雨は庄兵衛が利腕りうでを打つ。

打たれてひるむ所を附入て、刀を持ツたる手をねぢ上げ、取ツて組伏くみふせて

曉雨 サア何奴だ、名前なまえをいへ。

庄兵衛 イ、ヤ云はねエ。斯なるからは、命は入らぬ、殺すなら立派に殺せ。

曉雨 名前も知れれエ、つまらぬ命、それを欲がる曉雨じゃ無いぞ。名前を云つて誤あやまつたら、汝てめえの命は助けて遣るワ。

庄兵衛 詰らぬ力身りきみで命を助け、後の難儀を仕やうより、早く殺して安心しろへ。

ト決心して云ふ。此時月出る（電氣仕掛）曉雨は庄兵衛の顔を見て

曉雨 ヤア汝てめえは穢多たの、イヤ稻妻組いなづまぐみの釣鐘だ。意趣遺恨も無なエ余おれを、なんで並木に待受けて、欺討あしうちには仕やうと仕たのだ？

ト問へども、庄兵衛は組伏せられながら、目を閉ぢて返答せず。曉雨は少し考へて

曉雨 成程、汝の望み通り、命を取るから、一所に來い。

俠客春雨傘

ト手を取て引起し、落ちたる脇差を取上げて渡せば、庄兵衛は意外の思にて、地上に（舞臺）座し、默然たりしが、脇差を取つて鞘に納めて

庄兵 往けと云ふなら、往きも仕やうが。どこのいづくへ往くのだい？

曉雨 ハテ来いといつたら、

ト庄兵衛の手を取つて（木ッ掛）

曉雨 来るがいゝわね。

ト引立つれば、庄兵衛は合點ゆかれども立上る。此道具廻る）

（二） 諏訪町立田屋門口の場 同日深更

上手寄には、柿葺の家根を附いたる小さき椽軒門、（出入）其左右は割竹の塀にて、塀の内の植木を見越したり。此塀に縋いて、少し下手に寄せて、柿葺の家、雨戸を建切つて一方にくどり戸を附けたり。其下手は板扉なり。都て浅草諏訪町の料理店、立田屋の表掛り、夜の體なり。

此は（道具止れば）番太郎、浅黄の股引、尻端折にて、腰に諏訪町自身番と書いたる提灯を差し、拍子木

を持ち、八の時を打て上手より出で、下手に入る（此所に夜鷹蕎麥等の仕出あるべし）

此時向ふより大口屋曉雨は先に立ち、釣鐘庄兵衛は後より縋き（着物は所々破れ綻びて尻端折、跣足）

花道よき所に止まりて

庄兵 オイ曉雨。言ひなり次第に歩行て居るが、汝の家に往くのぢや無エな？

曉雨 ついそこだから、マア一所に歩行けと云ふに（舞臺に來り、下手家臺の潜り戸を叩いて）

オイ明てくれい。 清助は居れエカ。清助々々。

清助（内にて）ハイ。清助は宿に居ますが、お呼びなされるのは、どなたで御座エますか？

曉雨 おれだい。曉雨だい。

清助 エ、且那で御座エますか（清助は寢巻姿にて潜り戸を明けて）オヤ且那、どうして今頃入ツしやいま

した、（内に向ひて）オイ。藏前の且那が入ツしやツたぜ、皆が早く起きねエか。

曉雨 コレサ清助、皆を起すにア及ばねエが、少し此釣鐘親方と話があるから、奥の座敷を貸してくれい。

清助 承知いたしました（と透して見て）オ、釣鐘親方で御座エましたか。暗エのお顔は知れず、御挨拶

も致しませんで、御免なせエまし…… オヤ蹴足で御座エますな、唯今水を差上げまする。

ト清助直に盥たらいを持出す。曉雨は差圖して清助に庄兵衛の足を洗はせ、駒下駄こまくだを履はかせて（但し此洗せん足の時に庄兵衛煙草入を落す）

曉雨 それから清助。面倒だらうが、早く酒を出して呉れい。

清助 直さま御酒は差上げますが、生憎お殺ころが何にも御座エませんので……

曉雨 殺なんぞは何でも宜よ。旨い不味まずいは言はねエから……

清助 ヘイ宜しう御座エます（潜り戸の内に這入り、上手の門を明けて）
どうぞお這入り下せエまし。

曉雨 釣鐘、さ、一所に這入なせエ。

ト先に立って門の内に入れ、庄兵衛も默然もくねんとして續いて入る（此道具半廻に成る）

（三） 同く釣鐘切腹の場 同夜

此は立田屋の奥座敷、中二階造りの離れ座敷、正面上手の一間は塗壁にて、織部板おりべいたを打ち、真中に花

籠かごを掛け、早咲はやさきの牡丹ぼたんを挿たり。其次の二間は、下手寄りに一尺五寸ばかりの小壁を見て、つのがらにて一間二枚の太鼓張の襖ふすま（出入）上手横は三尺の小壁に下地窓したぢまど。下手横は一枚の障子を入れ、庭（平舞臺）には沓拔、飛石、植木等ありて前場に上手に見たる梅軒門ばいけんもんは、今は下手に成て其内を見る。石燈籠つくばひ等よろしくあり。

此に亭主立田屋清助は先に立ち案内して、曉雨、庄兵衛は入來りて着坐する。

清助が燭臺しょくだいを置き、奥に入るを呼止めて

曉雨 今いつた通り、釣鐘親方と内證の話があるから、女中なんぞをよこさずに、御苦勞だが、お前用まへもちを達たてくん。

清助 宜しう御座います（奥に入り直に煙草盆を持出して）マア御一服なせエまし。唯今お火鉢を差上げますから、

曉雨 ナニ暖あたたかいから火鉢は入らねエよ。其代りに酒を早く出してくれい。

清助 直さま御酒を差げ上ます（庄兵衛の着服の破れ綻びたるを見て）親方、どうなすつたので、御座エま

俠客春雨傘

すね？

ト尋れるを、曉雨は引取ッて

曉雨 ナーニ實は今少し間違があつて、親方の着ものが此通りに成つて、見ツともねエが、清助、おめへの餘所いきがあるだらうから、早く持て来て上げてくれつし。

清助 承知いたしました。どうで、碌な着ものは御座エませんが、ほんのお間に合せて御座エますよ。

ト奥に入る。釣鐘庄兵衛は、腕組して始終無言なり。曉雨は煙草盆を引きよせ、煙草を吸ひて

曉雨 庄兵衛どん、一服やらねエか（と煙草盆を前に出し庄兵衛が煙草入を捜しても腰に無きを見て煙草入を出し）

ヤア先きの騒で煙草入を落しなすつたね。サア是で一服やんなせエ。

庄兵 有がたら御座エます。

ト挨拶したまふにて、煙草入に手を觸れず。清助は奥より小袖羽織を持出して

清助 親方、垢あかツ臭くさエか知れませんが、お着替まげなせエまし。

庄兵 清助どん、信切は忝かたじけねエが、是こゝて可いよ。

曉雨 折角清助が持つて來たのだ。それじゃア見ツともねエから、マア着替ると仕なせエよ。

庄兵 それじゃ、お借り申すと仕やうかね。

ト着替へる。清助は庄兵衛が脱いだる着ものを持つて奥に入らうとする。

曉雨 オイ清助。ついでにお前の煙草入を親方へ上げてくん。

清助 承知しました。

ト奥に入り、直に煙草入、並に廣蓋ひろがたに酒肴等しやくをのせて持出して、煙草入を庄兵衛に渡し、廣蓋を前に出して

唯今いまなにかお肴をこしらへますから、先づ是で一杯お願ねがエ申上げます。

曉雨 御苦勞ごくろう々々。それで用があつたら、手を叩くから此こゝへ附ついて居なくッて可いせ。

清助 よろしう御座エます。

ト奥に入る。曉雨は盃を取上げて

俠客春雨傘

曉雨 釣鐘、わしが毒味どくみをするぜ（手酌てしやくにて飲みて）少し爛かたがゆるい様だが、仕方が無エ。サア一ツ遣んなせエ（酌しやくを仕て）一ツ取替とりかへに仕やうじや無エか。

ト自分の盃さかずきを庄兵衛にさし、庄兵衛の前まへにある盃さかずきを取らうとする。庄兵衛は其手を押へて

庄兵衛 オット待まちなせエ。此釣鐘庄兵衛が身分身分の素性を、お前は知ッて居なさるだらうが……

曉雨 オ、知ッてるともく、宇都宮うつみやの乗八のりやちと云ッては、野州のしゅうから奥州おくしゅう掛けて、人も知ッた穢多頭たたら、疾はやからよツく知ッて居るよ。

庄兵衛 ム、それを知ッて此盃、受けて飲まうとさつしやるは？

曉雨 ハテ野暮のよこを云ふ男おとこだなア。穢多たたらだらうが、大名だいみょうだらうが、同じ様に生なまを受け、此世界このよに生れた人間、何の變りがあるものか、それに差別さべつを立てたのは、此世の中の得手勝手とくしやう。この曉雨あきりとても其通り、町人に生れて来た悲しさは、大名だいみょうどころか、小名せうなも小名せうな、十五ご俵ばうの安御家人やすごけいじん、其奴等そのやつらにさへ頭あたまの上うへがらぬ札差家業さしざいごふ、いくぢの無なえのが嫌きらになり、家督けいとくを譲ゆづつて今の境界けいがい。大小おほいした侍さむらいに頭あたまを下げぬ其代り、世界よこの人は皆兄弟みなにい、士農工商しのうこう穢多長吏たたらちやうし、世間の奴等このよのやつらが勝手に附つけた身分身分の符牒ふてう、それに食着たがひする様な曉

雨あめじやア無エよ。穢多たたらと云ッちやア煩うるせエから、何所どこまでも稻妻組いなづまぐみの釣鐘親方つりかねおやぢ、サア打解うちとけて一杯飲いっぱいみなせエな。

ト庄兵衛が飲のむ盃さかずきを取り、手酌てしやくにて飲みて庄兵衛に差す。庄兵衛は我わがを折ひて

庄兵衛 わつちらも是こゝろまで大勢たいせいに附合つつたが、お前まへさん見た様に、肝玉かんたまが大きくツて、胸むねの寛ひらエお方にやア、隣となりの緒いとキツて三十四年目さんじゅうしよねんめ、今日けふ初めて逢あえました。旦那だんな、眞平御免まへいらいなせエまし、今迄いまのわつちが罪科つみか、この通り兩手りやうてを突ついて誤あやりました（と平伏へいふくする）

曉雨 ナンノ誤あやる事も何にも無エワ。併ひし釣鐘、お前まへほどの好漢こうかんが、何なにで逸見いけん鐵心齋てつしんさいに一味いまいして、わしに喧けん嘩かを仕掛しけなすつたい？

庄兵衛 サア、それも是も皆みなわつちが足り無エから。旦那だんな、此身このみの上うへの懺悔ざんげばなし、一通り聞きておくんなせエ。御存知ごぞんじの通り、わつちやア原もとが宇都宮うつみやの穢多頭たたら、乗八のりやちでござエますが、金かねはあつても人並ひとならに世間よこへ出でられぬ身の悲かなしさ。悔くしい餘あまりに跡あとをくらし、名前なまを變かへて江戸えどへ出て、町奴ちやうやつの稻妻組いなづまぐみ、上見うへみぬ鷲じゆの羽はをのして、嗚鳴なるなるが得手とくしやうの釣鐘庄兵衛つりかね。ふと松葉屋まつばやしの丁山ちやうさんを買馴染かひなじだが遺恨いこんの起おこり、お前まへさんの男おとこだ

て、五丁町で評判の高いがわつちの心の嫉み、丁山には煽られて、修羅を燃して居た所。鐵心齋に頼まれて、お前さんをば暗打に、疊んでやる氣に成つたので御座エまする。

曉雨 そうだらうと察して居たが、シテ其鐵心齋が、わしに遺恨を含んだ理分を、お前は何と聞きなすつたい？
 庄兵 サア仲の町での今夜の喧嘩、そりやア後から沸た話し。其前の頼みには、此鐵心齋は敵持、親の敵と狙ふは女、恐い事は少しも無えが、殊に寄たら肩を持ち、助太刀するのはあの曉雨、喧嘩に事よせ殺して仕舞へば、懸念が無くて此身の安心。釣鐘、どうか手を貸してくれめエかと、折入ての頼みゆゑ、男の顔づく、賑といつた理でござエます。

曉雨 扱こそ敵は鐵心齋。シテ其女の名前、討たれた人の姓名を、お前は知つて居なさるか？

庄兵 討たれた人の名は知らぬが、敵と狙ふ女の名前は……(云ひ兼ねれば)

曉雨 その女の名前と云ふのは？

庄兵 事の起は兎も角も、男と見込て其身の大事を、明された上からは、名前を云のは、且那、堪忍しておんなせエまし。

曉雨 そりやア尤だ。それじやアおれの方から明かさうか、その女と云ふのは、松葉屋の薄雲であらうかな？

庄兵 どうしてそれをお前さんが？

曉雨 大方それと察して居たよ。それで討たれた浪人は、阿部川町に住居した、今四玄之進と云はふがな？

庄兵 阿部川町の浪宅で殺したとは聞きましたか、その御浪人が、アノ今四玄之進、今四様で御座エましたか？
 エ、エ、エ(と大に驚く)

曉雨 何にも、阿部川町の浪宅にて、女房もろ共、人知れず殺された浪人は、薄雲の兩親、今四玄之進御夫婦だ。

庄兵 スリや鐵心齋に殺されたは、今四さままでござエましたか。知らぬ事とて、無念の御最期をお迷なせエましたなア。

ト落涙して無念の思をなす。曉雨は不審して

曉雨 その今四玄之進を、お前は知つて居なさるのか？

庄兵 知つてる所か、命の親。忘れも仕ねエ十年前、小山の宿の大喧嘩、おつ取巻かれて、打殺さるゝばか

りの所、通り掛つたお侍エ、わつちを救つて其場をきりぬけ、命を助けて下さつた、其お方のお名前は、水野隼人正様の御家來、今西玄之進様。水野様御没落の後は、往方知れず、お尋ね申すあては無く、御恩返し仕てエ〜と、常に思つて居ましたが、鐵心齋に殺されて、敢れエ御最期なされましたか。

ト悲嘆に沈む。曉雨ははたと膝を打つて

曉雨 ハテ縁と云ふものは不思議だなア。シテ見ればお前も言は、恩人の敵。心を變へて薄雲に力を添へて、敵を打たせる所存は無エか？

庄兵 イーヤ無エ、御座エません。恩は恩、頼みは頼み。薄雲の助太刀は、お前さんが立派にして、敵を討せておやんなせエ。

曉雨 そりやお前に頼まれエが、困ると云ふのは、鐵心齋、今西玄之進夫婦の衆を殺した證據が上らぬゆゑ、見す〜それと知れながら、手出しのならぬが残念だ。

庄兵 その證據にわつちを出さうと思つても、わつちも男だ、一旦頼まれた上からは、石を抱ても言ひは仕れエ。

曉雨 それじゃア汝。今西玄之進に受けたる大恩、口先ばかりで言つては居れど、心に忘れて居やがるなア。トきつと成つて云へば、庄兵衛は決心の體にて

庄兵 イ、ヤ些とも忘れて居やア仕ませぬ。其證據を上げるには、鐵心齋が門弟で、しかも其晩俱々に、手を卸したは、入谷丹五郎、根岸松兵衛、田畑彌九郎、其外あまたの町奴。その中にて田畑彌九郎、見掛けに似合はぬ臆病やつ。彼奴を引きよせ一責すりやア、證據の上がるは案の内。

曉雨 ム、シテ其彌九郎を引きよせる手段は、どうして？

庄兵 衛は傍に置きたる脇差の筈を取出して

庄兵 この筈は仲間の割符。これを見せて言附けりやア、わつちが子分の撞木の権藏、龍頭の龍太、突座の丸五郎、きつと手先を働いて、口を明せて上げませう。

曉雨 ム、忝ない（割符の筈を収めて）それほど心を入れながら、自分で力を入れぬとは？

庄兵 ハテ悪人ながら、鐵心齋に、一旦肩もつ上からは（と脇差を抜き腹に突立て〜）此命をくれて遣ります。

曉雨 (介抱して) 早まつた其切腹。何て命を捨てるのだ?

庄兵 鐵心齋が今西様を殺した證據、その手掛を教へた上は、男を捨てた釣鐘庄兵衛、なんて生きて居られませうか。

ト此時奥より亭主清助走り出て、

清助 旦那。釣鐘親方の子分の衆が(切腹の體を見て、悔りして)ヤア親方、こりや何となせエましたなア。

同時に、撞木の權藏、龍頭の龍太、突座の丸五郎は、清助の後より打揃ひて出て來ッて

權藏 親方の往き先、所々方々と搜して見たに、

龍太 此家の表に落してあつた煙草入、

丸五 的きりこゝと勘付て、入て見れば此場の仕宜、

權藏 こりやどうした理て、

三人 御座エますなア?

ト何れも驚き寄添ひて介抱するを、押し止めて

庄兵 これには段々仔細のある事。コリヤ今からしては曉雨さまが、余のお頭。

三人 そんなら喧嘩の中解けて、

庄兵 ム、みんなの事までお頼み申した。旦那何分お頼み申しまする。

ト手を合せて拜み、苦痛に迫る。

曉雨 承知した。釣鐘親方、跡は少しも案ぜずに、心置なく往生なせエ。

庄兵 ありがたい。

ト脇差を引廻す。曉雨涙を流して

曉雨 あつたら男を(と涙を拭ふを木の頭にて)死なしたなア。

庄兵 衛落入る。皆々悲嘆に暮る折から、曉の雞の聲聞ゆる。

(拍木幕)

第六幕 大詰

(一) 薄雲忍出の場

享保十六年四月十七日午後

此は新吉原松葉屋の店先の上り口にて、正面には(二間高足二重)四枚建の襖を設け(出入)前には三尺の式蓋を設け、玄關模様の上り口なり。此上り口の上手は(二重)一段下りて若衆の溜り(常足)一間二枚の杉戸を(出入)建てたり。上り口の下手には朱塗の内格子(籠)にて其止りは宜しく見切へし。

此に若衆溜には、松葉屋の若いもの源七藤七は腰を掛け、平次は程よき所に立ち掛り、話の體なり。

(幕明く)

平治 エ、源どん。此節の忙がしきはどうか。御同前に目が廻る様だせ。

源七 さうよ。忙がしくツて繁昌するのは結構だが、かう夜盡なしにお客が立込では、息を吐く間もありや

ア仕ねエよ。

藤吉 併し此町内にやア、今月に成つてから、ザツと閑で、お茶ばかりの家もあるぜ、其中でこちらばかりが、こんなに繁昌するのは有がてエ譯だのウ。

平治 そりやアお前の言ふ通り。二階が忙がしけりやア、こちららの實入も、おのづと殖るに依て、愚痴を云ふ事アちツとも無いのさ。

源七 是と云ふのも、此方にはおいらん方が玉揃ひで、まづ第一に葛城さん、その次が丁山さんに鳩鳥さんそれから突出しの薄雲さんと来て居るから、お客のこむのも尤されエ。

藤吉 その葛城さんで思ひ出したが。薄雲さんの突出しの初日から、山口巴で葛城さんが相方で、夫から折々お出でなさる、香具山さんと云ふお客、ありやア何者だらう?

平治 そうさね。いつもお茶屋の二階ツ切りで、此方へは、迷しか見えた事もなく、それに薄雲さんがいつも一座。妙なお客もあるものだねエ。

源七 お前たちは、あのお客の素性を知られエのか。香具山さんと云ふのは假の名、まことは小川町で四千

石のお旗本、天野民部様と云ふお歴々だぜ。

藤吉 そうか、道理で人品がすてきによくツて、一體が寛活だと思ツて居た。シテ其お歴々の天野様が、何てこの吉原へ繁々お出になるのであらう。

平治 お茶屋ツきりてお歸りなさる所を見りやア、葛城さんの色香に迷ひ、通つて來ななさる理でもあるめエ
し。

源七 サア深い事はおれも知らぬが、此間も山嘴巴の店先で、お侍の奴さん黒内とか云ふ人の、問はずがたりを聞いて見りやア、何でも薄雲さんのおとつさんが、浪人もので、天野様とは懇意の中であつたと云ふ事。

藤吉 そんなら、薄雲さんを相方にお仕なさりさうなものだ。其上にあの香具山さんは、曉雨さまと一座にお成りなさる様だね。

平治 シテ見りやア、揃ひに揃つて、遊び好きの女嫌ひ、

源七 變つたお客も、

三人 あるものさねエ。

ト香具山と云へるは天野民部が事にて、葛城を呼出して遊べる事を不審して居る。

此時正面より葛城の禿畝火、出て來りて

畝火 平どん。おいらんの客衆が歸らツしやるから、お履物を……

平次は承知して下足の紐をときて、草履を式臺の前に直す。

正面より番頭新造豊花、先に立ち、次に薄雲（目隠し頭巾、羽織、袴の男姿）そのあとより葛城（部屋着の胴拔）にて出て來る。是を見て

源七 ヘイお早う御座います、お靜かに、

三人 入らツしやいまし

葛城（薄雲の肩に手を掛けて）それじやア明日の晩は、きツと來なましょ。嘘を吐と聞イせんよ。

豊花 おいらんが、あんなに氣をもんで居さつしやるから、

葛城 きつとさますよ。

俠客春雨傘

ト云へば、薄雲は無言にて首諾き、葛城豊花に左右を圍はれて、式臺に下り、草履をはかうとする、此前より平次、源七、藤吉の三人は、土間（平舞臺）に立ちて、薄雲の様子を、變なりと眼を付けて居たりけるが、源七それと目にて知らずれば、平次は直したる草履を取る。葛城はツと思ひて

葛城 平どん、お履物をなぜ取るのだねエ?

源七 イヤ淨ツかりと此草履、はかせる事は、

三人 成りません。

葛城 何といふのだ?

藤吉 昨夜あがつたお客さま、身なり姿は其儘なれど、

平次 からだの恰好もの越は、似ても似つかぬ、くわせもの、

源七 その替玉を食ふやうな、わつち等じやア、

三人 御座エませんぜ。

葛城 フウすりや、客衆が違ふと云ふてじやの、

源七 いかにもさうで

三人 ござエますよ。

葛城 ホ、ホ、山口巴の看板で、名染のお客の香具山さん、わちきが座敷に居たお方、違はう理は無

等じや。サア早うお草履を、お上げなまし。

藤吉 イ、ヤ、いくらおいらんが、客人だとおつしやツても、三人揃つて此通り、目星を附けた怪しいかた

ち、

平吉 云はずと知れた女の姿、頭巾で顔を隠しても、目許は慥に覺えがある。

源七 その頭巾を引ッばいて、お客の正體あらはさにやア、役目の表が、

三人 立ちましねエ。

ト三人にて薄雲を取巻き、頭巾を取らうとする。葛城は押隔て、薄雲を後に圍ひて、

て

葛城 何を仕なんす、皆の衆。人目を包む袖頭巾、顔を隠すが歴々の、世を憚かりの里通ひ、夫を見やうと

俠客春雨傘

無作法な、お前がたの手込には、わちきが決してさせぬぞへ。見るから各な女郎でも、松葉屋葛城、かうなるからはわちきが相手、指でもお客にさしたなら、此の暖簾に疵が附かう。ハテ目はしの利かぬ若衆では御座んすぞいなア。

ト云へば、三人は少し尻ごみ仕たるが、猶も進みて

源七 おいらんのお腹立は、御尤てござえますが、此儘に其お客、

藤吉 お出し申す事ア、

三人 出来ません。

葛城 そうなら、わちきが命に掛けても、出しますぞへ。

ト薄雲の手を引き、土間に（平舞臺）下りやうとするを、源七等三人は遠くより取巻く。

此前より松葉屋の亭主與兵衛は、若衆溜の（上手二重）杉戸を細目に明けて見て居たりけるが、此時

大小、編笠、および袴脇差を風呂敷に包みたるを挟みて、走り出で、式臺に來り、會釋して

與兵衛 これはく香具山様、モウお歸りて御座いますか。お預りのお腰のもの。お笠も是に御座りまする（差

出せば、葛城豊花は請取て薄雲に支度させる）コレ早くお履物を差上ねエか。

源七 旦那さま。あの客人は慥に似せもの、

藤吉 しかも女の喰せもの、

平次 あの目許の様子では、

三人 薄雲さんに……

與兵衛（と云ふを冠せて）何を馬鹿な。薄雲は二階にちやんと居るじゃア無エか。

三人 デモ……

與兵衛 エ、早くお草履を出さねエか。

トきつく云へども、三人が猶ためらひて居るを見て、與兵衛は心せき、其所にある駒下駄をはき、

土間（平舞臺）に下りて、平次が持たる草履を引たくりて、式臺の前に直して

サアお召しなさいまし。

薄雲草履をはく。

俠客春雨傘

葛城 旦那さんの御信切、きつと恩に着ますぞへ。

與兵 なんの是しきの事。…イヤ逆もの事に、此與兵衛が大門外まで、お供を致して参りませう。

葛城 スリヤ旦那さんには委しい様子を…

與兵 ハテ廓の魂膽出入の掛引、わしに任せて置きなせエ、萬事は渾て此胸に…

ト心の中を悟らすれば

葛城 旦那さん、嬉しうござんす。

ト拜む。與兵衛は薄雲をつれて出やうとする。三人猶も障へんとするを、與兵衛は睨め附けて

與兵 エ、何をするんだ（と薄雲の手を取るを木ッ掛にて）

サアお出でなせエまし。

ト與兵衛は薄雲を連出し、葛城は豊花と俱に見送る（此道具廻る）

(二) 今戸八幡敵討の場 同日の夕方

八幡の社を正面斜に見て（中遠見の書割）其周圍は杉の立木なり。上手には柿葺の庇を附けたる別當

所（三間の常足）板椽附、前つらは障子を立て切る。下手には藁庇蘆簀張の茶店、床几を前に並べ、別當所

より奥に掛けて藤棚ありて花盛り、都て今戸八幡境内の後の光景なり。

此に天野民部の家來、片山又四郎齋藤孫市（大小、袴）床几に腰を掛け、下手には釣鐘の子分龍頭の

龍太（町奴）立掛かり咄の體なり（道具止る）

龍太 シテ田畑彌九郎の口は明きまして御座エますか？

又四 サア貴様の骨折て、かの彌九郎を引捕へ、町奉行所の手に渡し、内々詮議に及びし所、兎や角、初めは陳じたなれど、

孫市 手強き貴に堪へ兼ね、鐵心齋が手に附いて、今四玄之進夫婦のもの、殺したりとの彼が白狀。

又四 それで我等が御主人の天野民部様、御奉行衆へ内々の御相談、敵を討たせて苦しう無いとの御内沙汰。

孫市 後の祟は少しも無いぞ。

龍太 そりやアよい御都合で御座エました。それに附けても目指すは逸見鐵心齋、今日は三社の御祭禮、見物をした其後で、此境内に待合せ、子分をつれて吉原へくり込む手筈は兼ねての約束、撞木の權藏が慥にそ

俠客春雨傘

俠客春雨傘

れと聞出して、曉雨さまへお知らせ申し、又今しがた此龍太、様子を見届け参りましたが、鐵心齋は馬道の甲子屋まのしやの二階にて酒もりいたして居りました。

又四 段々の骨折、御苦勞く。今にもあれ鐵心齋、門弟子分を召連れて、此境内に参つたら、……

ト龍太に呷さけば

龍太 承知しました、そんなら彼奴おいつが子分の奴らは……

又四 コレ。

ト制して再び呷さきて申合せ、龍太は諾うなづいて下手に入る。引違へて向より天野民部、同靱負は、家來三浦次郎、三木喜右衛門、奴黒内引連れて出来れば、又四郎、孫市は出迎へ、民部、靱負は直に舞臺に來り、床几に腰を掛ける。孫市は自分にて茶店に入り、茶をみて民部、靱負に差出せば

民部 それなる茶店の女は何がいたした？

孫市 何かに附けて邪障であらうと心付き、又四郎と申合せ、今日一日借切に致し置き、女は宅へ引取らせて御座りました。

民部 ム、よく心附いて計らつた。シテ都みやこての手筈は届いて居るか？

又四 ハツ、萬事は曉雨が差圖にて、手筈は都みやこて相届き、逸見鐵心齋、三社の祭の歸り掛け、此境内に立寄りますると、慥たしかに内通、それに相違は、

兩人 御座りませぬ。

靱負 鐵心齋が手下のもの等、多人数なりと存するが、それを防ぎの用意はどうじやな？

孫市 其儀は曉雨、一切心得居りますれば、都てお任せ下さりませと、達ての詞に御座ります。

民部 ム、音ひびに響ひびいた俠客やくかく、藏前の曉雨、必らずぬかりは有るまい程に、同人へ任せ置け。併し曉雨はまだ此所へ参り居らぬか？

曉雨 アイヤ疾から参つてお待ち申して居ります。

ト曉雨（羽織、袴、一刀）松葉屋の亭主與兵衛と（羽織、袴、一刀）引連れて下手の蘆葦張あしわばりの中より出來り、民部靱負に會釋して

コリヤ天野の殿様、若殿様、わざくの御出張、恐入ッて御座ります。お蔭かげを以てお鶴の敵討、今日

俠客春雨傘

俠客春雨傘

首尾よく致す事に相成まして、有がたら存じまする。

民部 イヤ其禮は此方より申す事、今西玄之進が非業の最期、原はと申せば倅よりして起つた災難。

靱負 それに付いてお手前には一方ならぬ世話か掛け、段々との心遣ひ、

兩人 忝なう御座るぞ。

曉雨 そのお詞では恐入まする。ナンノお頼が御座りませいでも、お鶴は顔を見知つた中、泥て年來お出入

の天野様、お詞が掛つた上は、是位の骨折は當然て御座りまする。

民部 今に始めぬお手前が驕心。民部大慶に存じ申すぞ。シテお鶴は参つて居るかな？

曉雨 是に居りまする與兵衛が情、葛城が計にて、先刻廓を立出て、既に参つて居りまする。

民部 何れへ参つて居るか？

與兵衛 ハッあれなる人家へ立忍ばせ、休息いたさせ置きまして御座りまする。

民部 それは重畳。それに付けても敵と云ふは逸見鐵心齋、鍛錬なくとも一流の劍客、お鶴ごときかよわき女の細腕に、討たるゝ様な男では、よもあるまい、其助太刀はいかゞ致すな？

俠客春雨傘

曉雨 その儀は別に仔細も御座りませぬ。喧嘩に事寄せ、鐵心齋と立合つて、十分になした其上で、お鶴に留を刺させるつもり。

靱負 成ほど左様な手筈と推量いたした。夫に付けては其喧嘩、ナント曉雨、手前に譲つて下さるまいか？

曉雨 ナント仰しやりまする？

靱負 向島にて出會つた鐵心齋。今西玄之進の助太刀にて、其場の耻辱はのがれしが、心に残るは彼奴が過言

其上にまたお鶴の助太刀、お手前に任せては、後日に靱負の顔が立たぬ。

民部 ム、よく申した、それでこそ民部が倅。こりや曉雨、どうか左様いたしてくれぬか？

曉雨 御尤で御座りまする。鐵心齋に私が打たれましたる遺恨の仕返し、此程すでに済ましたれば、今度はあ

なたの御存分になさりませい。

靱負 早速の承知忝ない。併し配下の奴等が、一所に掛つて参つた時には？

曉雨 そりや御氣遣ひは御座りませぬ、門弟の侍は、又四郎殿はじめとして、御家來衆へお任せ申し、……

民部 その外の町奴は？

俠客春雨傘

曉雨 ナンノ、私が一腕ひとひらで動かす事では御座りません。若殿様、御懸念なしに鐵心齋を、思ふ存分さいなんで、向島の鬱憤うづげんを十分お解はらしなさいまし。

民部 然らば曉雨、あれなる別當所にて、待合すと致さうか。時に曉雨、異ひな事を云ふ様だが、お鶴は慥たしかに女の操まがはは破るまいな？

曉雨 其儀は是に居まする與兵衛が、慥に引受けて、大丈夫で御座りまする。

與兵 既に先頃、曉雨様より、お鶴が身受の御相談も御座りましたが、葛城が丁山との張合から、是非お鶴をば一旦は、突出したいと達ての望み、それに又敵の手掛り探る爲にも成るであらうと、曉雨さまの思ひ付き、それで傾城には出しましたが、男に肌はだを觸れませぬは、此與兵衛がお受合申上げまする。

民部 夫は大慶。然る上は孝女のお鶴、首尾よく敵を討つたる後では、靱負が妻に、...

曉雨 その橋渡はしわたは失禮ながら此曉雨が...

民部 お頼み申すぞ。

與兵 有がたう存じまする。

民部 サア曉雨お手前も我等と一所に...

曉雨 有がたうは御座りますが、お鶴の身支度、其外用事も御座りますれば、先づお入りなさりませい。

民部 靱負は上手別當所の様より障子の中に入り、又四郎其外は上手の奥に入る。曉雨は残りて靱負様のお腕前、慥であらうと思つて居るが、何をいふにもお年若、相手は逸見鐵心齋。

與兵 且那さま、アリヤセツの鐘かねで御座いますぞ。床几に腰を掛け、手を又て案こまじて居る。此時八幡の鐘かねの音聞ゆれば、與兵衛は指を折つて敷へて

曉雨 まう相手の来る時刻だ。ム、

ト諾うなづいて下手葺せり資しの中に入る。向ふより逸見鐵心齋、入谷丹五郎、根岸松兵衛を引きつれ出來り(花道に止りて)

鐵心 ヤツ、祭禮と云ふものは、相も替からず、そらぐしいものなのウ。

丹五 今日けふの三社の御祭禮、白柄しろがら大小神祇じんまよしや、其外諸組の連中が、我劣らじと出立いだけつたが、

松兵 中にも目立つた鶴鶴組、一きわ勝れて見えましたは、是ぞ全く先生の御威光、

俠客春雨傘

兩人 恐入ッて御座りまする。

鐵心 同勢つれて混雜こんざつの中を悠々ゆうくと練り出したは、よい心持であつたのウ。何はともあれ、子分のものが、

此へ參つて揃ふまで、

丹五 あれなる茶店で暫時ざんじの間、

松兵 御休息、

兩人 遊ばされませう。

ト(舞臺に來りて)鐵心齋床几に腰を掛ける。丹五郎は下手の茶店に向ひて横柄に

丹五 オイお客様だぞ、お茶を持ッて參らぬか。オイ、誰も居ねエのか。ヤアからあきた。氣の利かれエ

茶店だぞ。

トつぶやきつゝ煙草盆を鐵心齋の前へ出す。

鐵心 構かまふなく。茶も只今は欲う無い。時に兩人、門弟の田畑彌九郎、先月廿七日に外出そとでした其切それぎりで、

今に歸宅きたくいたさぬが、如何いかいたした事であらうな？

丹五 大かた千住せんじゆあたりにしけ込んで、現うらをぬかして遊んで居るので御座いませうが？

鐵心 イ、ヤ女メにうかれて遊ぶと云ッても、もはや夫より廿日の日數、子分の者ものに搜さがさせても、更さらに行衛ゆくの知

れざるは、其筋すぢの手に懸り、もしや捕とらはれたではあるまいか？

松兵 日頃ひごとからして鼻はなッ張はりは強い様だが、心底しんぞこ弱い田畑彌九郎、阿部川町あべがわまちの一件を、白狀しやくじやうでも仕つかた日には、

丹五 先生せんせいはじめ我々共が身の大事。

鐵心 ハ、アそんな事はありも仕つかまいよ。

ト平然へいぜんたる顔付かほづかをして居る。

此時上手うへより天野靱負あまのきぢい、奴黒内やつくろうちをつれて出て來り、床几とこざしの前に突立つきたてつて

靱負 イカニ逸見いかにいつけん鐵心齋、先まごろ向島むかしまにて出逢いであふたる天野靱負、面體めんたい忘れは致いたすまいなア？

鐵心 ム、何いかにも見覺みかくある大若衆おほわかしやう、性せうこりも無く此所このところへ酒の相手に參つたのか？

靱負 いかにも相手に參つたぞ。其時の喧嘩けんかの遺恨いこん、サア立上たてあつて勝負しょうぶいたせ。

鐵心 ハテしほらし心だて、しかし前髪立まへかみだての子供上こどもあがりり、この鐵心齋の相手あつちで無い、痛い目見めぬ其中うちに、早

俠客春雨傘

く此場を引たがよいワ。

靱負 イ、ヤ引かぬ、靱負におそれて尻込いたすか？

鐵心 それ打てしめい。

松丹五 心得ました。

靱負に掛るを、黒内押隔て、

黒内 助太刀やアなんねエぞ、懸ッて来るなら、おれが相手だ、向島にて、よくもおれを川中へぶち込んだなア。其意越ばらし、かうして呉れべい。

ト兩人を相手に烈しくたち合て、終に黒内は兩人を追ふて下手に入る。

舞臺にては鐵心齋靱負の兩人立向ひ、足場をはかりて、互に刀の柄に手を掛けて睨み合ふ。

同時に上手よりは天野民部は片山又四郎、齋藤孫市、三浦大次郎、三木喜右衛門を引つれて出來り、下手よりは曉雨、薄雲（白装束）をつれ與兵衛も附添ひて出來り

曉雨 待ツたく、其鐵心齋は是なる女の親の敵。

鐵心 ナント。

薄雲 ヤア逸見鐵心齋、いつぞや阿部川町の浪宅にて、そなたの刃に相果てた今西玄之進が娘のつるじや。兩親の仇、立上ッて勝負しや。

鐵心 フウ誰かと思へば、松葉屋の薄雲だなア。敵呼はり尾籠千万。そんな覺は曾て無いぞ。

民部 卑怯なり、鐵心齋。向島にてそれなる悴の靱負が難儀、參り合せて救ふたる今西がはたらき、其不覺に遺恨を含み、門弟子分を引つれて、今西夫婦を闇討に致せし悪事、田畑彌九郎、奉行所にて白状なし、近れぬ證據が上つてあるぞ。

鐵心 證據があがりやア百年目。薄雲、覺悟しろ。

ト抜き放つた、押しめて

靱負 ヤア待て鐵心齋。こちらの勝負を附けたる上で、其女の相手になれ。

鐵心 エ、面倒な小姓めが。

ト是より鐵心齋、靱負の太刀打に成ッて、靱負は受太刀になる。又四郎等が出やうとするを、民部

俠客春雨傘

は止めて出さず。既に危く成るを見て、曉雨は薄雲を引つれて、尺八を持って進み

曉雨 お鶴が助太刀。鐵心齋受けて見ろエ。

ト靱負に代りて鐵心齋と戦ひ、利腕きりでんをしたゝかに打ち、ひるむ所を打据うちすれば、鐵心齋は刀を落して
動どうとすはる。

此時前後より（東西の花道より）鳶頭金兵衛先に立ち、曉雨の子分等多人数が揃そろの浴衣、祭禮の體
にて、出て来りて

金兵 旦那、鶴鶴組の町奴、一人も残さずぶツ締ちぢまして、

皆々 御座エました。

曉雨 ム、御苦勞ごくろう。此方も目出度敵を討つぞ。

靱負 サア鐵心齋、立合はぬか。

ト切ツて掛る。鐵心齋再び立上れども頗る弱つて太刀筋亂るゝを、靱負つひん附込つけこんで大袈裟おきざに切下きりくだれば、鐵
心齋どうと仆たふるゝ。曉雨刀を薄雲に持たせて

薄雲 親のかたき覺え居つたか。

ト留とどめを刺す。

民部 目出度い。

曉雨 お目出度御座りまする。

皆々悦び祝ひて

(拍子藪)

俠客春雨傘 畢

豊島嵐序

我國現時の新劇に完全の作なきは、其因數多ありと雖も、急作に成ると實に其重なる弊源なり。凡そ東京諸劇場の座主は、著作に識見を具するの人物に乏し、概ね目前の流行を見て劇場の開閉を爲し、先づ俳優を招聘するの約成りて後に、狂言作者を招き、扱今度當座には俳優某々出勤の事に定まりたり、狂言は如何と、初めて其相談を開き、急に甲乙の選擇に忙はし。從來の舊劇にては面白からず、何か奇趣の新劇は無き乎と問はれても、此作者先生固より其胸中に許多の脚色を貯へ、以て不時の需を待つと云ふ程に材料に富めるにも非ざれば、纔に其心に浮びたる未定の腹稿を持ち出す歟、然らざれば落語家某の何情話は如何、講釋師某の何盜賊談は如何と、耳食せる卑近の題目を擧げて其材料に供するもの多きに居

るが如し。座主これを採可しても、作者が俳優(座頭)に就て之を議するに及びて、俳優その頭を横に振つて否む事も希ならず。又俳優が是ならば演ずべしと云へる狂言にても、座主が不承知なるものあり。况や座主の外に金主ある場合には、座主俳優が合意しても、金主が其狂言ならば出金を拒絶すると云ふ時には、此一言にして百事止むを以て、其同意を得ざる可からず。又其外に何れの劇場にも、帳元仕切場奥役など云ふ輩ありて、常務の傍ら、座主または金主の顧問となりて狂言の選擇に喙を容れ、作者の立案を是非するが故に、其狂言のさだまるは、重大議案の兩院を通過するよりも難し。折衷、取捨、削除、増補、修正、改竄と手を煩したる上にて、是は面白からずと廢棄に歸すると、劇場の内幕には間々ある例なり。是に依て、偶々新劇を演ずるも、其相談漸く纏りぬれば、座方は直に脚本

は成るもの、様に思ひて、脚下より鳥が立つかの如くに作者を督促す。其作者が筆を下すに熟考の暇なきは、恰も新聞記者が日常の雜報をもつするに異ならず。其上に其草稿は、俳優の爲に、座主の爲に、情實の爲に、折角の爲に塗抹して、折角の脚色も支離滅裂すると、劇場にては尋常茶飯の事なり。是を奈何ぞ、完全なる新劇を演じて、觀者に非常の感動を起さしむるを得んや。

試に東京大小幾多の劇場に就て問へ。先づ一脚本を得て、座主は之を場に演ずべしと心を定め、然る上にて其作者に議して、其役に適應するの俳優を招聘して、場を開きたるものありやと、余は恐らく一座主も之を行ふたる者なきを信ずる也。又試に都下の文豪大家、その脚本を携へて座主を訪ひ、之を賣らん事を要めよ。彼座主は、目下これを演ずべき見込なければとて謝絶し、一文錢をも出す事を欲

せざるべし。又試に今日諸座に雄視せる立作者に向つて、卿には脱稿の脚本、直に場に登ぼすべきものありやと問へ。依頼ならば採筆すべし、既成の脚本は一部も無しと云ふを以て、却て得意とするならん。此状況にて、完全の新劇を演場にも観んとは、木に縁りて魚を求むるよりも難きなり。余が如きは随分強情傲慢にて、敢て他人の容喙を脚本に許さざるを以て知られたる者にてさへ、此事情に迫られれば、往々脚色を左右して、心ならざる改竄を草稿に加へ、場に演ずるの日に當りては、我ながら拙劣観るに堪へずと思ふと無きにしも非ざるなり。されば時に臨みて急に脚色を下し、所謂一夜漬の脚本を作らんよりは、寧ろ趣向の浮びたる時に徐に筆を下して草稿を作り、數讀數更して以て需を待つに若かじと思惟したりけるが、扱日常筆に追はれて衣食するの身の哀しさは、目前その價を見ざる貨物を仕入るゝの餘裕なきぞ残念千萬なる。然るに此豊島嵐は、數年前ふと立案して、之を演ずるの目的も無く、又別段の依頼も無きに筆を下して以て世に示し、識者の批評を待ちたりしに、其頃は時機や早かりけん、伝とも吋とも一言の評を得ずして止みたりき。夫よりして屢々訂正を加へ、今や更に之を一冊子となし、春陽堂より發兌する事となりぬ。願くは讀者諸君、文豪、名家、幸に一讀して十分の評を下し賜へ。余は其誨を更け、其説を聽き、更に筆を加へて完全のものと成し、以て他日の需に充てんと欲するに外ならず。編中叙狀の所に、淨瑠璃めきたる詞句の、所々に散見したるは、場に登ぼすの時に於て、床の文句に用ひんが爲めなるのみ。其異様なるを咎め玉ふな。

余は頃日病後の暇に、レ、ミゼラブルを翻案して、七幕の脚本に作りたれば、近日

豊島風序

これを公にして、同じく大方の批評を仰ぐべし。蓋し脚本の著作を完全ならしむるは、今日にては是も一の方便ならん歟。

治廿八年九月廿九日

櫻癡居士 福地源一郎識

目次

登場重要人物姓名

武藏國豊島城主	豊島彈正少忠陳盛	豊島家 物頭	池袋源左衛門
彈正陳盛の侄(武藏の介嫡男)	豊島民部丞秀盛	同	板橋十郎三郎
豊島家の老職後に豊島城主	練馬左門近義	同	神谷左近太郎
彈正陳盛の侄	豊島大炊助近盛	同	音羽平内兵衛
豊島の一族	豊島修理亮貴盛	同 鼓打	巢鴨八郎
同	豊島次郎富盛	同 民部丞の忠臣	長命郡司
同	豊島下野入道淨念	同 管領家の上使	落合五郎
同	須俣平兵衛尉智足	同 副使	百姓 奎助
同	鳩谷隼人助禮義	同 練馬村の悪漢	和田隼人正
豊島家の老職	秋庭掃部助	同	赤堀左馬助
同	高田法眼	同	(地潜) 金太
			(石龜) 泥八

目次

彈正陳盛の娘	鶴	姫
練馬左門の實母	阿	絹
落合五郎の妻	小	萩
鶴姫の侍女	冷	泉
同	十六	夜
同	卯	月
同	吳	服
此餘	武士	足輕
仲間	百姓	小姓
		下女等

豊島



序幕

(一) 豊島彈正軍評定

此は武州の豪族豊島彈正が豊島の邸なり。是より先に鎌倉の公方持氏公には管領上杉安房守憲實と御中悪く誅伐の思し立ちありけるに京都の公方より持氏追討の御教書を管領に下され剩へ繪旨をも賜つたりければ持氏公には管領方の爲に捕へられ永享十一年二月十日永安寺に於て生害し給ひき。然るに持氏公の公達安王春王の二方には近習の人々の計ひにて其砌密に逃れて日光山に落ち寄々に一味同心の輩を招き再び關東を復し先考の鬱憤を霽し給ふべしとて結城中務大輔氏朝を懇み給ひしかば翌永享十二年の三月に氏朝が子息結城七郎光久御迎ひに参り結城に入れ奉り義兵の旗を上げれば近國他國の大小名並に住人浪人馳集つて立籠り又古河の城には野田右馬助、矢部大炊助等を籠めて犄角の勢を張る。是に由て鎌倉の管領上杉兵衛頭清方は武藏國司龜井性順を大將とし長尾左衛門尉景仲を加勢

に遣はして鎌倉を發足せしめ續いて管領清方並に修理太夫持朝の兩將には大軍を率ゐて七月廿九日と申すに結城に着き攻立られければ御所方は籠城半年の上に及び明れば嘉吉元年四月十六日に遂に落城なし結城其外宗徒の人々には或は討死し或は生捕られ兩公達には五月十六日濃州垂井の金蓮寺にて誅せられ給ひきされば此劇は兩公達が結城に入らせ給ひし頃に初りて結城落城の後に至りて其局を結び即ち永享十二年の春より嘉吉元年の秋に至る二年越の事なりと知り給ふべし。

序幕は永享十二年三月下旬の事にて豊島一家の人々並に老黨若黨被官の輩に至るまで主人豊島彈正が急の催に由て其邸に馳集り何れも素袍の下には腹巻又は小具足に身を固め書院の疊に餘れるは大櫓に居並て彈正の出座をぞ待受けたる。其人々は誰々ぞ、先一家には豊島修理亮實盛、同次郎富盛、同下野入道淨念、須保平兵衛智足、鳩谷隼人助禮義。武士には秋庭掃部助、池袋源左衛門、板橋十郎三郎、神谷左近太郎、高田法眼、香羽平内兵衛、巢鴨八九郎を初として都合三十餘人今日の評定如何と相互に語り合ひ「今度結城中務大輔氏朝殿には子息七郎光久、家老厚木掃部助の勸に由り水谷、築田、黒田の諫を聞入れず故長春院殿持氏公の公達安王春王の兩君に憑まれて旗を上げ近國他國の大名小名住人浪人等を驅催して籠城に及

びたる事「右に付き水谷伊勢守は亂を見て退ぞくは弓箭の道に非ずとて思ひ止つたれど築田修理亮、同將監、黒田民部丞の三家老は結城殿が是ほどの一大事をば我等に仰せ合されず諫言をも御用ひなきは我等を物の數とも思召さざるに由てなりとて一同に喉を乞ひて遁世の桑門となつたる事「扱また古河の城には野田右馬助を大將として矢部大炊助以下の輩橋籠つて結城に一味いたす事「斯と京都へ聞えたれば急ぎ誅罰すべき由御教書に御旗を添へて下されしに由り管領の上杉兵庫頭清方殿には武藏の國司聽貞性順を大將として長尾左衛門尉景仲を加勢に向けられ聽貞殿は若林に陣を張り長尾殿は入間川に陣取て馳せつく勢を待つたる事「然るに新田、田中、佐野小太郎、大塚修理亮、加藤伊豆守その外の輩は御所方（兩公達方を云ふ）に成て足利庄高橋郷野田の要害に馳集り上州に攻入らんと評定を凝したる事「上州にては守護代の大石石見守憲重殿には上野並に武藏の一揆を催促して發向すべしと觸れたれど當國武藏の人々は兩方の安否如何と伺ひてか今日以て其催促に應ずる輩なき事「扱又我主彈正殿には初の間は御所方に心を寄せ内々結城に一味あるべき勢なりしが兩大將の出陣と聞くと比しく嚴重に一門一家に觸示し戦の模様を見る迄は何方へも従ふなど堅く禁制あつたるに「甥の殿の民部丞秀盛殿には若黨ばらを催して神谷川を打渡り百騎は